

雲南民族生態誌

——生態論理と文明論理——

古 川 久 雄*

Ecohistory of Minor Ethnic Groups of Yunnan: Eco-logic and the Logic of Civilization

Hisao FURUKAWA*

Most minor ethnic groups of Yunnan province have retained their traditional life styles and value systems, which are considerably different from those of the unity-oriented Han civilization, and greatly different from the logic of modern civilization. They live in separate villages under different ecosystems, engage in different forms of livelihood, and maintain their own languages by which they communicate within each domain under different cultural framework.

Their logic may be identified as pertaining to the logic of natural world. Spontaneous systems of the natural world never tend to large-scale unity. Biological creatures, for example, tend to evolve toward diversification: distinct habits, different foods, different structures of the individual body and of society. The evolution of the biological domain lies in the achievement of a higher degree of diversification.

This paper aims to elucidate the situation in which this logic survives among the minor ethnic groups of Yunnan, in spite of the earnest efforts to assimilate them by the Han civilization. The most powerful ecological barrier against the Han assimilation is the climate and the related endemic diseases, particularly malaria and other febrile diseases.

This paper also argues the viewpoint that the pre-modern history of adjacent Asian countries is connected with the pulsation of the Chinese Empire through the migration of the minor ethnic groups via Yunnan, who sought the safety and independence through trans-border migration.

I はじめに

1. 雲南は多数の異なった少数民族が棲みわけを行っている。異なった民族と言っても、新大陸のようにインディオとアフリカ黒人とスペイン、ポルトガル、イギリス、ドイツなどのヨーロッパ人が混住している状況とは異なる。新大陸は、民族混合が現在進行中で、将来、融合に進むのか、ある種の棲みわけに落ちつくのか予断を許さない。雲南の少数民族は言語系統が殆ど漢蔵語系の人々で、一部南亜語系のモンクメール語族がいると言われる程度である。し

* 京都大学東南アジア研究センター；Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

かし容貌，生業，生活習慣，感情の働かせ方などをみると，これは中国や日本も同じだが，モンゴル系以外に現在のウイグルやイラン，トルコ，東欧諸国に居る人々の混血が充分予想される。ユーラシアでは大陸全体における様々な民族の移動混淆が長い時間の中に自ずから民族形成と棲みわけをもたらしてきた現象が一般であり，生々しい傷口がパッキリと開いていることに例えられる新大陸とは，時間経過が異なる。そうした長い歴史をもつ民族が棲みわけている地域の一つとして雲南がある。

私は傣である，私は彝である，この村は佤の村であるといった意識は，これらの異なった民族の融合によって漢帝国を作り上げ，その統一を保つ大一統思想に絶対的ともいえる価値をみる漢族には馬鹿げたことで，漢人は口には出さないが，内心では少数民族を見下しているきらいがある。大方の社会経済学者の見方も漢人と同じで，少数民族への帰属意識は国民国家形成以前の遅れた状態である。現在もその様な意識がある地域は交通と情報の途絶した辺境であるに違いなく，未開地域と同義であると言うことになろう。つまり漢人も社会学者も一つの文明の立場からみている。漢帝国の中央権力にまつろわぬ西南部の少数民族を漢人は西南夷と総称し，個々の民族にも例えばケモノ扁のついた字や，窩泥といった侮蔑的名称をあてた。このことは日本にきた征服民族が先住民を土蜘蛛とか熊襲などと呼んだことと同類である。

覇者の治にまつろわぬ少数民族，近代国家概念にまつろわぬ少数民族は覇者や社会経済学者には問題かもしれないが，生態的な意味で進歩とは何かを問い直す上で，少数民族の棲みわけ現象は重要な示唆を蔵している。しょせん，空間のどこかに身を置かざるを得ない人間はまた様々な網目を作らざるをえない。近代以前の社会では個々の人間と人間集団の自発性がこの過程に大きな役割を果たしてきた。その状況は例えば様々な種類の蜂が蜜を吸う花を異にし，朝と午後と夕方と時間を異にし，樹冠部と林床部と高さを異にするという具合で，無駄な摩擦と闘争を避け，蜜集めの能率を高めると同時に，花との関係で独特の体制と集団の大きさを調節してきた現象に似ている。かつて今西錦司が述べた意見，生物社会の進化は棲みわけの高密度化であるという状態が近代以前の社会にはあった。雲南の少数民族の棲みわけ現象はその状態を本質的に保持している。それはいわば生物社会の論理に似た生態論理の世界である。生態論理の世界は自発的で速やかに進む生体過程とその生体過程を踏まえた個体の自己保存と増殖の意志の上に立っているので，本来的に無駄な摩擦がなく，平和であり，コストが安い。覇者や近代国家が様々な人工空間を作りそこに人間を位置せしめる為に莫大な金をかけ，膨大な法律を作ることに比べ，自発的に他との調和を計りながら独自ニッチを見出し，多数の民族が棲みわけている状態は生態論理を体現化している。近代社会が小さな政府と環境保全を迫られているとみれば，雲南の少数民族は現代世界に遥かに先んじている。

中華帝国，中華人民共和国の中央権力は，例えば，日本の中央権力と同じく，文明の論理に立っているのに対し，少数民族は生態論理の立場に立っているといえる。とは言っても，私は

生態或いは自然と文明を対立的に見てはいない。本来両者は全体と部分の関係であって、対立するものではない。人間が勝手に文明を自然の外にあると見ているだけである。インドでいうマヤ、幻想にすぎない。文明という実態があるわけではない。文明を作る人間自体が自然生態を離れて存在できない。仮の存在として在る人間の桎梏がまた自然生態を離れて存在できない文明の桎梏でもある。そのよい証拠に永遠に存在する文明は未だかつてない。全ての文明は生物と同じく滅ぶべきものである。しかし滅びて無に帰するのではない。滅びた生物個体は次の世界の個体を生み、一つの支配生物種が滅びたあとに別の支配生物種が生まれるように、文明も次の文明を生み出す。新たな文明の準備を人間もどこかで行っているに違いなく、そうした潜在的な力は現在の支配的文明地域の外、それらに挟まれた地域に在るように私は思っている。つまり、現在の文明に毒されておらず、活力ある生態エネルギーに直接棹さしている地域である。

2. 雲南の人々の言葉で忘れられないものがいくつかある。西双版纳の哈尼族の男は、どうして盆地から遠い山上の老寨に住み続けるのかという問いに次のように答えた。「山高，皇帝遠」。高い山の上には皇帝の支配権も及びません。この表現は意味深い。皇帝，今は中華人民共和国政府だが，が居て文明圏があることは知っている。しかし，そんな人工的制度や支配権力と別個の世界がある。高い山，遠い雲南，そこにある自然の中で，権力に掣肘されることなく，暮らすことこそ貴重なのだという独立不羈の精神がみなぎっている言葉である。

昆明近くの谷合いの村で会った青苗の爺さんは，文革の間どうしていましたか，造反有理の行動に加わりましたかという問いに，会議には出席したけれども造反はしなかった，と言い，「漢是漢，苗是苗」とつけ加えた。漢人は理屈でああ言い，こう言い，潰したり作ったり，金儲けに没頭する一方で，投機に失敗して素寒貧になってしまう。自分らとは違う人間だ，と言って立ち上がると，上げ下げの多い，しゃくる調子のベトナムと似た歌を歌い始めた。

漢族と少数民族の関係は，面白いものがある。我々の共同研究者である雲南省民族博物館の尹紹亭氏は漢族だが，奥さんが白族で，一人子政策になるまで，夫婦の子供は漢族と登録をしていた。しかし一人子政策下で少数民族は複数の子供が許されることになると，子供達の登録を白族と修正したという。このように少数民族と漢族は相互に異は異と認めながら，異を固定せず，互いに融合と共栄の側面も持っている。この関係が成立した背景には，中華帝国の柔軟な政策も与っている。それは羈縻政策といわれるものである。漢帝国成立の初期，周辺の異民族の征討に国力消耗が激しい中で，今また夜郎征討に四川省から士卒を徴発して西南夷へ通ずる道を作ろうとする皇帝を蜀の父老の言にかこつけて勸止しようとした司馬相如が上奏したと言われ，「天子の夷狄に対する態度は，牛や馬をつなぎ止めておくように，交渉を絶たない程度にしておくのが筋道である」〔野口訳 1972：司馬相如列伝〕と表現されている。東洋史辞典によると「中国の王朝が異民族を支配する一方法。中国は周囲の弱小民族に対し，武力を用

いることなく、その地の有力者を懐柔し、中国の官爵・恩典を与えてそれぞれの風習に従って自治を行わせ、中国皇帝はこれを通じてその人民を間接に統治し、これを羈縻と称した」。属地には唐代に都護府がおかれた。雲南は漢代に永昌郡がおかれ、元代に雲南省となり、属地とは位置が違うのだが、統治の実態は、土司、つまり土着有力者による自治を認めたもので、羈縻政策で推移し、明代に改土帰流、つまり中央から派遣される官吏が統治する方向が進められるのだが、辺境には、土司制度が清代に迄残る。

雲南に土司制度が長期間存続した理由は、尹紹亭によると、マラリアなどの熱病を恐れて中央官吏が任官を行わなかった為であり、清朝の保護領に取り込まれたチベットで高山病が恐れられた為に土司制度が存続したことと似ているという。つまり高山地の西藏とマラリア瘴癘地の雲南はそれぞれ生態的理由で土司制度という羈縻政策を採らざるをえなかった。哈尼族の男が、「山高、皇帝遠」という現実を温帯の人間と亜熱帯の人間の生態的適応能力に根を持っているのである。そして様々な少数民族が、中央との関係を絶たない程度に保ちながら、生態論理と文明論理を主体的に選択する過程が、棲みわけという結果をもたらしている。

突飛なようだが、羈縻政策は、中国独特の犁牽引法と関係があるように思う。その方法は揺動犁といわれ、西アジアやインドなど犁の先進地域と異なる。西アジアでは、くびきと犁轅の結合が固定される。つまり、二頭の牛首に通したくびきの上に長い犁轅を置いて固定する。動力を車輪に直結する方法である。それに対して、犁耕法を西アジアから輸入した中国では、この直結動力伝達方式を変える。甘粛省の嘉峪関魏普墓の磚壁画には西アジアと同じ方式も見られるが、これは河西回廊に位置する同地が西方の影響を直接的に受けることと関連していると考えられるが、既に漢代より甘粛省武威磨厱咀子の明器のように、短い犁轅の犁が現れ、その場合は牛の頭や首に牽引用ロープをかけ、それを短犁轅に連結したと考えられる [渡部 1991 : 65]。動力と犁を間接的に連結する揺動犁と言われるものである。この方法は犁を操る人の技量によって、耕深を自由に変えられる利点もさることながら、牛が必ず真っ直ぐ進まなくとも犁は直進出来る点で、牛の動きの変化に許容幅が広がる点、いかにも羈縻政策と相通ずるものがある。司馬相如の「牛や馬をつなぎ止めておくように」というたとえは杭に繋ぐ時のことだけでなく、犁牽引の結索法をも指したものと考えられる。唐代以降、中国は揺動犁一辺倒となる。

3. 雲南の特徴を考える際、その地政学的位置を忘れるわけには行かない。そこは中国にとって東南アジアとインドへ至る通廊である。特に関中、華北と関係の深い四川盆地から人と物が雲南を通過して南アジアへ動くのである。史記に有名な話がある。漢武帝に大月氏へ派遣された張騫が語る所々では、張騫が大夏（ヒンドゥークシ山脈とアムダリアの間のバルフ地方）に居た時、邛（四川省成都西南、四川盆地西縁の扇状地にある町で、漢代の鉄農具生産地）の竹杖、蜀の布を見たので、その入手経路を尋ねたところ、身毒（インド）で購入したとの答を

えた〔野口訳 1972：西南夷列伝，280，大宛列伝，211〕。この情報をもとに漢から大夏に至る南のルート探索計画が実施され，四つのルートで送られた使者はどれもチベット高原，雲南高原で原住民に阻まれ，使命は未完に終わったが，蜀の商人で滇越（イラワジ上流のビルマ北部地方に比定されている）に出かけて交易する者があると，雲南経由ビルマに至るルートの存在が知られることとなった〔同上書：大宛列伝，281〕。

張騫の死後，東越を漢が滅ぼしたことが西南夷地域にも知れ渡り，「蜀の西南の蕃夷はみなふるえおののき，漢の役人の派遣方を請願して入朝した」〔同上書：大宛列伝，283〕。特に滇王は親漢的で，「西南夷を離れて国をあげて降る。そこでその地を益州郡とし，滇王に王の印を賜い，元通りにその民の君長とした」〔同上書：西南夷列伝，212〕。要するに，前漢時代，雲南を経由してビルマ及びインドへ通ずる道があり，四川の絹や邛杖がインドへ運ばれていた。

滇王が親漢的だった話には背景がある。戦国時代末年，楚の將軍莊躡が威王（前340-329）に命じられて滇池まで行き，兵威によってその地を平定し，帰国しようとした折に，楚が秦に滅ぼされ，道が閉ざされたので，引き返して，家来もろとも服装をかえ，土着の習俗に従い，滇王となった〔同上書：西南夷列伝，210〕。楚の住民は百越系や百濮系（モンクメール系民族を指す）の南方民族である。楚の祖は初め商鼎に小さな封地をもらったが，次第に南下して漢水の丹陽，長江の郢（今の江陵近く）へと移動し，長江地域の平定を進めた。この結果，楚国の臣民となった原住民も勿論多いが，南方や西南方へ百濮，三苗，百越などの稲作民族が大移動を起こした〔何 1990：15〕。そうした原住民の往来で知られていたルートを莊躡は辿ったのだろう。莊躡は楚の莊王の名前を受け継いだ末裔であり，その系統の滇王がかつて戦国の大国であった自国を滅ぼした秦を撃った漢に対して敵意よりも親近感を抱いたとしても不思議はあるまい。

4. インドないしインドシナと中国を結ぶルートとしての雲南の位置は，文献的には史記の時代，多少の推定を交えても戦国の楚を遡ることは出来ない。しかし，考古発掘の資料を加えると，少なくとも商代前期（前二千年紀前半）まで遡ることは可能である。手がかりは長江流域四川省広漢県三星堆遺跡に出土するおびただしい象牙である。三星堆遺跡は巨大な青銅製面具や立人像，高さ3.5mに達する神樹などの青銅製品の出土で知られ，黄河流域の河南省安陽殷墟と並ぶ中国青銅器時代の開幕を告げるものである。その祭祀坑で青銅器以外にも70本を越える象牙，大量の玉，海貝が発見されている。象牙と玉はそれぞれ別の地方からもたらされたものかもしれないが，象牙と玉を同時に産する地方となるとビルマが断然有名であり，蜀は滇越への通路として古来有名であることを考えると，三星堆の大量の象牙と玉がビルマから雲南ルートで運ばれた可能性も大きい。甲骨文に多出する「征蜀」，「伐蜀」は黄河権力が蜀から象牙，玉，特に象牙を入手する為に行った軍事行動であったとも考えたい。

但し、三星堆の象牙の来源については巴蜀、つまり四川の産物とする意見もある。象牙製品は中国各地の遺跡で出土しているのである。殷墟でも象牙のみならず、肢骨や背椎骨が出土し、また彫刻の施された象牙製礼器やト骨がある。もっと古い新石器時代遺跡、例えば河姆渡遺跡でも象牙の彫刻や象の距骨が出土し、上海青浦福泉山遺跡の崧澤文化層から象牙製の鐲が出土している。四川省の巫山大溪文化遺跡にも象牙質の装身具が出土しているという具合である。しかもそれらが全てインド象であることから、殷周時代まで中国大陸にインド象が生存し、特に古代四川には、象を産したことを示す古文献も多いという [江 1993:199-200]。象牙ビルマ由來說の不利は、石寨山遺跡など雲南に象牙の発掘がないことである。将来の発掘にまちたい。

ところでこの三星堆遺跡のある広漢県南興鎮一帯は盆地西縁の山裾の扇状地性台地に位置し、版築の城壁が断片的に残り、復元するなら城内面積は3～4 km²になる。その中の土堆から上記の遺物が発見された。同様の城壁遺跡と土堆は南興鎮の真武村、回竜村、三星郷仁勝村などにも分布すると三星堆遺址工作所の話である。土堆の元の形を復元するすべはないが、成都市北郊にかつてあった羊子山土台遺址は三段の土堆から成る、いわゆる段台ピラミッド型を見せ、各段の高さは10m ないし6 mの高さがあるジグurat型遺址である。最下段は一辺が103m、最上段は31mの四角形を積み上げている。成都市の西、温江県に魚鳧王墓といわれる土堆遺址がある。これも今の三星堆遺址同様相当削られているが、西端に磚壁の段が一部残っており、段台ピラミッドだった可能性はある。魚鳧は春秋期に成立した開明王朝以前の蜀王で、三星堆を作った勢力と密接な関係にあると考えられている [蒙他 1988:10-30]。開明王朝以前の蜀王の系統は蜀王本紀によると蚕從に始まり、その活動舞台は岷江を遡った茂県—汶川一帯のチベット高原東縁にあり、遊牧民の羌族系である。その次の柏灌王は都江堰の灌口に移り、四川盆地の水源に勢力を築く。次の魚鳧王は綿陽の湔山に田すとあり四川盆地の水田開拓を勢力根拠にしたと考えられる。その立地は三星堆と似た山裾の扇状地性台地である。雲南との関係は次の杜宇王において強まる。蜀王本記によると杜宇は天より墮ちて朱提にとどまると天孫神話が語られる。朱提は滇東北の昭通地区である [同上書:21]。昭通は蜀から滇池へ至る最短ルートの関門を占めており、今までの推定を更に伸ばすなら、ビルマ交易で富を築いた四川の勢力が雲南へ進出してきたと考えたいのである。

5. 勿論、ビルマ、インドのみならず、インドシナ半島の様々な地域へのルートでもある。後述するように、焼畑や水田耕作の形態、犁耙といった農具の形、農耕儀礼、など生業と祭祀の特徴は中国本部部から東南アジアへの漸移地帯としての雲南の位置づけを明確に示している。中国の学者のもつ根強い史観に、華北平原からの華夏系民族の南下に伴って長江流域にいた濮、越系の諸民族が東、南へ遷移し、渡海したという考え方があつた。従来この見方は華北が文化先進地帯、華南を後進地帯と単純化する傾向があつた。事実は最近の考古発掘によって、

華南の稲作文化圏が農耕の古さにおいても、青銅器文化の発展の程度においても華北と遜色のないことが明らかになりつつある。しかし、それにも拘わらず、華夏系民族の南下が華南の民の東遷、南遷を引き起こしたとする見方は有効である。問題は文化の発展程度の差にあるのではなく、文化の性質の違いにあると私には見える。一言でいうと、華夏系の文化は戦闘を辞さず、また強いのである。殷墟と三星堆の出土品の違いはこの点で誠に明瞭で、殷墟では戦車を埋めた車馬坑や殺人儀礼で斬首された人骨、銅剣、剣戈などが出土する。三星堆では武器の類は玉製品に置き換えられ、殺人儀礼の犠牲者も面具、銅人で置き換えられ、また後の道教との関連を示唆するような神樹の出現を見る。殷墟の文化は草原の騎馬遊牧民の猛々しさを、三星堆の文化は森林住みの農耕民のアニミスティックな素朴さを表現しているように思うのである。この違いが青銅器文化の初期に既に現れているところにそれ以前の時代から地域を形作ってきた風土的な作用があり、その作用が華北と華南という異なった文化地域の分化を導くのである。中国の中央権力が成長するにつれて、各地の青銅器の異質さは均斉化されていくが、戦国時代に至っても各地域の特徴は残存し、例えば越式銅鼎とか、靴型青銅器といった形式が嶺南地方に特徴的である。楚の荘蹻が入滇した時、既に相当中国的に均斉化された青銅器文化が運ばれただろうが、雲南はまた異なる独自の青銅器文化の進入と進展を遂げていたところでもある。よく知られた例は、戦国末期から前漢中、晩期に比定される晋寧石寨山の古墓群や江川李家山古墓群で、石寨山6号墓からは滇王之印の金印が出土している。これらの古墓群の青銅器はよく知られたように多数の銅鼓を出土する。銅鼓のみなら広西や貴州にも出土例は多いが、石寨山の銅鼓には騎士を中心とした戦士達の戦闘場面や背射の騎士達、殺人祭の群衆人物像があり、そこには火腿肉が供せられるなど独特のモチーフがある。また虎や豹が牛や鹿、猪の背に食いつく、典型的には李家山の牛虎像や、銅剣に刻まれた人と虎、獅子の闘争画といったスキタイモチーフが極めて特徴的である。また銅斧や銅啄の上に立つ牛や鹿、豹といったシリア・ヒッタイト的なモチーフも数多い。石寨山の銅房模型はまたいわゆる転び破風型高床家屋である〔雲南省博物館 1959〕。スキタイ、シリア、ヒッタイトモチーフの多さは、中央アジアを通して西アジアの文化要素が直接入ってきていることを想定せしめるものである。

雲南の銅鼓とよく似た銅鼓が紀元前後にベトナム紅河流域、インドシナ半島のメコン川流域、マレー半島から更にインドネシア島嶼域へ分布を拡げることはよく知られている。銅鼓は出なくとも、鼓の絵が石に刻まれたり、人が水牛や象と戦う戦闘モチーフがあるスマトラパセマール高原の巨石遺跡の例もある。

要するに中央アジアから青蔵走廊、藏彝走廊を經由した文化の流れが中原へ、また雲南へ向い、中原からは蜀、華南を經由した雲南への流れもあり、雲南、華南から更にインドシナ半島やマレー半島へ向かう人と文化の伝播が長期に亘って存在したと考えてよからう。その移動と混淆の過程で様々な地域が析出し、それぞれ異なりつつも相互に影響し合う地域の連環とし

て、東アジアと東南アジア、更にチベット、蒙古が特徴づけられる。中華帝国が成立した秦漢以降は、大きな中心に中華圏があり、その周辺を中華周縁圏がとりまく形である。東南アジアと中華圏の関係では雲南が中華周縁圏の中の要の位置を占める。そこは中華圏及びチベットと東南アジアを結びつける漸移帯であり、跨境民族地帯である。そこで培われた文化伝統はインドシナ半島とビルマの人々の文化的精神的支柱として強固に存在し、人工的な国境を跨いでいる。タイ、ビルマ、カンボジア、ベトナムなど国家の相異なった装いのベールを剥ぎ取ると、中華周縁圏を跨境混淆してきた民族集団としての共通性を相互に認識する構造があると私は見ている。ベトナムやビルマのアセアン加盟を認めようとする動きはそうした一体感の現れであり、雲南を含んだ中華周縁圏の出現を今後予想させる。そうしたことを一方では念頭に置きながら、雲南という漸移帯の地域論を考えてみたい。それがこの一文の狙いである。

II 雲南の構造を考える

1. 滇から大理まで

尹紹亭氏の話と『雲南簡史』の記述をもとに雲南の歴史を生態的に考えてみる。

中華権力は周辺の少数民族に対して、牛馬を繋ぎ止めておくように、交渉を絶たない程度に関係を保持しておく羈靡政策をとった。これを少数民族の方から見ると、中央権力が強くなれば入貢し、内乱と戦乱で中央の力が弱くなれば、独立的自治で行くことになる。羈靡政策が確立するのは唐代で、雲南省も漢代、三国、晋代は直接統治だが、実態は現地有力者を太守や県令に任命することが多かった。

前漢時期、今の雲南地域は大略益州郡に包括され、郡治は滇池南岸の晋寧に置かれる。益州郡の範囲は江河から怒江を連ねる線までで、その外側は、化外の地哀牢であった。温帯の中央官吏は暑熱地の瘴気に弱いので、低地へは住めない。前漢の益州郡の範囲を高度で表現すると1,500ないし2,500mの高原に中心がある。後漢時期、哀牢に永昌郡がおかれ、今の西南部一帯が包括され、郡治は今の保山市の近くに置かれた。領域の最低高度は一気に600mまで下るが、郡治の保山市は約1,700mの高原にある。思茅、瀾滄、保山地区は今も少数民族の優越地域で、盆地の開発は明代以降に始まるものが多く、この地区への漢族の進出は漢代には微々たるものだったろう。

両漢代は中央権力が強く、郡治が新設されたり、漢武帝が永昌郡へ内地の漢族を移民させたり、目新しい事態が進行するので、少数民族も恭順的で、哀牢人が漢領土へ移民内属する例が何回も生じた。その中でも大きな事例は、後69年に哀牢王柳貌が77王統治下の領民55万人もろとも内属した事件である。この内属を受けとめる為に哀牢県（今の騰沖、竜陵地域）、博南県（今の永平地域）が設置され、永昌郡新設の引き金となった。また永昌郡境外の掸人が洛陽へ

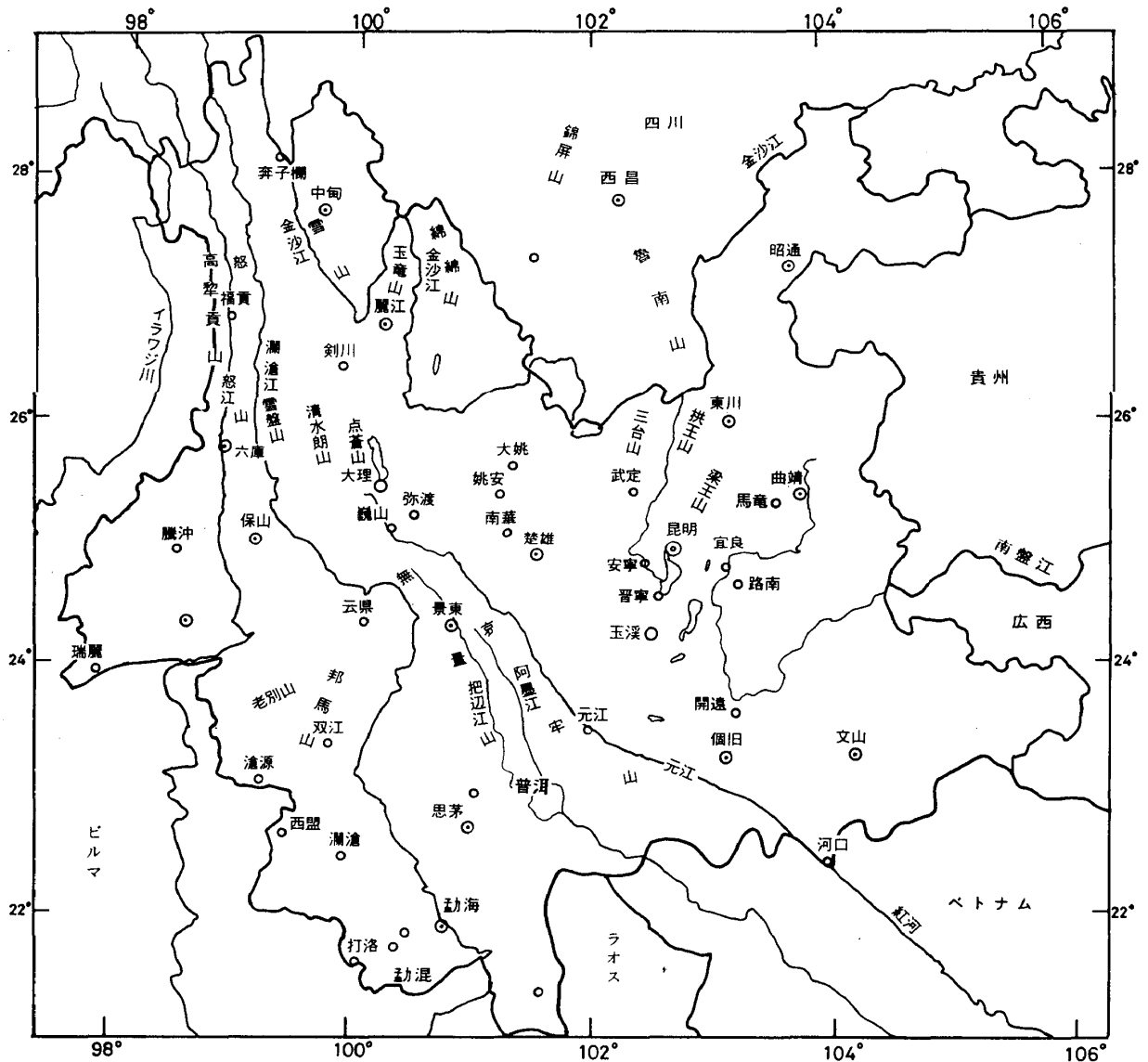


図1 雲南省位置図

珍宝を貢献し、インド魔術らしき雑技を演じたという記述もある。

一方、反乱も屢々生じ、後118, 119年の大争乱では永昌, 益州全体を巻き込む混乱となった。しかし、事態を收拾した後漢朝廷が腐敗官吏100人以上を処分し、政府が対少数民族関係を制御しているかの如きである。

三国時代, 呉, 魏に圧迫された蜀が後方の憂を除く為、雲南の統治と屯田開拓を進めた。諸葛亮は後225年入滇し、統治の要である郡県化を密にする為に益州郡を建寧, 朱提, 雲南, 興古4郡に改組した。建寧郡は、雲南中央部を占め、今の曲靖に郡治を移した。朱提郡は東北部の昭通地区で今の昭通に郡治を置いた。雲南郡は大理, 麗江地区で、今の雲南驛に郡治を置き、興古郡は南部の今の文山自治州で、宛温(今の砚山西北)に郡治を置いた。

諸葛亮の統治地域も高度は大略1,500~2,500mの範囲で漢代と変わらない。しかし漢族と少

数民族の接触は相当前進したと考えられる。少数民族から精兵を選んで蜀軍に編入する一方、漢代に入滇した漢人で土豪化した勢力（大姓といわれる）や現地土着勢力（夷師）に部曲つまり奴隷農民の保有を許し、政府の屯田耕作に当たさせた。そうした奴隷農民は夷と漢の混成集団であった。こうした屯田開拓の結果、大理の河海地区にも稲田が出現したという。

晋代から五胡十六国、南北朝末までの300年間は統一権力がなく、周縁圏の少数民族、殊に鮮卑や胡といった騎馬民族が中原へ侵入をくり返す乱の時代である。西晋の始まりに既にそうした形勢は現れ、雲南の4郡は寧州として一本化され、事実上、現地勢力が自治を進め、勢力を蓄える時期であるが、同時に中原の戦乱的状况を反映して寧州の西晋官吏は暴政統治を行い、雲南も乱の時代となる。

隋代には中央アジアの東西交易路を転ずる位置に突厥、吐蕃、タングートなどが勢力を持ち始める。チベットは唐代、7世紀初に統一されて唐朝はこれを吐蕃と呼んだ。チベットの膨張圧力は強く、唐朝は境界に点々と防衛基地を置いた。雲南には南華の北、大姚と姚安に衛所を設け、四川から毎年500人の戍兵を配置した。しかし、同時に彝族社会に出現した現地勢力を育成する方針を取る。これが南詔である。

詔は王国の意味で、西昌地区から雲南の昭通、大理にわたる一帯に6つの詔があり、その最も南、現在の巍山周辺に本拠のあった蒙舍詔の王皮羅閣が8世紀半ばに他の5詔をも併合して統一し、南詔王国を建て、都を今の大理においた。唐朝は皮羅閣に雲南王の称号を贈る。738年である。6詔の分布地域は、今もそうだが、烏蛮、今の彝族の卓越する地域で、南詔は彝族が主体の国であるが、大理は交易勢力の白族の町であることから、南詔は彝族と白族の連合勢力とする見方もある。

彝族は壮族に次いで人口の多い少数民族で500万を越えるといわれ、その60%が雲南高原に住む。貴州や広西州にも住むが、故地は四川省涼山地方邛都（西昌東南）と滇池といわれる。地方的に様々な呼び名があるが、時代的な変遷について中国の学者のもっている共通理解は、史記では「皆編髮、隋畜遷徒」の嵩、昆明、晋代の大姓である爨、唐代の烏蛮、元、明、清の羅羅もしくは僕僕である。

南詔は唐朝の支援の下に洱海の西、蒼山麓にある河蛮（白蛮つまり白族）の大和城、羊苴咩城、大厘城などを奪取した。その狙いは南華北の唐の衛所と連携して吐蕃の兵力に対抗するもので、要するに南詔成立は唐の吐蕃牽制策にその根がある。大和城を見に行くと大理老街の南を道から西へ入った高さ200mばかりの小山の上に今は廃寺が残るのみで、遺構は何もない。大理老街は白族のビルマ、チベット交易基地で、緩く傾斜した扇状地低地であり、今も25mもの分厚い城壁の城門が残る平地城壁都市である。烏蛮も後に大理国を建てた白族も商業民だが、烏蛮は低地よりも山地高原をわたる遊牧的商業活動に生活の基礎がある。烏蛮は四川涼山の例では奴隷制をもち、曲諾といわれる農奴農民、阿加といわれる分居奴などに農耕をさせる

体制なので、鳥蛮は農業的基盤に立った勢力と思いこんでいたが、そうではなくて、貴族階級は遊牧的商業を行い、農耕は農奴にまかせるという人々であったのだろう。南詔鉄柱という建国記念碑が大理南方の弥渡新街の条里水田地帯の一隅、廟前村にある。鉄柱そのものは変哲もない鉄柱だが、廟堂に祭柱図の壁画がある。それにはササン朝ペルシャの銀の水差しが描かれていて、鳥蛮の活動範囲の広さを示唆している。そういえば今も彝族の女性の衣装はイランの女性がつける、髷の多い足元まで届く長スカートで、色彩豊かな染めもよく似ている。

条里水田といえば、大和城から見下ろした洱海沿いの低地にも広がっていた。その条里水田の開田時期は分からないが、元時代の「大理行記」に、「大理は阡陌累々」と記述があると尹紹亭氏が言う。南詔時代に既に存在した可能性もあるが、その存在を以て南詔国を農業領域国家と誤解するのは危険である。吐蕃—南詔を結ぶ交易ルートは大理で二つに分かれて、一つはビルマ、ラオス、タイへ、他は四川、貴州を経て広東や中原へ連なる大陸内部の幹線ルートである。交易ルートの要地に国が成立したのである。

南詔と唐朝の関係はそれぞれの自負心と周囲の状況に左右されて、和戦入り交じった複雑な推移を見せる。吐蕃を抑え込んだあと、南詔と唐は次第に反目を強める。唐朝は南詔が次第に驕りを増していると思い、南詔は掣肘的態度をとる唐朝に不信と不満を抱く。また唐朝は安祿山が、闘えば必ず負けるにも拘わらず、各地の節度使を兼併し、楊貴妃に引き立てられた楊一家の権勢に皇帝への求心力が揺らぎ始めた頃である。こうした状況を見て南詔王は吐蕃王の義弟となり、小競り合いの後、天宝戦で南詔と唐の確執は燃え上がる。754年である。この時、南詔軍は象部隊を繰り出して大勝を収める。翌755年に安史の乱が中原を覆い、10年間、中国は周縁圏に対する統治能力を失う。この間、南詔は支配地域を最大限拡大した。北は四川省の塩原、西昌、東は貴州々境まで、南は西双版纳まで、西はイラワジ川を越えて、チンドゥイン川まで、版図を拡げたとされる。

安祿山の反乱によって引き起こされた安史の乱が終息し、治が回復されてくると、状況は再び転回する。吐蕃と一旦は連合した南詔だったが、吐蕃と南詔の関係は悪化する。雲南簡史によると、その原因は吐蕃が南詔を手下と見て、重税と賦役、毎年数千人の兵士の兵役を求めたことにあるという。それに、南詔自体、交易を広範囲に行っていて、吐蕃の力を借りる必要もない状況にあった。吐蕃自体、安史の乱終息後の唐と和を結んでいる。そこで、南詔は42年間の離反の後再び唐に帰順する。唐朝は南詔の拡大した領土に節度使を置く。つまり版図の拡大を計ったわけである。中国歴史地図によると、イラワジからチンドゥイン川上流に麗江節度使、今のラオス北部を含む地域に銀生節度使が置かれている。支配の実態は分からないが、南詔も唐朝も、転んでも只で起きない精神が充溢しているというべきか。

南詔時代、雲南の社会に生じた大きな変化は、蜀の諸葛亮の政策に根があると思われるのだが、農奴や奴隷を使った生産構造の為に、領域内外の民族をあちこちへ遷移させ、民族の棲み

わけ状況を一層複雑化したことだと尹紹亭は言う。雲南簡史によると、例えば、漢代に入洱して土着化していた爨氏が唐朝に反した時、唐と同盟関係にあった南詔王はその勢力を削ぐ好機ととらえて滇池周辺のその部族20万戸を大理州と保山地区へ移して白蛮としたとある。また洱海周辺低地に居た河蛮を祥雲、昆明地区へ移したり、驃の住民三千人を昆明へ移したりという具合で、奴隷使役による生産の向上と、有力部族掣肘を綯い交ぜた政策が南詔王と唐朝の、ついたり離れたりの関係の中で遂行されたようだ。結局、白族と奴隷・農奴の反乱で南詔国は滅亡し、大理国が建てられる。中原は黄巢の乱のあとをうけた軍閥割拠の時代、五代十国の分裂時代に入っている。

大理は南詔と違って封建制をとり、夷師や大姓に世襲領地を分封したというのが、土着大勢力が割拠することにおいては同じで、この点の詮索はあまり興味が湧かない。むしろ興味を引くのは大理という町である。城壁の一部と城門の残る大理城（今の老街）は一言で言うとオアシス都市である。築かれたのは資料によって異同があるが、ともかく唐代、南詔の時代である。そして南詔が築いたというよりも白蛮あるいは河蛮が築いた町を烏蛮が奪取したと考えられる。オアシス商業都市を遊牧民が支配下に置いたのだ。似た構造は新疆から甘粛の交易路地帯にもあると私は思っている。そこではイラン系の定着オアシス都市をトルコ系の遊牧騎馬民が支配すると共に、次第に混淆してウイグルという民族を作っている。大理の場合、キャラバン都市の住民白蛮の系譜をイラン系だと言うつもりはないが、町の構造がオアシス都市だと思うのである。

大理城は陽苜咩城といわれ、これは漢代の葉榆県城に遡るとする見方もあり、相当古い。南北に城門があり、城門の上には二階建ての重厚な楼が立っており、これは甘粛、陝西の楼門同様、緑、淡青、濃紺、黄、朱で鮮やかに彩色されている。いわゆる、唐代洛陽の色である。洛陽では唐代に流行する色合いだが、これは洞窟壁画で見ても、西へ行くにつれ、敦煌、キジル、ベゼクリクと次第に古い時代へ遡るし、中原では鮮彩色嗜好は色薄れていくのに対し、西では現在までに引き続くオアシスの色である。

道の舗装は石畳で、道中央部の暗渠排水へ緩く傾斜している。これはローマ型都市でも見られるが、もとを辿ればオアシス都市のデザインである。道沿いの裕福な商人の家や官庁は三房一照壁の構造をもち、敷石のパティオ風中庭を三つの棟で取り囲む形だ。棟の壁やヒンブンの衝立壁は照壁といい、壁画を描くキャンバスになる。その色彩は白と紺を基調とするスッキリした配色だが、かつては楼門同様、唐代洛陽式の彩りだったろうと想像している。照壁の前には石囲いの花壇を置く。

城内にはまた五華楼という高い楼門を持つ広場があった。孫引きだが、楼門は高さ30mで、囲まれた広場は2.5km四方という [方 1987:439]。大きさは誇張だと思うが、これはキャラバンセライだろう。各地から集まるキャラバンの馬、ロバを繋ぎ、商品を保管し、同時に開

壁に商人宿が連なる構造であったろう。

大理の場合、市は大理城の西、蒼山麓の三月街で開かれたものが有名で、殊に多数の馬市が開かれ、マルコポーロもこの地方にはたくさんの馬が飼養され、それが皆インドへ売られることを述べている〔愛宕訳 1970：311〕。また、思茅地区から運ばれる茶、それもいろいろな大きさに固めた磚茶、沱茶、が重要な取引商品であった。現地生産の木綿布の藍絞り染め、大理石をはめ込んだ木工家具、陶磁器も市に集まり、ビルマの玉や飾糸、北方の薬草、南方の香辛料などと交易されている。こうした交易と生産の資本家が集まっていた喜州鎮という有名な集落がある。ここには見事な照壁をもつ白族住宅が集まっている。

チベット、東南アジア、四川を結ぶ遠隔交易基地大理には様々な文化モニュメントが作られる。9世紀建立といわれる崇聖寺三塔は西安の小雁塔に酷似しているが、大塔は69mと遥かに高く、蒼山を背景に純白の三塔が鼎立している様子は大理の繁栄と文化的誇りを雄弁に語っている。少し北の賓川鷄足山にある多数の寺堂は、チベット仏教徒やビルマ、タイの上座部仏教徒も参詣する有名な寺院で、その理由は仏歯が納められているからである。劍川には南詔の王像を彫った石鐘山洞窟寺院があり、波斯国人の銘をもつ人物像も刻まれている。

彝族は漢民族を作った氏羌系の遊牧民族、白族は漢化の相当に進んだオアシス交易民、その両者が雲南西部において内陸交易ルートの高原部分を占拠して独自の文化圏を作り上げた次第である。中華権力はその圏域を羈靡政策と文化的影響で緩くつなぎ止め、その圏域を外域勢力の緩衝帯とすると同時に、異なった生態系の物産を集めるルートとして利用した。この関係を彝族、白族の方から見ると、広域から集める物産の大消費地として中華圏を利用すると同時に、中華権力と外域勢力の間でどちらにつくか自由な選択を確保して独立不羈の生活を行う。これが雲南少数民族の基本的な生活原理であり、そのパターンを宋元以前の二つの民族が作り上げたのである。

2. 明代ふたつの傣族国家

宋代は中華勢力が中華圏の平定に忙しく、周縁圏を統治する余力を欠き、雲南は大理国の自治にまかされた。こうなると大理国でも内部分裂が多発し、地方は少数民族割拠の状況が生まれる。

元朝はユーラシアに跨る広大な領域を治めねばならず、雲南に構っている暇はないが、軍隊を動かす膨大な軍糧が要る。そこで、10万の大軍で大理城に入城して1254年大理王国を滅ぼした後、雲南行省として全体を一単位に束ね、専ら軍屯開拓に力を注ぎ、軍糧補給基地にする方針を追求した。雲南府志の各篇を見ても、元代になると上田、下田とクラスを分けて、徴集可能米の計算を実に克明に行っていることが特徴的である。また雲南驛路の開設、雲南の通貨であった貝貨と金銀貨の交換レートの一定化など、道路、通商を改善して、ともかく軍糧徴収の

便を計るという具合で、統治方針は単純だったかに見える。つまりは地方勢力を分封するということである。その自治的雰囲気の中で、傣族集団が力をつける。

傣族集団が力をつけた背景にはもう一つの事件が与っという。それは元によるパガン朝の滅亡である。その契機は1277年、バーモの上流にある金齒族の頭目がパガン王国に攻撃され、雲南行省に救いを求めたことである。この戦闘は今の保山地区大盈江の盈江付近で行われたようで、ビルマ側ではガサウンジャンの闘いとして知られる。雲南行省は大理路蒙古人千戸長である雲南路宣慰使都元帥や、大理路総管といった出先の軍隊がこの戦闘に当たった。元史の記述によると、緬軍は4, 5万人、象800頭、馬は万頭、これに対して元軍はトルコ兵を主体とする700人で闘い、象に弓剪を集中して緬軍を大破した。その後、元軍は1283年にはバーモを占領し、1287年にはパガンを占領して、パガン朝は滅びた。この後、イラワジ平原北部は統一勢力が消えて、シャン族の諸勢力が分立する。

元支配が終わり、明代に入ると、雲南西南部に二つの傣族集団が勢力を増す。一つは現在の西双版納州の車里国で、明代には傣族召片領を土官として景洪に車里宣慰司が置かれた。もう一つは現在の徳宏州に勢力を持った麓川国で、ここにも傣族土司の隴川宣撫司が置かれた。

傣族は史記や漢書で滇越、唐代に金齒、銀齒、明代に百揲、擺夷などと呼ばれた民族にあたり、古くから哀牢山以西の辺縁部に居住することが知られていた。中国の多くの学者は百越といわれる水辺居住の民族と考える傾向があり、その意味で、春秋戦国の長江下流以南に住む百越と傣族を共通と考える傾向がある。確かに雲南にあって傣族は盆地居住の点に特徴があり、他の多くの少数民族が山地斜面や高原居住であることと著しく異なる面がある。盆地居住は布朗族や徳昂族、佯族と傣族の特殊技能である。というのは、雲南の盆地はインド洋から入り込む暖気が北東から入り込む寒気とぶつかって霧に閉ざされる場合が多い。景洪や勐海といった大きな盆地は風が吹き通り霧は晴れやすいが、小さな盆地や溪谷は霧がなかなか晴れない。そのため、温暖湿潤条件下でマラリアや熱病が発生し易い。雲南の盆地では至る所で打摆子という熱病の話聞き、それは症状をたずねると、マラリアである。山地住みの北方系少数民族は打摆子を恐れる気持ちが大変強く、盆地へ市日に来てても長居はせず山へ戻る。低地は瘴気が強く、水毒があるので、低地の水は飲まないという程である。その瘴癘の地の盆地に居住可能なのが傣族である。傣族も景洪、勐海、勐混や潞西から瑞麗といった大きな盆地と違って勐連、瀾滄、双江、耿馬、などの小さな盆地だと、盆地周辺の台地に居住していたのが実態である。これらの小さな盆地底が開拓されたのは1950年代、開放以後という実態が聞き取り調査で明らかになってきた。

傣族はマラリア抵抗性が強いという形質をもっているのである。この形質獲得過程を私は次のように考えている。大陸内部の北から南へ通じる交易ルート of 北の部分は彝族や白族のような北方系の民族が商業権を握っていた。しかし、彼らは東南アジアへの通廊である西双版納や

徳宏州など高度600m前後の盆地には居住できない。この東南アジア通廊に住み、その商業権を握ったのが傣族であろう。つまり、傣族は自立小農民という性格よりは盆地都市ムアンに住む商業民というのが第一義的性格だと私は考える。

ところで、雲南西南部の盆地は傣族の前に布朗族や徳昂族が先住者であり、傣族は後に移動してきて、先住者を追いだしたという話を聞き取り調査で屢々聞いた。そして傣族が大規模に盆地に展開したのは元軍のパガン攻撃が契機であるという伝承を双江の傣族長老宋子皋氏から聞いた。このことを先述の元軍とパガン軍の戦闘と考え併せると13世紀後半に次のような状況が生じたと考えられる。当時、徳宏の交易ルートを握っていたのはパガン朝寄りの徳昂や、布朗族であった。そこへ傣族が割り込んで摩擦が生じ、徳昂や布朗族はパガン朝に傣族つまり金齒族の圧迫を依頼した。ここまでの経過は私の想像で、元史には記述はない。その後の経過は元史にあり、金齒族の頭目の阿郭が元の建寧路安撫使に働きかけ、これに応じて元の雲南行省がパガンの入貢を求め、敵対的態度をとったパガン朝を押し潰すことになった。元側には緬地域の玉、金、銀も魅力があったに違いない。この結果、辺境の盆地に傣族が住みつき交易ルートを掌握することになったのだろう。つまり百越系（中華周縁系）の傣族が元と結んでモン・クメール系（インド周縁系）の布朗、徳昂族を雲南盆地の商業ルートから排除したということになる。

車里国の発展については『車里宣慰使世系集解』その他の文献を使って検討した加藤久美子の論文がある [加藤 1997: 44-63]。興味ある解明点は次のようなことになる。

- ①雲南西南部から東南アジア大陸部山地に、交易ルートと交易拠点から成る一つの跨境地域があり、13世紀以降、タイ族がその支配権を握った。
- ②その中心の一つムアン・チェンフン（景洪）は12世紀末、北タイのラーンナー、ベトナムのムアン・ケーオ、ルアンパーバンのムアン・ラーオを束ねる頭目的位置に立った。
- ③13世紀前半、ラーンナーのマンライ朝創始者はチェンフン4代目王の外孫である。
- ④13世紀末、今の西双版纳地区は2勢力に割れ、その一派はラーンナーと結んで元の設置した総管府に反攻。
- ⑤14世紀末期近く、明朝が車里軍民宣慰使司を置き、景洪の王を宣慰使に任命、景洪王は明朝を利用しつつ、北タイ、ラオスの有力ムアンと姻戚関係を結ぶ。
- ⑥16世紀後半、ビルマのタウンゲー朝に帰附し、貢物集めの単位として12のパンナーを定めた。

チェンフンの勢力範囲は15世紀前半に、景洪盆地の外、勐混、勐遮、勐連、勐阿、普文などの諸盆地に及んだといわれるが、その力の基礎は第一義的に交易であり、当時の交易産品は当然茶が想定される。元代の記録には、金齒、白夷が5日毎に市を開き、茶、塩、布などを交易するとあり、その前の宋代に既に普河茶という名称があり、茶は唐におこり、宋に盛んになる

という記録があるという [邵・沈 1993:51]。水田農業が古くから存在し、米が交易産品になったであろうことは疑いえないが、大陸山地の中の盆地勢力が水田農業を基盤に力を持つというのは農民史観の行き過ぎで、むしろ、周囲の状況を見、外勢力を利用しつつ、交易範囲を拡大する方向で発展してきたと考える方が無理のない生態史観だろう。

もう一つの麓川王国だが、尹紹亭の話は次のようである。12世紀前半、今の瑞麗、遮放、隴川地域を勢力範囲として初代の王思可法が傣族の国を成立させた。思可法は瑞麗の西郊に勐卯城を築いて根拠地とした。雲南における傣族の最初の国家である。元と大理の軌轢の隙間を縫って成長し、2代目の王の時代には、高原の楚雄、西双版納近くまで勢力範囲（交易範囲と解すべきだろう）を拡大した。しかし、明代の麓川三征で壊滅し、明朝は梁河、旧城、潞西、隴川、瑞麗の5土司領に分割した。

勐卯城跡を見に行くと、磚積みの土塁が一部残るのみだが、これは麓川時代の城ではなくて、明軍が麓川の反乱を平定した後に築城したもので、平麓城というのだそうである。

麓川三征は中国側から見ると、今のビルマ、ラオス地域に迄勢力を伸ばし、独立国を建て、王を自称し、明の統治に服さず、衛所を屢々攻撃する反逆行為を討つということだ。雲南簡史その他によると、第一次征討は1441年に南京、湖広、四川、貴州の軍隊15万人が送られる。傣軍は明朝に降伏を申し出ると共に他面では象部隊を繰り出して、雲県や景谷など麓川から相当離れた地域で陽動作戦を行うが、結局本拠地を破られて、王思任発は勐養（イラワジ川西の山岳地帯）へ逃げる。明軍が追撃を諦めて、軍を引くと、息子思机発が麓川に戻り、明軍衛所のある潞西を攻める。

第二次征討は1443年、屯田兵50万人の大軍を以て攻めるが、思机発は再び勐養に逃れる。第三次征討は1449年、再び内地から15万の大軍を以て攻めるが、傣軍は善戦し、明軍は退却をやむなくされた。結局、山岳地帯をどこまでも逃げうる賊を滅ぼし得ずという結論になり、思氏を勐養の頭目に据えて、和を結ぶことで終わった。麓川側から見れば、これは大勝利ということになるだろう。

明朝は土官を流官つまり中央から派遣した官吏で置き変える改土帰流という政策を打ち出したが、それ以上に大きな影響を与えたのが、麓川三征で、このために大量の漢族が流入し、その上に立って軍屯、民屯の屯田開拓が大規模に進行したといわれる。屯田兵は多くは内地の罪人であり、今の労改農場と同じで、しかも三代屯田に服務すると解放されたのだと尹紹亭が言う。屯田兵が何十万人も移住することは急激な人口増加に直接つながる。屯田の生産物は軍糧米に取られるので、移民は食料確保に手近な林を伐開する事になる。その結果、林は消える。

現在の雲南で漢族の居住する高原地帯はどこも見事な草山である。常畑化傾向の強い漢族の土地利用は山をこっきり裸にするのである。最近の著しい森林伐採は1950年代の大躍進の時代、文革時代、そして経済自由化時代の80年代に生じている。中央で大きな政治的変動がある

と林が伐られるのだ。

ランドサット写真で林の分布を見ると、顕著な境界はビルマとの国境である。ビルマ側は森林がべったりと覆っているが、中国側は見事な草山だ。またもう一つの境界はそれに比べるとやや漸变的だが、哀牢山からベトナム北部山地に連なる線で、それ以北は一面の草山である。昆明—景洪道路を南下すると、植被からみた漢化の前線は元江の少し北、化念あたりにある。そこまではどの山も見事な草山である。そして「封山育林、造福人民」の看板がたくさん立っている。実際、ユーカリと雲南松の育林が大規模に進んでいる。漢族は山を裸にして植林をする習性がある。ヨーロッパと同じである。

明代の屯田開拓で目立つ現象は塩商人による開拓だとこれも尹紹亭の言だ。塩商人は客商といわれ、雲南城内の商人ではなく、浙江・江蘇と四川の塩商人が農民を連れて来て、商人請けの水田開拓を行ったと言う。その狙いは実に中国的なユニークさがある。水田が増加して米生産が増えると、食料を求めて人間が移動してくる、人間が増えると塩の消費が自ら増大する。そうすると川塩と淮塩の売れ行きも伸びる。だから塩商人は水田開拓に投資をいとわなかったのだと。

また、この大量の漢族移入によって、雲南の少数民族の混淆状況は一層進んだことだろう。再び尹紹亭の話だが、彼の家系がその好い例で、先祖は麓川平定に動員された南京府の将軍で、二千人の兵の将だったという。そのまま騰冲に住みついて雲南在住の漢族になった。一方、傣族化した漢族の例もあるという。梁河县孟連（1990年代までは騰冲県内）に龚という傣族土司がいた。この村は漢族区と傣族区に分かれていて、漢族は漢語を使っているが、衣食は傣化している。ところでこの土司は、勿論傣族区に住んでいるのだが、家譜によると明清時に移住した漢族なのだという。こういう状況が多分巨大な規模であり、漢族といい、白族といい、傣族といっても、状況によってどれにでもなるという複眼的自己同定が当たり前の世界である。大陸世界の特徴だ。

3. 連環世界

雲南は大陸世界の特徴を誠に明瞭に見せてくれる。大陸は生態的・民族的・文化的にあるまとまりをもった地域が環を繋ぐように連なっている。連環世界である。雲南では少数民族が小さな環を作っている。そこに中華文明を荷った漢族が入っていくことで小さな環がいくつかの大きな環を作る。一つは紅河・哀牢・欄滄江線以北の地域で、漢化の進んだ少数民族の地域である。もう一つはそれ以西・以南のやや偏平に引き延ばされ環形の地域だ。どちらも勿論細かく見ればいくつもの自律的な小環が連なり合っているのだが、漢化の程度でとりあえず二つの大きな環が生じているとした方が景色が見易い。ところで、後者の偏平な環はこれだけでは環にはなっておらず、実は北ビルマ、ラオス・北・中部タイ、ベトナム西北部・安南山脈がその

南半分で、これと合わせて一つの環になっていると考えた方が判りやすい。その環の一部が車里国や麓川国の興亡に現れていたと考えたらどうだろう。つまり、間違いを恐れずはっきり言ってしまうえば、ピュー、サガイン、ハリプンジャイ、ラーンサーン、ドバーラバティ、スコタイ、ロップリ、ルアンパーバン、ディエンビエンフーなどの領域はこの環の南半分を作り、車里国や麓川国と人的にも文化的にも一つの大きな環を形成していたと考えられないだろうか。時代的に多少のこぼれがあるが、そこは仕方がない。

これらの環はさらにパガン及び時代がとぶがタウングー時代の上ビルマ、アンコール時代のカンボジア、東北タイといった地域と更に連環している。この環は中華周縁圏の中に入り込んだインド周縁圏という特徴がある。

海岸部には港市が点々とあり、これは歴史を通して世界各地の人と文化が入り込む海域の世界である。チャンパ、オケオ、ナコンパトム、アユタヤ、ナコンシータマラート、ケダー、モールメン、ペグー、こういった地域は島嶼部東南アジアと結ばれた海域だという感じを受ける。雲南で大陸部の連環世界を見た気分が勇み足を招くことになったかもしれないが、連環の見取り図を内陸から海まで試論的に述べてみた。

III 地域区分

前章では雲南の歴史的構造を素描した。本章では少数民族が棲みわけを行っている地域のデテールを述べるつもりだが、まず、環境・生業と民族分布に基づいて地域区分の枠組みを設定しよう。

1. 雲南は、北と南の民族の漸移帯で、それぞれの分布には気候が大きく影響する。漢族の侵入にしても、歴史的に高原から次第に低地へ向かっている状況がある。これは北方系の少数民族も同じで、熱病、瘴気を恐れて、低地居住を避ける傾向がある。そこでまず気候の地域的相違を見よう。

雲南高原は常春の雲南といわれ、同緯度の中華圏と比較すると、冬暖かく夏涼しい。しかし冬の暖かさは病原菌にとっても都合がよく、常春の反面は瘴気の地でもある。冬の暖気はインドと東南アジアを覆う熱帯大陸気団が雲南にも侵入するからである。北方寒気団との接触は雲南・貴州境界で生じ、雲南気候前線を形成する [任 1986:181]。四川、貴州は霧が立ちこめ、川犬日に吠ゆという程に太陽を見ない。その時、雲南高原は乾季で、爽やかな晴天が続いている。夏涼しいのは雲南が3,000から1,000mまで緩やかに下る準平原高原をなすからである。夏は雨季でもある。5月から10月までに年間降雨量の80ないし90%が集中する明瞭なモンスーン気候である。高原亜熱帯モンスーン地域といえる。しかし、高原面は下刻作用の激しい

大河川に切られ、河谷は峻険な深いV字谷であり、河谷低地と盆地は高原面から500ないし1,500m 削り込まれている。従って高度差で大きな気候的相違が生ずる。

深いV字谷は熱帯大陸気団の進入路になり、イラワジ、サルウイン、メコン、紅河沿いに高温・多雨区が内陸深く入り込む。但し、この状況も細かく見れば、夏のモンスーンを受けとめる高山の前面に多雨区が生じ、風下には乾燥した風が吹き込む。従って、例えば元江南岸の哀牢山は多湿だが、元江北岸は高温乾燥区になる。同様の理由で金沙江流域も高温乾燥区となる。図2は全体的傾向を把むための気候模式図である。

2. 気候と密接に関係する地形は、チベット高原から数段の準平原面が高度を下げながら南へ伸びる。図3は四川省の理塘から大理を経て徳宏州までのルートに沿って高度計記録を模式的に図化したものだ。チベット高原から定頂性の良い4,200mの面が張り出して中甸付近では3,500mに下る。このあたりまでは5,000m以上に現在も氷河が発達し、2,800m以上にはU字谷、モレーンなど過去の氷河地形が発達する。中甸地区から大理地区まで開析地形が卓越する

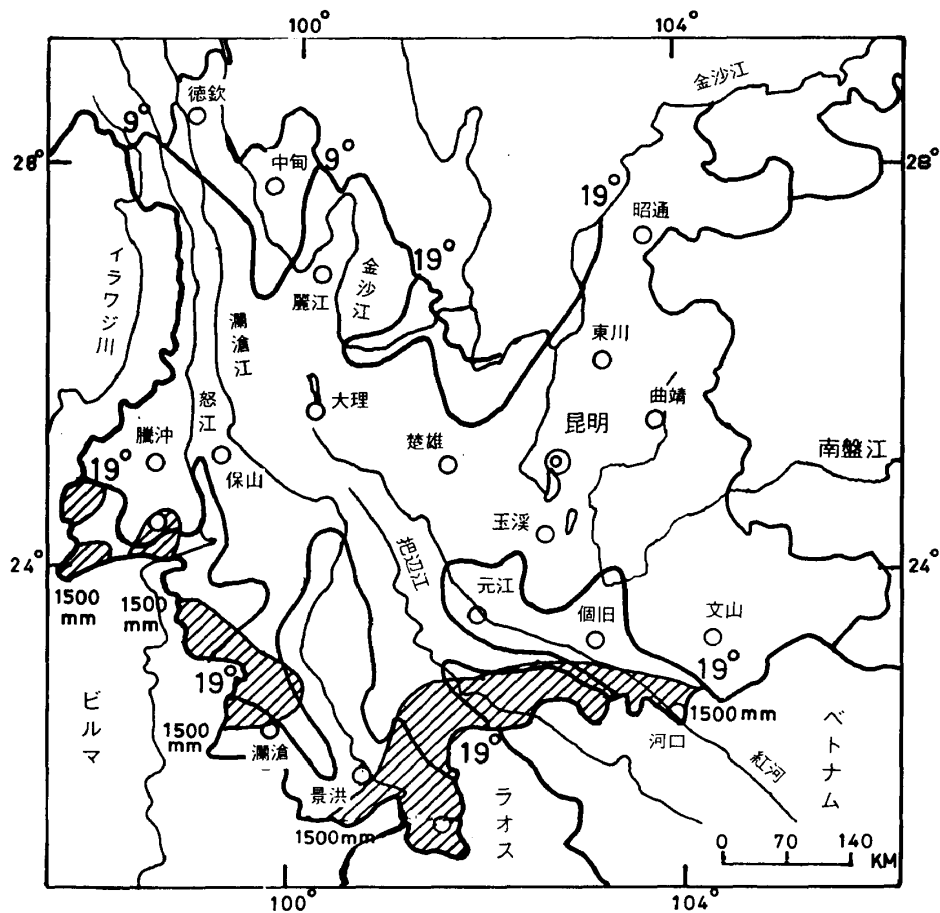


図2 気候的特徴。年平均気温19°C以上の高温区、9°C以下の低温区を示した。また年間雨量1,500mm以上の多雨区をハッチャで示した。
出所：[呉・金 1980：図1-2, 1-3]

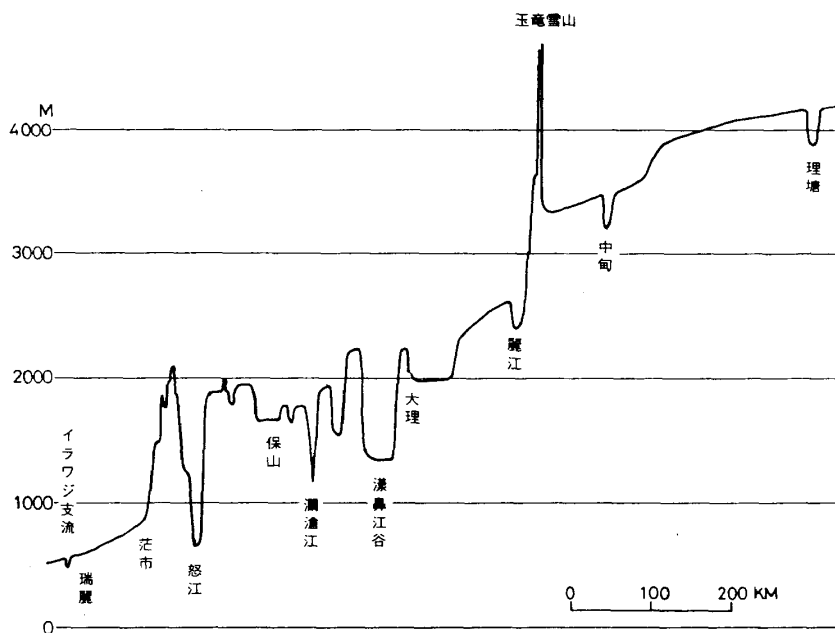


図3 雲南地形断面模式図。チベット高原から徳宏州まで，調査時の高度計高度を図化。

が，準平原面も残存し，麗江地区で3,000m，大理地区で2,500mに高度を下げ，この面は大理から昆明，曲靖まで続く平坦度の良い準平原面で，南へ1,500mまで緩く段斜して，雲南省中央部に広く分布する。西南部と元江地区でこの面は再び開析斜面となり，急激に1,000m程度迄高度を下げる。怒江，瀾滄江，元江の河谷はそれらの準平原面を1,500ないし1,000m下刻し，支流沿いの盆地は500m前後の標高差がある。景洪，瑞麗などの盆地は高度600m前後，元江河谷は河口で100mにまで下る。図4は雲南高原の地形を模式的に示したものである。

3. こうした環境要因を考えながら，少数民族分布を見ると，それは勿論歴史的経過によって複雑化されてはいるが，それぞれの民族の水平的棲みわけと特定の環境との相関関係をおぼろげにでも把握しうるように思う。図5は代表的な少数民族の分布を示したものだ。資料は『雲南の少数民族』に基づいている。蔵は亜寒帯のチベット高原との親和性が極めて強い。傣，怒は寒温帯から亜熱帯にわたる開析が著しい高原斜面に密集する。納西，白は亜熱帯北西部の高い準平原に密集し，それぞれ，麗江，大理という，チベット高原とビルマ交易ルートの拠点の特異的に占拠している。彝族は雲南の亜熱帯高原本体部に広く分布するが，濃密な分布域は金沙江の北，涼山州にあり，生業的にも牧畜が盛ん，穀物は蕎麦が優越するといった点から見て，蔵との親和性が高く，寒温帯高原から雲南の亜熱帯高原へ遊牧的に展開したと想定される。哈尼族は彝族の更に南，高度を少し下げた1,500m準平原面，中でも元江南から西双版納へかけての高温多湿区に集中し，棚田耕作で有名である。彝の分支と考えられているが，牧

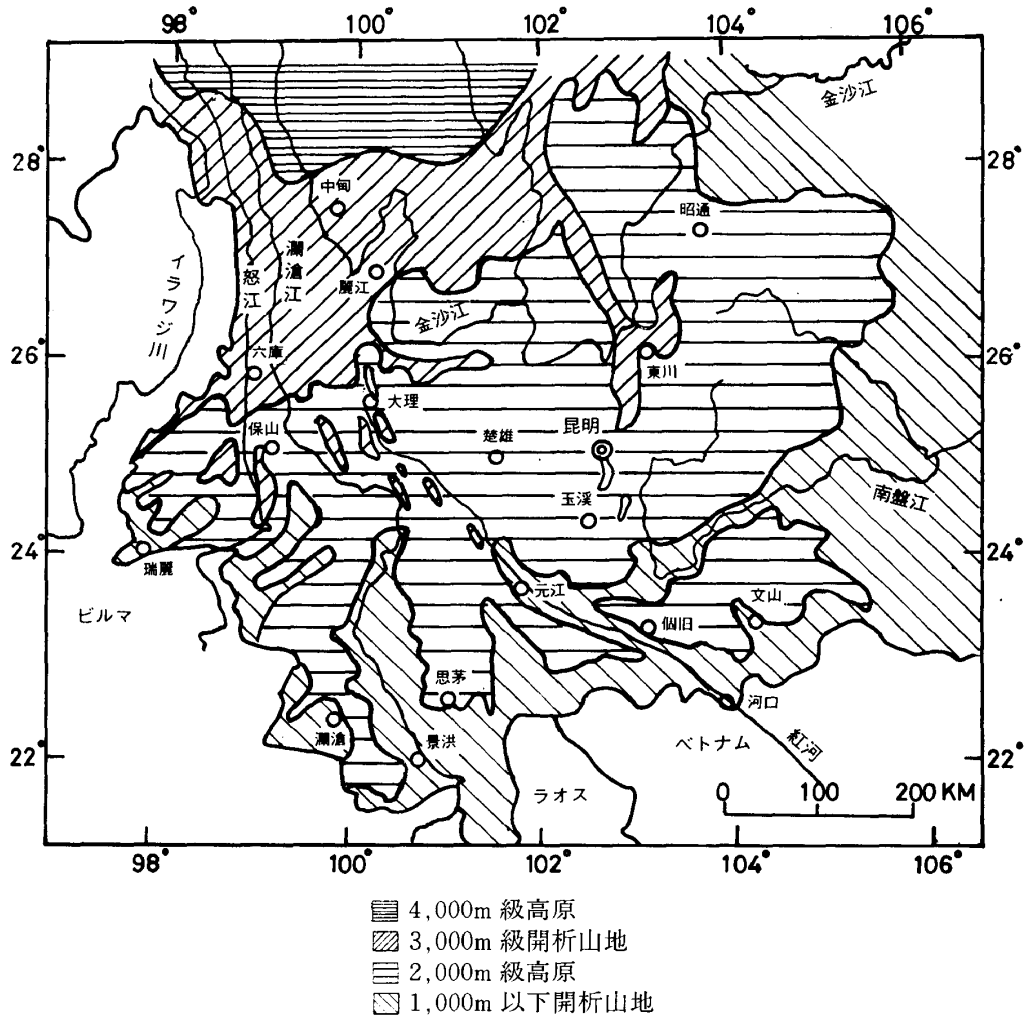


図4 雲南省と周辺域の地形
出所：[呉・金 1980：図1-1]

畜は低調で、高温多湿区への展開に伴って牧畜を落としてしまったと思われる。タイやラオスへ入っているアカ族は哈尼族の分支と考えられている。アカの名称は彝族の分居奴隷である阿加に関連していると私は推定している。拉祜は蔵彝語系で、高山部の移動狩猟民族として有名であったが、今は定住化も進んでいる。

佧族と布朗族はモンクメール系の民族で、ビルマやラオス、タイにも分布が広い。雲南では佧が滄源、西盟、布朗が西双版纳州の1,500m 面とその斜面に集まる。外でのそれぞれの名称は佧がラワ、布朗がプーランである。モンクメール系の諸族は島嶼部東南アジアの山地民とも関係が深い。景頗族は蔵緬語系であるといわれるが、モンクメール系諸族居住地に入って、習俗が類似化したと言われている。ビルマ側での名称はカチンである。

傣族の分布は佧、布朗、景頗、などの集住していた雲南西部へ侵入して、交易ルートの盆地を占拠した形である。壮族は東南部文山州の石灰岩台地に分布が集中し、広西省から雲南高原低位部へ展開してきた様相が強い。苗族は分布に相互関連がなく、和夷として中国内のあちこ

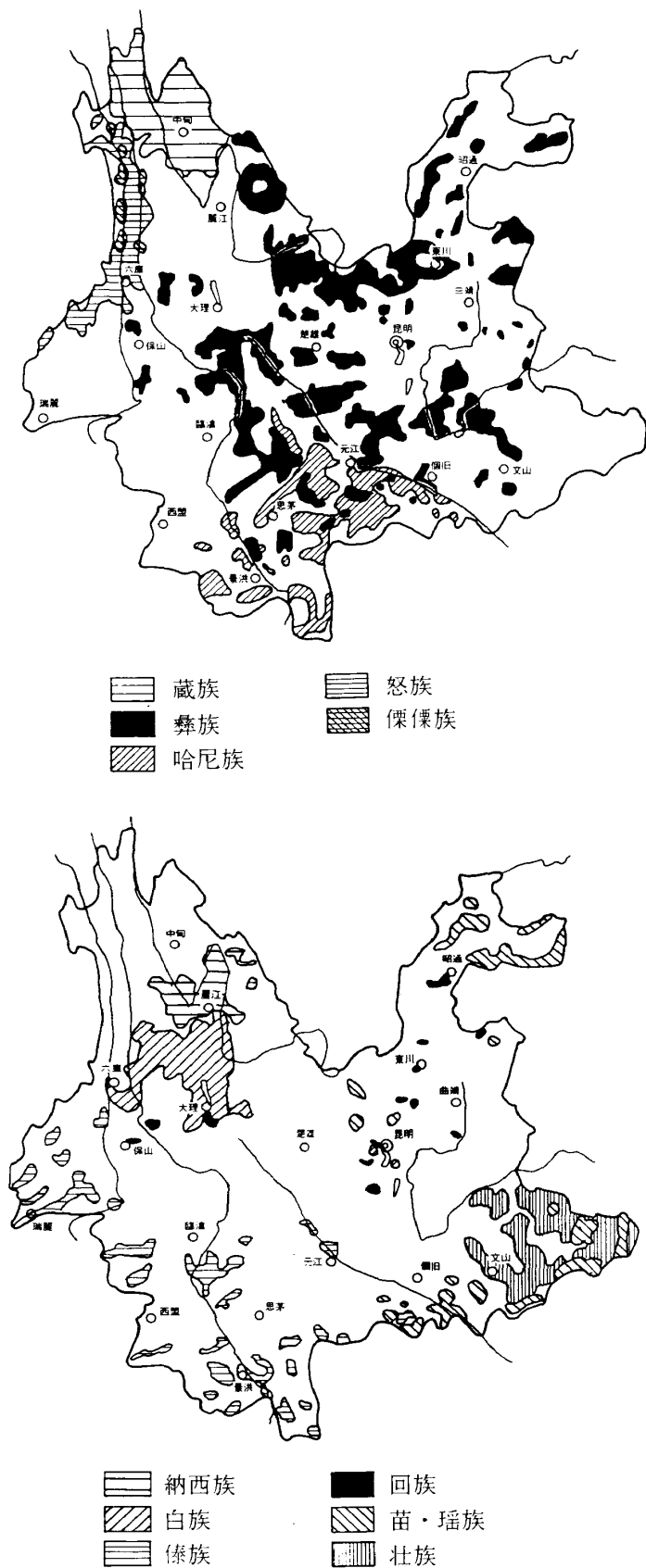


图 5 云南省主要少数民族分布图

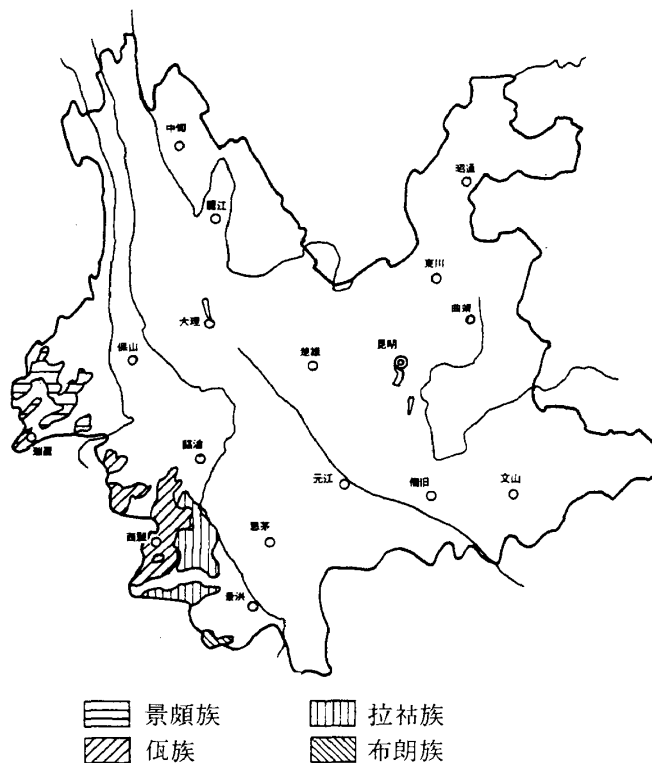


図5 雲南省主要少数民族分布図 (つづき)
出所：[費・宋・大林 1990]

ちへ中華権力によって移民させられた経緯を見てとれる。

以上の分布状況を要約すると、北方系の民族である彝、納西、白、傣、怒、拉祜、哈尼などが紀元以前から雲南高原へ展開してきた。勿論漢族も移入した。しかし彼らが入り込めない西南部には主にモンクメール系の佤、布朗、徳昂、景頗などがいた。そこへ亜熱帯気候に適応した江南の傣、壮、苗などが秦漢以後は割り込んできて、雲南高原低位部に分布を拡げた。特に傣族は白、納西に対応する南の交易商人として、西南部の盆地を占拠することとなった。そして元軍による緬侵攻を利用して、東南アジアとの跨境地域の諸盆地に拡散し、商業権力を基盤とする勢力を拡大したというのが私の見取り図である。

4. 以上のように考えて雲南の模式的な地域区分を行ったものが図6である。これは基本的には尹紹亭の図 [尹 1989:45] を踏まえているが、少し変えた部分がある。それは滇中高原を南亜熱帯から分かつ東西の境界線である。尹紹亭の引いている線は約100km南を東西に走る。これは現在の漢族の進出範囲を表現している。実際、邦馬山や無量山山地の高地斜面は多数の漢族が進出して山地農業地帯を作っている。尹紹亭の引いた線はその意味で現在に焦点を合わせたものだ。私の引いた東西線は『雲南植被』から借りたもので、同書はこの線を境に北は中国・ヒマラヤ植物区界、南はマレー植物区界としている。実際この線を南へ越えるとマンゴ、ナンカ、タマリンド、ゴム、ジャンプーボル、アレカヤシなどが顕著で、ぐっと熱帯的植物景

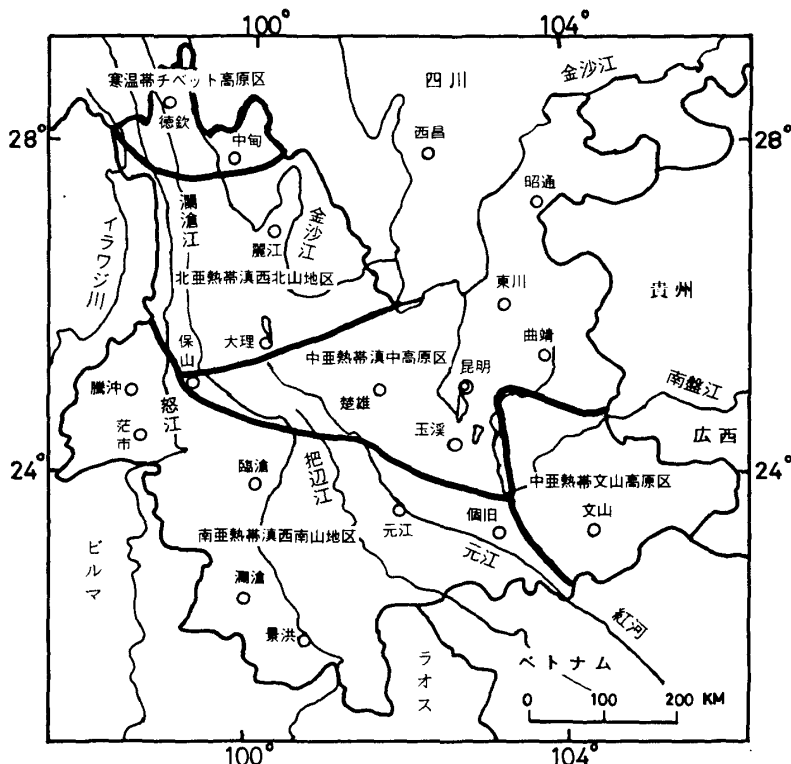


図6 雲南省生態的地域区分図
出所：尹紹亭 [1989] の図を一部改変。

観になる。逆にこの線を北へ越えると、斜面の畑にソバや麦が増え、水田裏作に細い畝立てをして土寄せ中耕をくり返す精耕細作の様子に気付く。滇中の農耕の漢族進出前線はここまでで、これを越えた南の進出漢族は西南部の伝統的農業と融合している。もう一つの理由は、明代の軍屯は殆んどこの線以北にあり、以南地域の開拓は客商によるものが少数ある程度ということだ。だから、私の線は生物的区域の境界、明時代の漢族の農業的進出前線という意味を強調したものになっている。

中亜熱帯文山高原区とした区域は、石林地域をチラと見ただけで、予測的な意味しかないが、あえてそれを分けたのには理由がないわけでもない。ベトナム北部、広西、広東という嶺南低地の民族が雲南高原へ進出する窓口という意味で、何か違いがありそうだという印象がある。あるいは逆に雲南高原の人と文化が嶺南低地へ進出する窓口でもあったろう。こう言うと、昭通地区も四川と雲南の通廊として区分すべきかもしれない。尹紹亭は北亜熱帯区域の中で昭通地域を小区分している。私は昭通地域を全く知らないのであえて手を触れず、滇中高原区の中に包含しておく。

5. 水田や畑の耕作方法を取り上げると、この境界線にやはり意味がある。耕作の特徴として犁耕の形態と牽引法を見てみよう。犁は弯轆犁と直轆犁に2大分され、更に次のように5類

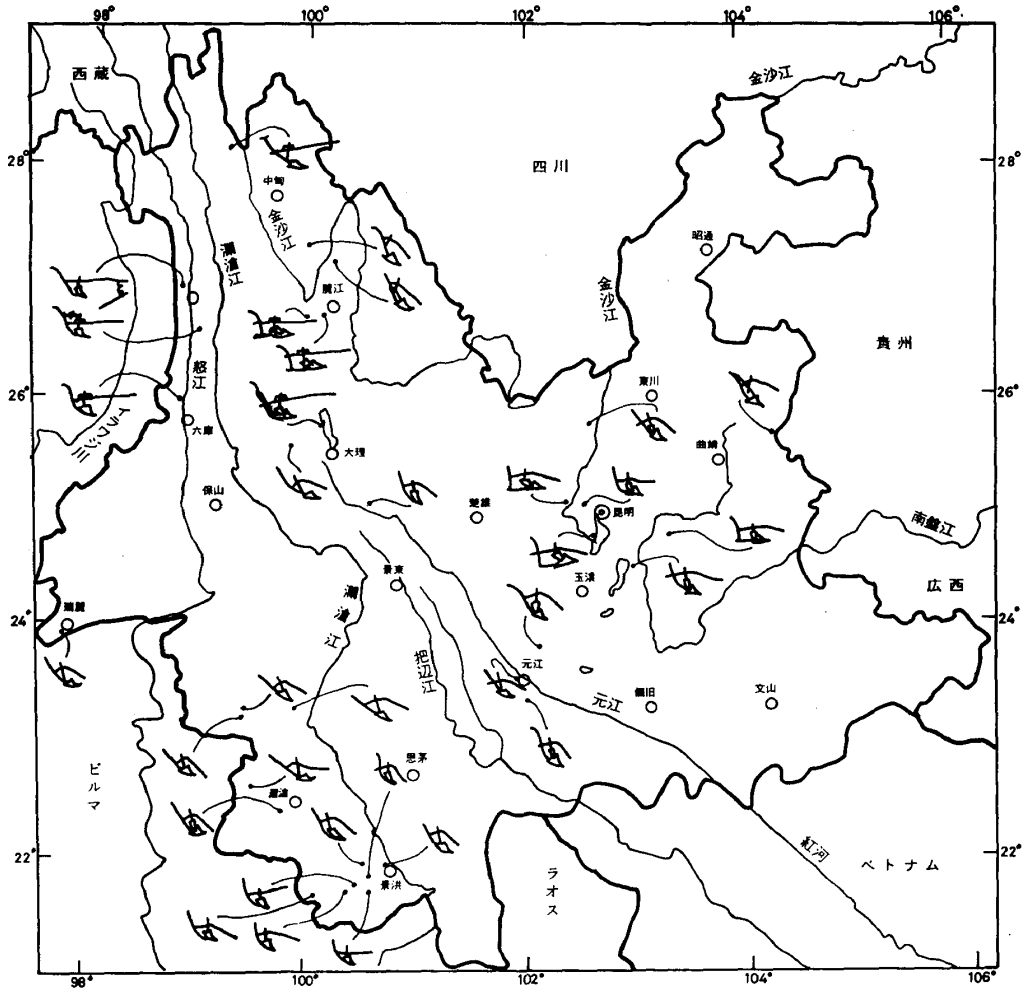


図7-1 分布

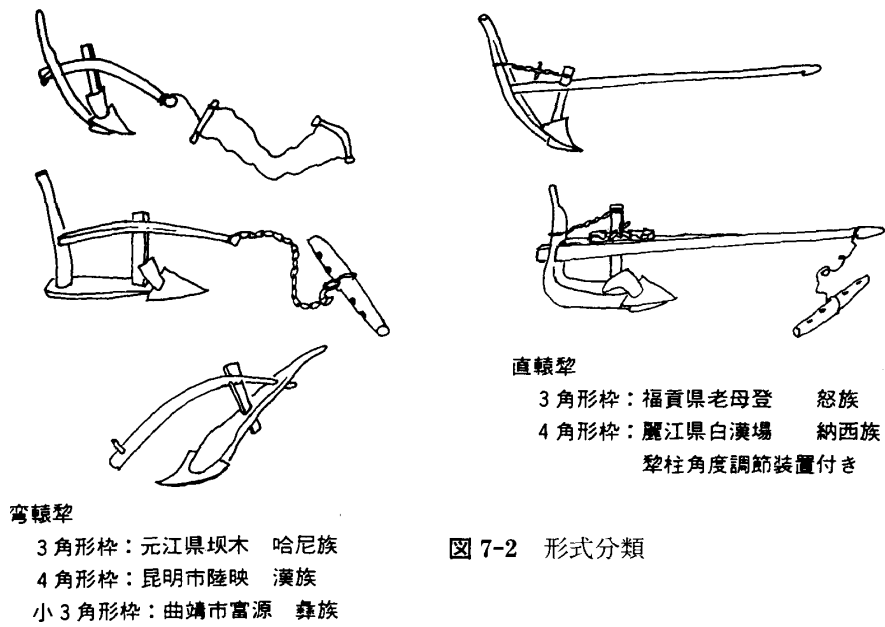


図7-2 形式分類

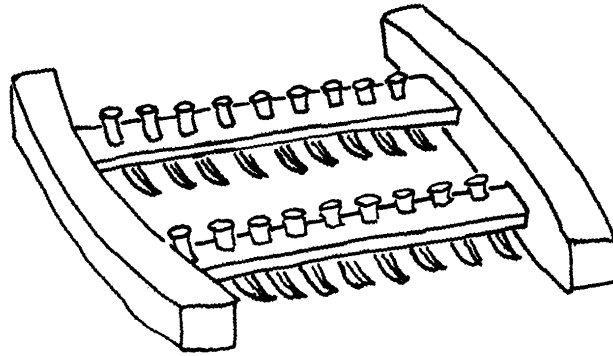
図7 雲南の犁の分布と類型

型に分かれる。①三角形枠の弯轆犁。つまり犁身に犁柱を立て、犁柱と犁柄と犁轆とが三角形の枠を作る（図7参照）。これは犁床のない無床犁である。犁柄と犁身が一体で、その先端に袋状開口部のある犁先をはめ込む。犁先はアードつまり左右対称三角形で、犁冠を立てる。犁に詳しい応地利明によると松葉形というそうである。弯轆とはながえが真っ直ぐでなくて犁柱の前方で湾曲して下方に向かうのである。牽引方法はくびきと轆をロープで結ぶ揺動型になる。②四角形枠の弯轆犁。犁床が長く、犁柱と犁身と犁轆と犁柄で四角形の枠が作られる。そして犁轆はやはり湾曲している。この型はいわゆる中国式揺動犁の典型である。日本では打延（ウッパイ）型という。これもアード犁先に犁冠を立てる。③三角形枠の変形で彝族に特徴的な形がある。犁柱が犁身のずっと上部につけられ、小さな三角形枠になる。犁身の下部はコブラが頬を膨らませたように翼状に広げ、犁床はなく、船型である。犁身には、大きな翼の犁先をはめ込んだり、上面に装着する。

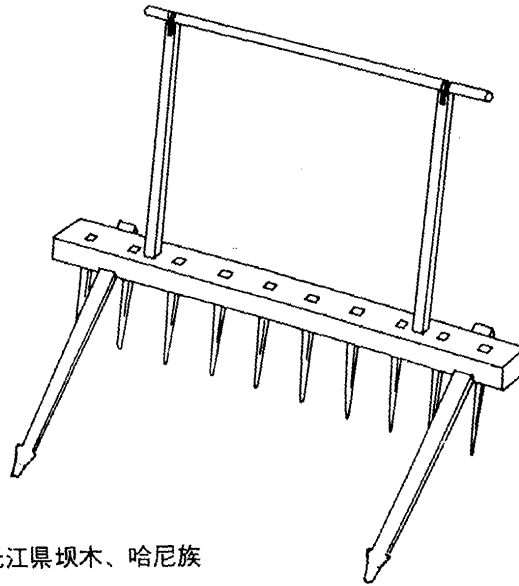
以上が弯轆犁のグループで、他に直轆犁のグループがある。④三角形枠の直轆犁、⑤四角形枠の直轆犁。いずれも犁轆は真っ直ぐで弯轆犁より長く、多くは二牛牽引で、くびきとながえを短いロープで連結する。西アジア式にくびきの上にながえを置いて固定するのでなく、両者の連結にアソビがある。この直轆犁のグループで興味深い点は作業方法にあり、二牛抬杆とか二牛三人で耕すという古い史書に述べられた方法を今も行うことだ。二牛三人の場合、一人が柄を持ち、一人が牛の轡をとり、一人がくびきの上に後ろ向きに座り、ながえを足で抑える。この方法は唐代の蛮書にも出る。格長丈余、耕者三央、前挽、中压、後駆、二牛抬杆とある由である。また、ながえに座る替りに、一人はながえに結びつけた竹竿を脇から操る。その目的はいずれもながえが浮き上がって耕深が浅くなることを避けるところにある。目的論的にはそうだろうけれども、これは文化的意味も大きい。つまり犁耕というのはこうするものだという文化伝播を受け入れて、その慣習を今もそのまま守っていると考える材料と見る方が面白い。

耕深調節の点では、中国は独自の工夫をしている。それは犁柱を固定せず、前後にずらす工夫である。これは既に漢代の画像石に現れる。そうすることでながえの角度が変わり、犁先が土中に入る深さを変えられるのである。この型の犁も雲南の直轆犁では多い。また二牛三人を二牛二人へ、更に一人へと、労力を減らして能率を高めるべしという改善策が明代には奨励された。二牛抬杆の古い慣行が明代でも雲南では一般的だったことが判る。

この直轆犁二牛抬杆法は断然雲南西北部に顕著で、白族や彝族、納西族はその中でも四角枠型、僰僰族、怒族、蔵族は三角枠型が多い。先述の弯轆犁は四角枠型が滇中の漢族、彝族、苗族に見られ、三角枠型が南亜熱帯滇西南高原区に一般的に見られる。この犁耕タイプは併用する耙の形と組み合わせると更に細分される。耙に2種類、長脚型とソリ型がある（図8参照）。長脚型は長さ4、50cmの尖った7、8本の歯が角材に装着され、前方に支脚が突き出してい



ソリ型、大理州弥渡、白族



長脚型、元江県坝木、哈尼族

図8 雲南の耙の類型

る。この支脚の下端にロープをかけてくびきに連結するのだが、連結目的だけなら必ずしも支脚はなくともよい。この支脚には独特の用途がある。その用途は何かというと、これを支点にして耙をぐっと持ち上げるのである。2, 3m 進むと耙を前に押して牛に声をかけて前進を止める。そして支脚を支点にして耙を持ち上げ、また牛を進める。耙は掻き集めた泥の前に振り出され、背後には進行方向に直交した泥の盛り上がりが出る。この動作を往復して、くり返すと、水田には耙の進行方向に直交した泥の畝が長く連続する。まるで進行方向と直交して犂き起こしたかのようにである。

この見るだにじれっとなる耕土の目的は何かと聞くと、こうすることによって泥がよく攪拌され、良い泥になるのである。そして驚くなかれ、同じ操作を私はチェンマイ盆地で、スラウェシで見、また海南島の苗族からも聞いたことがある。これは独立現象なのか伝播現象なの

か。

もうひとつの耜はソリ型で、2本の台木にアイクチのような鉄の歯が7～9本打ち込まれている。この上に人が立って水牛に牽かせ、泥を練る。

さて、三角枠型弯轆犁の犁耕は長脚耜との組み合わせ、ソリ型耜との組み合わせの2種がある。この2タイプの民族別分離は直轆犁の場合ほどスッパリときれいにはいかないが、四角枠型犁の場合を考え併せると、哈尼、傣、布朗、佤は長脚耜に偏り、漢、彝、苗はソリ型に偏る。拉祜はどちらも同程度という結果になる。ソリ型耜はいかにも牧畜的、平原的である。インドやイランでも畑の碎土鎮圧に丸太や短脚耜に乗って牛に牽かせる例は多い。彝族や漢族にソリ型耜が多いのは中原からの伝播と考え易い。布朗や佤のソリ型耜はどう考えられるだろう。ビルマルートでやはり古くから入っているとも考えられるし、最近の棚田造成に伴って漢族や彝族から影響を受けたとも考えられる。

佤、布朗、哈尼、拉祜は現在も短期休閑の焼畑的耕作が一般的で、その際の特徴的農具に長い竹竿の先に小さなヘラをつけたものがある。斜めに構えて土をパッパと飛ばす調子で穴を掘り、米を点播する。飛ばした土で斜面の下の穴を覆土する。いかにも焼畑的技術で、焼畑を行っている限りは犁も耜も不要である。本来はこの長い点播棒だけだろうと思いたくなるのだが、雲南の焼畑は草を焼いて鋤耕や犁耕すら行うのである。これも最近の変化と見るのか、あるいは古くから平原的犁耕法が入っているのかもしれない。その問題は今のところ判らない。

IV 地域を見る

地域を考えるには地域のこまごまとしたデテールにふれるに如くはない。これまではデテールを離れて、四捨五入の地域像を述べてきた。ここでは地域の実態を現在見える姿で書いてみたい。一番いいのは、調査行の日を追って書くことだが、しかし、紙面の制限もあるので、やむなく前節で区分した区毎の一つないし二つの地点を取り上げて述べる。

1. 寒温帯チベット高原区

(1) 中甸

中甸の町は北緯27°44'の盆地にあるので、緯度的には亜熱帯だが、高度計は3,200mを指し、トウヒやモミの山に囲まれている(図9参照)。その斜面はU字谷で下り、ところどころモレーンの丘がある。盆地底は過去の氷河湖が干上がった alpine meadow の草原で、放牧のヤク、犏牛があちこちで草を食っている。犏牛は雄の黄牛と雌のヤクを掛け合わせた一代雑種で、雑種強勢の結果、雄は体高1.8mに達する大きな身体になるが、稔性はなく、子供は作れ

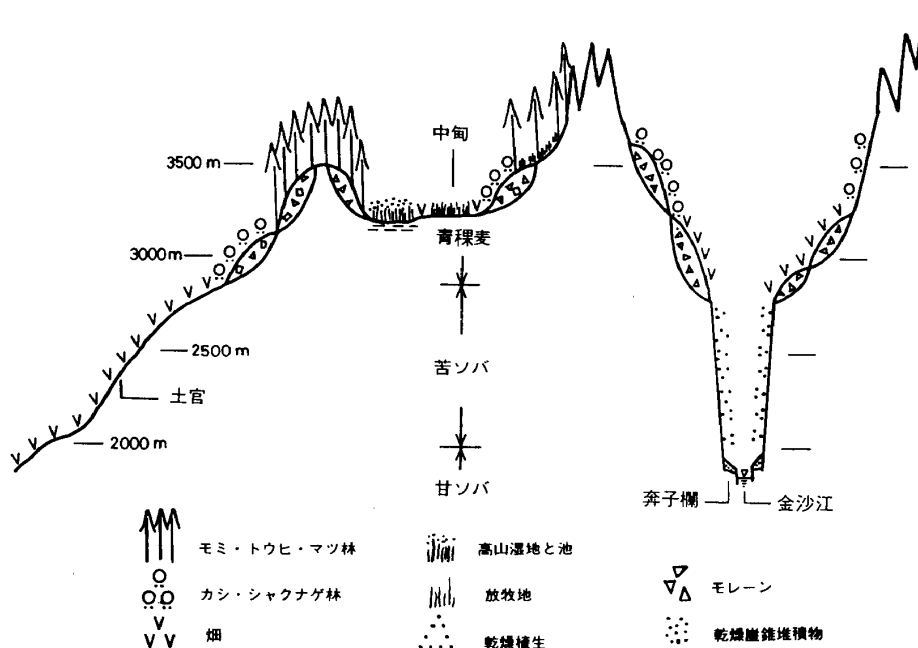


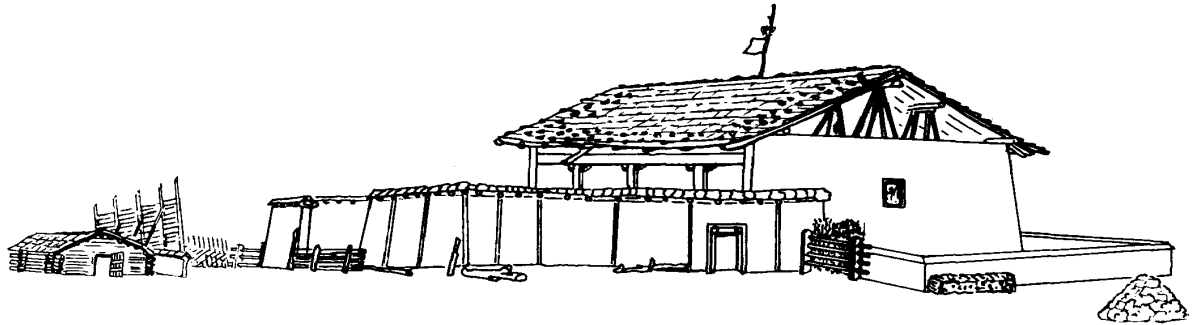
図9 土官—中甸—奔子欄の地形断面・土地利用模式図

ない。どちらも毛がフサフサとしており、とりわけ尻尾の毛は1m近くある見事な白毛や黒毛で、中国皇帝の車黄屋に立てる旗左纛の材料になる。蔵族は毛皮でテントや雨具を作る。毛を内側にした雨具は暖かくて雨雪を通さない。

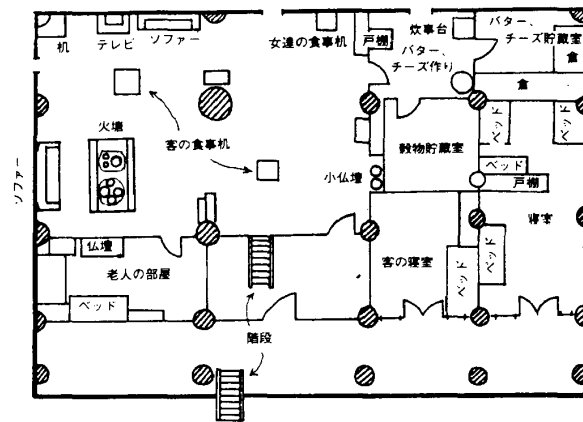
草原を囲むモレーンの丘には石を積み上げた塚を作り、木枝や低地から運んだ竹を立て、経文を書いた旗を吊る。この塚は sita と言われ、村の保護神をまつり、吉祥の日に松、酥油（バター）、ツァンパを供える。その周りはエーデルワイスの類や馬蹄黄、三色馬先蒿その他の高山植物が密生する。放牧地の中にも、毒があって家畜の食わない大狼毒 (*Euphorbia nematocypha*) が赤い葉の群落を見せている。斜面を少し上がると、モミ、トウヒ林林縁に、葉縁にトゲのある *Quercus pannosa* とシャクナゲの混じる灌木林がある。*Quercus pannosa* は牛囲いや牛舎の敷きわらに使う。

中甸の蔵族の家は太いモミの円柱を使った大きな木造切妻造りで、周りに扉をめぐらし、内側は家畜囲いである。家は三層に仕切られ、一階は黄牛、馬、豚などの畜舎でもある。ヤク専用の畜舎は家の外に作る。2階は人間の生活空間で、居間の他に穀物部屋、チーズ、バター、肉などの貯蔵室、台所、家族の個室などがある。居間には立派な仏壇があり、その近くに囲炉裏を作る。3階は屋根裏部屋で、燕麦、青稞（チンコー）麦のわら、干し草、蕪などの飼料を置く。飼料搬入の便に切妻壁の一端は開放である。家近くには青稞麦、燕麦干し用のハザ木が常設されている（図10参照）。

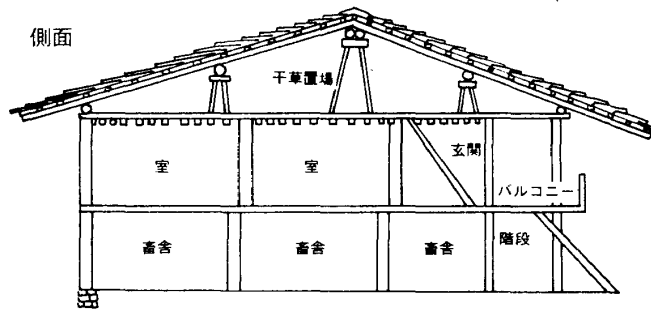
迪慶州民族・宗教委員会のダッパ・ケルデン (Dakpa Kelden) 氏の案内で、彼の姉さんの嫁ぎ



二階間取り



側面



一階の畜舎と敷地

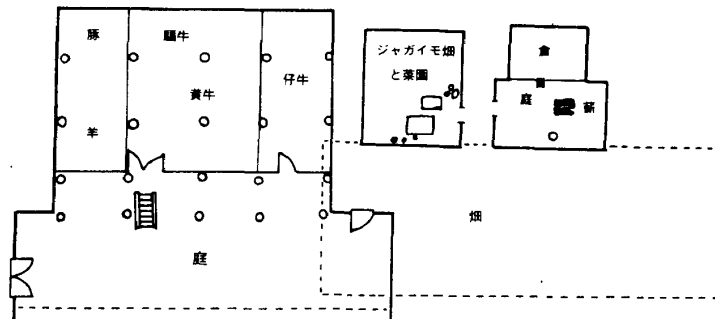


図 10 中甸藏族の家 (羅二虎画)

先で話を聞く。大中旬郷三公村所奶子河村である。図10はこの家のものである。牧畜が最も重要な生業なので、話は牧畜が中心になる。

①夏牧場は斜面の上にある。数戸ずつ集まってグループを作り、5月に盆地を出る。食料は馬の皮袋にツァンパとバターの塊を入れて持って行く。最初の夏牧場は高度3,500m程度で2日の行程である。そこに丸太組み校倉作りの小屋があり、小屋の周りに柵を設けてある。昼は放牧し、夜は柵に入れる。放牧場は各グループ毎に土地が分かれている。奶子村は牛が各戸平均50頭位でヤクが主体だ。羊は5頭程度で少ない。6月まで第一夏牧場に居るが、7月には更に高い第二夏牧場へ移る。そこにも小屋が設けてある。

②夏牧場では毎日女性が搾乳し、太い木筒に入れる。男が円板つきの棒を上下して攪拌をする。やがて表面に集まった凝脂を固めて丸い円盤状のバター（酥油）を作る。残りの脱脂乳は一晩おくと少し酸っぱく凝固する。これをザルでこして、布に入れて揉む（水を絞る）とチーズ（酪）になる。普通は、これを干して固いチーズにする。ヨーグルト（酸乳）も作る。男は一日中、バター、チーズ作りに追われる。バター、チーズ作りに使う乳はヤク、犏牛、黄牛に限られ、羊、山羊、馬の乳は利用しない。伝統だと言う。モンゴルが馬乳酒を作ったり、羊、山羊の乳を利用するのと相当違う。

③蔵族の乳利用がヤク中心であることは他の地域でも同じかどうか多くの例は知らないが、四川省の理塘で会った夏牧場の蔵族もそうだった。丁度ヤクの搾乳をしており、母ヤクも子ヤクもロープにつながれていた。母ヤクの搾乳の番が近づくとその小ヤクはロープから放される。小ヤクは転げるように母ヤクに走りより、乳房に吸いつく。しかし、3、4分すると押しのけられ、女性が搾乳する。小ヤクは搾り手を押しのけようとするが、妨げられて乳を吸えない。その内に搾乳が終わると、再び小ヤクが乳房に吸いつく。羊もたくさんロープにつながれていたが、これは羊毛剪りのため、乳は搾らないと言っていた。

④中旬の話に戻る。8月になると高山は寒くなるので、また第一夏牧場へ移り、そして8月末には盆地へ帰る。盆地は冬牧場と畑で、冬牧場の草は夏の間刈り、干し草を3階に積む。盆地に帰った家畜はしばらく盆地まわりの丘で放牧される。10月になると青稞麦、ジャガイモ、ライ麦、油菜などの収穫が終わり、家畜は刈跡放牧される。穀物のワラ、油菜の搾り滓なども3階に貯蔵する。冬前には山裾の灌木林から *Quercus pannosa* や松枝を集めてきて、畜舎の敷きワラにする。春には厩肥を畑に撒く。

畑の作物は青稞、ジャガイモ、カブラが重要である。春耕は三角枠型直轄犁で行う。くびきは太さ20cm、長さ3mの巨大なもので、2頭の犏牛で引く（図11）。雄の犏牛は農耕にこき使われるだけで、生まれ変わるとしてもなりたくない生き物の代表である。二牛二人の抬杆で行う。犁条に青稞を散播し、もう一度犁をかけて覆土する。年1作で、今年青稞作付地は翌年ジャガイモ、明後年は油菜と、輪作だ。

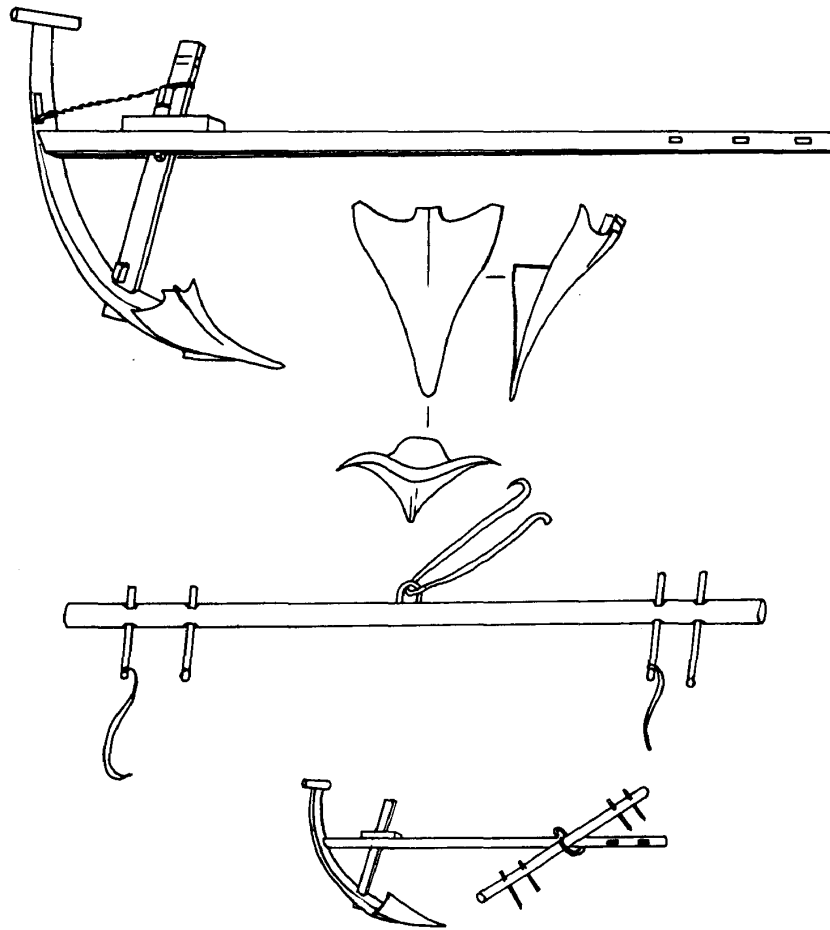


図 11 蔵族の三角犁直轅犁。
犁柱角度調節装置付き（徳欽県奔子欄）（羅二虎画）

中甸には松贊林寺というラマ寺がある。5代目のダライラマで黄帽派の始祖ツォンカバが560年前に建立した寺である。このラマ寺は西アジアの村塞と同じで、平頂屋根の僧坊が密集して密集村落のようにになっている。石積みに白壁を塗り、壁上端を赤く塗る。立派な城塞の構えになる。以前は松贊林寺を支える為の二つの寄進村があったとダッパ・ケルデンが言う。本堂は列柱建築で、聖壇の中心はツォンカバの木像、弥勒菩薩木像、現在のパンチェンラマの1986年当時の写真などが並んでいる。バターを灯明用に使うので、堂内はバタ臭い。聖壇の前には額枕が置いてある。お祈りの時、額の前で合掌し、胸の前で合掌し、跪いて手をつき額をその枕に打ちつけるのである。熱心な人は枕をずらして、床に直接額を打ちつける。

本堂と別に祇園精舎という講堂に当たる建物がある。僧達が勉強をする場所である。勉強は経典を読むだけでなく、師の与える問題を数人で議論するのだという。この世の現象にも物にも実体がないのに転生するのは何故なのか、業を荷って転生するものは何なのか、といった議

論を行うのだそうである。議論が上達するとラサの本山へ行って、大師の指導下で他流試合をやる。議論の防衛を果たすと geshi という証状を貰い、松賛林寺に帰ると教師になれる。ラマ教では偉い僧に生まれ変わりが居る。祇園精舎には朗仁大師というラサの三大師の一人の写真が飾られていて、この大師も生まれ変わりが居るそうだ。面白い信仰である。

壁画に四世界の絵がある。空間観である。南は人間の世界、北は動物、東は豚の世界、そして西方は無言の世界である。南と北はよく判る。東というのは漢族の世界を思えば良いのだろうか。西が無言というのは広漠たるチベット高原か、砂漠か。モノにとらわれた心に浮かぶ想像の見本で、左にみならず、解脱と一喝されるかもしれない。

僧坊をまわって見る。各家族の寄進した僧坊が石の廊下で繋がっていて、暗い空間を昇り降りすると中世ヨーロッパの城に似た雰囲気がある。一つの僧坊で僧が一人熱心に経本を見ながら誦している。村人がお布施を払って病氣治癒を依頼しているのである。俗世と切れることで繋がっている。繋がる為に切れるということでもある。

普段は静かなラマ寺もチベット暦11月末には賑わうという。跳神節というお祭りがあり、村人全員が集まって神の面、鬼の面をつけて踊るのだそうである。デندن太鼓を振り回し、タンバリンを打ち、3m程の長い金管ラッパや、人間の脚の骨で作った法螺貝を吹き鳴らすという。中甸盆地を見下ろすこのラマ寺で大音響を響かせたい気持はよく判る。しかし、大音響になればなるほど、盆地の静寂も強まることだろう。私はラマ寺の僧坊に何日耐えられるだろう。

ダッパ・ケルデンに尋ねてみた。中甸の暮らしは寂しくないですか。かれは少し考えて、まあそうですが、名前をたくさんもっていますから、と言った。どういうことかと尋ねると、母にもらった名前はダワ・ゼリンといい、ダッパ・ケルデンはインドのラマ僧にもらった名前、他にダライラマにもらったテンジン・ノドゥという名があり、赤帽派のラマにもらった名前もあるという。つまりたくさん名前はあちこち移動する生活の環を反映しているのである。彼の話によると、人々はずいぶん移動している。彼の父は青年時代、阿片で稼いだ元手を持ってチベットの林芝の馬帮とラサへ行き、シッキムへ出てヒマラヤ南麓をシムラ迄行き、シムラ近くのカスンプティという交易センターに住んだ。そしてラサーカスンプティ間で羊毛服地の交易に従事し、母はカーペット工場で働いた。ダッパ・ケルデンは一人でマッディヤプラデシュ、カルナタカ、マイソールと移動し、マイソール近くのベロクuppという町にあるラマ寺院でチベット語を教えていた。1988年に父と一緒に中甸に帰国したが、母と姉妹はシムラ近くの町に残留しているという。何とも夢のような大遊行譚だが、とにかく英語はインド訛りで流暢である。そうした大移動は決して少数の人間だけではないのだという。そして、その流転の人生の中で、あちこちで名前を貰い、各地の生活の環を思うと全然寂しいという気持はないと。こちらは唸るばかりで、詳細を尋ねる気持ちを失ったが、今思うと残念なことをした。

もう一つだけつけ加えておくと、チベットの伝統宗教は苯教といい、ラマ教はこれにインド、中国の仏教が混合したもの、苯教は納西族の東巴教に似ているのだという。東巴教は後で麗江を訪れて見たところでは、自然界の最高神祇を署といい、祭儀では、森林、水源、野生動物を破壊する人間に署が報復する、その署に許しを乞うというアニミスティックな宗教である。宗教比較はともかく、大陸内部の移動世界は大変なものである。

(2) 奔子欄

中甸から北西へ約60kmの距離に奔子欄という小さな宿場町がある。そこへ行く道は古くからのラサ街道で文成公主もラサへこの道を辿ったと言われる。初め30kmばかりは高原の小起伏を上がり降りして、U字谷下部のモレーン地帯を行く。山地はモミ、トウヒ、松、そしてシャクナゲとカシの灌木である。やがて金沙江河谷に面したものすごい急崖のV字谷をウグイスの谷渡りさながらに下り始める。金沙江河谷の斜面は一面の草山になる。乾燥熱風が吹き込むのである。一挙に1,000m下降して金沙江沿いの道を行く。斜面を深く刻む谷の出口には乾燥崖錘が発達し、集落もある。金沙江にかけられた伏竜橋を右岸へ渡ってしばらく行くと奔子欄である。やはり大きな乾燥崖錘の上にある小集落である。奔子欄は現地名Konzulawaの漢語訛りで、Konzuは谷底の宿場、laは町、waは人の意味で、つまり岩肌むき出しの1,000m以上の谷底にある人間も泊まれる宿場町ということになる。崖錘規模が大きく、湧水が豊富にあることが宿場町成立の原因だろう。この町は乾燥の厳しい金沙江沿いラサ街道にあるオアシスの佇まいがある。道沿いの水溝に清冽な湧水が流れ、その中に牛が入って柳の葉に食いついている。

奔子欄も住民は蔵族だが、海拔2,000mで乾燥熱風が吹き込むこともあり、中甸より随分暖かい。雪は降らないし、村の家は平頂屋根だ。石垣段畑は二期作が可能で、夏はトウモロコシとアワ、冬は青稞麦とコムギをまく。ここの犁も巨大な三角枠型直轄犁で、これも太いくびきの下にながえを紐で緩く縛る(図11)。

奔子欄訪問の目的はしかし、馬帮宿を見るためである。郷委員会のルジンツリ氏を待つ間、飯屋に座って様子を見る。今も馬帮は結構往来する様子で、往来者を見る人々の視線は宿場町独特のものがある。通行人も壁際にしゃがんで他の通行人を見ているかと思うと、立って他へ移る。しかし、あまり商談が弾む様子でもない。以前、東トルコの渓谷沿い宿場町で見た様子と随分違う。その町では通りに低い椅子がたくさん並び、初対面のイラン人やトルコ人、ロシア人がニッキ入りのトルココーヒーや濃い茶を飲みながらにぎやかに喋る場があった。多分商談も弾んでいる雰囲気だった。気質の違いか。

脇に座っている中年男にどこからか尋ねてもらうと、中甸の商人で松茸を買い集めにという。松茸は斜面のずっと上の松林にいっぱいあるそうだ。蔵族も漢族も食わないが、日本が買

う。松茸ブームが中甸にも入ってきて有り難いのだが、困るのは値動きが激しく、買値は1 kg 150から200元だが、中甸の仲買価格がkg 当たり100元から700元と乱高下する。特に日本の休日の土、日曜は、ガタッと下がるのだそうだ。ともかく集めた松茸は2、3日後に日本へ着いているそうである。驚いた話だ。日本人の松茸好みチベット高原のひっそりした松林をネットワークの中に組み入れて、住民と商人に新しい現金収入の途を提供している。結構なことだという見方があるけれども、私は感心しない話だと思う。こういうネットワークのあり方はダッパ・ケルデンの場合のように、実体験を通して地域連環が実感されることにならない。物と欲望が金で媒介されているだけの話である。松茸を集める人も、日本で雲南松茸を食べる人も、その行為を通して相手の顔や地域社会を思い浮かべることができない。世界は繋がっている、経済の世界化だといっても、連環した世界を個人体験として実感する材料がない。近代システムが措定している交流というのは大体こうした性格だ。ペーパーカンパニーに似ている。ヴァーチャル・リアリティーだ。インターネットとやらはその仮想空間を世界大に拡大しようというのである。虚構追求路線はバブルの二の舞になるに違いない。社会の仮想体験追求路線を実体験追求路線に転換する手だてを考えないと、人間は情報に押し潰されてしまうだろう。

ルジンツリさんが現れて、妄想が破られた。家に案内されて、馬帮の話聞く。奔子欄はチベットの林芝から来るキャラバンと麗江からのキャラバンがここで交易したのだという。伏竜橋が作られる前はこの宿場町も特に夏に賑わっていた。理由は夏の金沙江渡河は大変で、水が引くのを待つ馬帮で賑わったのだという。麗江馬帮の商品は普洱茶、鶴慶の腊肉（豚の塩漬け肉）、火腿（腿の薫製）、林芝馬帮は国境近くの塩井（町の名）の塩が主だった。奔子欄の産物にツァンパを貯蔵する木箱と客用のツァンパ入れ木椀があり、これは今も作られていて、後で工房を訪れると漆金泥塗りである。漆は怒江沿いが産地で、その漆は漆器作りに需要のあるチベットや大理へ流れ、南の傣族地域には行かない。傣族は漆器の代わりに竹を使うからだという。

ラサ巡礼は以前は馬帮と一緒にロバで行くので、2、3カ月かかったが、今はトラックで往復10日間と随分簡単になった。ルジンツリ氏は1992年に行き、有名な大寺を全部まわった。土産に経典と様々な仏具を買ったという。仏間に案内されて驚いたが、壁作りつけの戸棚に経典がたくさん入っている。チベット文字で書かれていて、全く判らない。平頂家のバルコニーへも案内される。エンドウ豆を干して飼料を作っている。その脇に焼却炉がある。尋ねると、香煙炉であるという。日本や中国内地でも使う室内で焚く香炉とちがって、雄大な物だ。毎日香煙を天へ贈るのである。香煙の焚き物は作物のワラを燃やし、そこへ、ヒバ、シャクナゲの枝、松葉、乾燥菊花を加える。食物を楽しむ仏もいれば、香りを楽しむ仏もいる、香炉の大きさが一家の富の指標になるという。この後、気をつけて見ていると平頂家のバルコニーにはどこも

この香炉がある。

ルジンツリ氏の家を辞して、畑を歩く。石垣畑の中に、石壁の灌漑水路が走っている。トゥモロコシが実りかけている。トゥモロコシは水臼で挽いて団子にして食う。水臼は何か尋ねると村人が水臼小屋に案内してくれる。谷川から水を分水して水車羽根を水平方向に回し、その軸が水平碾磑に連結され、下側の石臼が回転する構造である。トゥモロコシは蒸留酒作りにも使う。それは ara という。アラビア語が入っている。

2. 北亜熱帯滇西北区

(1) 麗江

雲南の高山の中で最も神秘的な美しさを湛えた山は玉竜雪山ではなかろうか。高さは5,600m 余りでさほど高くはないのだが、チベット高原から虎跳峡で切り離された孤立峰で、麗江盆地に臨んで屹立している。高度5,000m 位に氷河を抱いている。盆地の孤立峰で氷河をもつという条件のせいだろうと思うのだが、山体に雲がかかり始めた時、上昇気流と下降気流が交錯し、激しくわきたつような動きの雲の簾がかかり、あたかも竜が昇るのかと思われるような光景になる。白水河の河原からその光景を見た時、玉竜雪山という名前は脳裏に焼き付いた。

中甸に納帕海という氷河湖の名残があるように、麗江盆地は雪山の氷河がもっと低地にまで伸びていた時代の名残である。町は盆地南部にあり、高度計は2,300m を指す。湧水が豊富なので、町は川の町で、たくさんの堀がかつて湿地だった時代を忍ばせる。

麗江盆地を北から南へ走ると、北部と西部は山麓のモレーン地帯が海拔高度2,800m まで伸び、その南はモレーンの再運積面になる。北側は小石が主体、南側は粘土が主体である。モレーンの下端に豊富な湧泉がある。竜泉寺、玉峰寺、三東河などの水源寺院がそこに設けられ、湧水は清竜河に集められ、それから灌漑水路が何本も分かれる (図12)。

盆地東部にも小規模だが湧水があり、清溪水庫、中済水庫、黒竜潭などのダムがある。黒竜潭、清溪水庫は明代の木土司が麗江の町を作る時の水源とした古い貯水池で、築堤して湧水を貯めた池である。現在は西側の清竜河から中済水庫、清溪水庫へ通水され、そこからさらに黒竜潭へ通水されて、乾燥年の水不足を補う。漾弓江は盆地南端部にあった沼沢地を掘削して排水し、麗江の町の洪水防止を狙ったものだ。

木土司の先祖は麦宗といい、麗江府誌によると西域の人で、宋代末に麗江に移住し、各種の言語に通じ、土人に推されて酋長となったとある [麗江納西族自治州志編委員会 1991 : 134]。その子の阿良は元軍ビルマ遠征の時、金沙江を渡江した元軍を60km 北の宝山古城で迎え、麗江路軍民総管に任ぜられた。明代洪武帝の時代、阿得が入貢し、明軍の滇西北部征討に

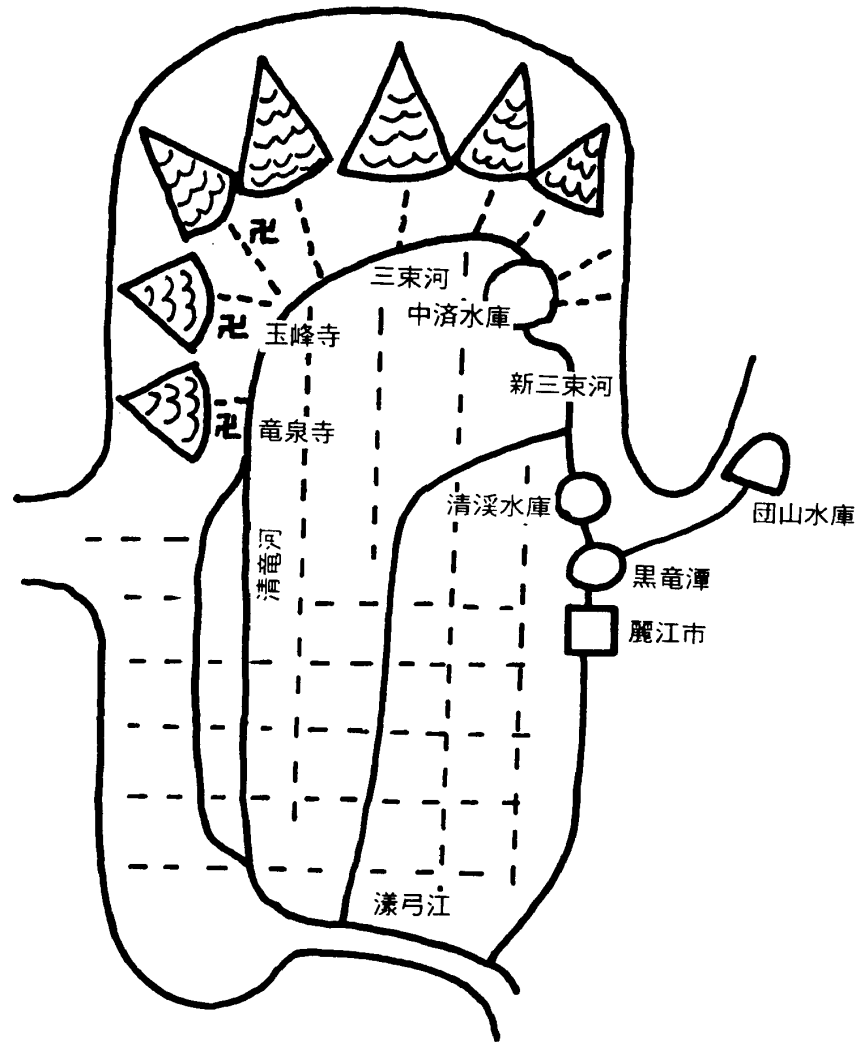


図 12 融氷水に依存する麗江盆地のオアシス灌漑デザイン模式図

つき従い、麗江府の土知府に任ぜられ、木姓を受け、麗江の開拓を命じられる。その子の初襲は明軍の麓川征討に功を挙げる。

竜泉寺にそうした明代の灌漑分水路が残るので訪れてみる。竜泉寺の集落は石壁の四合院住居が密集し、道の石灰岩敷石は深い轍の跡が刻まれている。広場に今は小さい商店がパラパラある程度だが、かつては麗江・中甸・チベットのキャラバンが通る重要な交易拠点だった。家の石壁の下は石舗装の水路に清冽な水が流れ、各家は水路に下る階段をもっており、青衣の女達が洗濯、炊事準備をここでやっている。清竜河の分水堰脇に竜泉寺がある。この寺は背後の石灰岩山地からの湧水源頭に寄進された寺で、湧水池は澄明な水底に砂が舞い上がっている。その水は先述の生活用水となり、下流は灌漑用水になる。寺の脇に清竜河の第三道水分流も通され、灌漑水路に清竜河の冷水が流れ込んでいる。分水堰向側の水田は湿田にクワイが植えら

れている。

このように麗江盆地は豊富な融氷水を利用した灌漑網がずいぶん発達している。オアシス灌漑のデザインである。私の想像は、西域のオアシス地帯から来た木土司の祖先が、融氷水を利用した灌漑を進めると同時に、盆地南部の沼沢地開拓を行ったというものである。

(i) 黄山郷文栄村

盆地西南部の村を訪ねた。石組みの幹線排水路と支線排水路が縦横に走り、家々は白族と似た照壁をもつ三房一庭スタイルである。納西族の人々はそうは言わず、蛮楼冲天という。文栄村の村長高介南氏に会う。10m 四方の中庭のある立派な家だ。高氏によると、文栄村は明代の木土司の次男文栄が沼沢地に排水溝を掘削して開拓した。土司の奴隷が開拓農民となり、定住した。文栄村の灌漑水は新三東河から漾弓江に落とす。水は豊富だが、5、6月は厳しく水門を管理する。水門の管理は第一級水門を郷政府の水利水田管理局が行い、以下、白華行政村、文栄自然村、合作社が担当する。単位の名前は変わったが、こうした水利組織と慣行は解放前と同じであるという。

作物を尋ねた。以前は水稲も栽培したが、冷水で収穫低く、今は夏にトウモロコシ、大豆、冬に小麦、ソラマメ、油菜、エンドウ、ヒヨコ豆を栽培する。農地は山地区にもあり、そこは四季豆、大白雲豆、ソバ、燕麦、ジャガイモ、リンゴ、梨、クルミなどの果樹を植える。小麦の場合、夏に荒おこしをして、9、10月に再度犁耕し、散播して犁か鍬で覆土する。冬の間、鍬で中耕をし、5月に収穫する。家に持ち帰り、連杆（カラサオ）で脱穀する。夏は6月にトウモロコシを点播する。

犁は四角枠型直轆犁で2頭の黄牛で引く。やはり二牛二人の抬杆で、一人はくびきと長柄の連結部を押さえて前向きに歩く。犁先は大きなアードで、犁冠を犁柱にかけて右撥土する。しかし最近では鉄製の軽い長床短轆犁に変わり、チェーンをくびきに結ぶ。しかしこの場合も一人がくびきを軽く押さえながら前向きに歩くことは同じである（図13）。



図 13 二牛抬杆の耕作法
左：麗江市，右：麗江県白漢場

麗江は以前有名な馬、ラバの産地で、馬帮が買いに来た。チベットとの茶馬交易は麗江が拠点だったのである。馬帮は中甸経由で徳欽まで行く者が多かった。人民公社時代は湖南省や河北省からも犁耕用の馬の需要が多かった。畜舎には藁と松葉を敷き、春、厩肥にした。今は、馬、牛飼育は殆ど姿を消し、新たに乳牛飼育が始まっている。

(ii) 云杉坪周辺

麗江盆地を北へ向かい、モレーン地帯の低い峠を越える。この辺りは放牧地で、牛やヤク、羊、馬が草を食っている。下ると白水河がU字谷底に清澄冷水を流している。彝族の娘達が雪山で採ってきた雪蓮華（福寿草の類）を売っている。厚い毛に包まれたソウ果を強精漢方を使う。

ケーブルカーで海拔高度3,100mの云杉坪へ登る。云杉はトウヒで、云杉坪は平坦な alpine meadow にトウヒの純林が立っている。ジュークジュークした平地は泥炭質の土である。云杉坪は観光地として売り出し中で、玉竜雪山を見る立地に恵まれている。トウヒの切り払われた放牧地もあり、そこで色鮮やかな長い襜スカートを翻して彝族の娘達が歌いながら踊っている。泸沽湖の彝族で、バイトに来ているとのことである。泸沽湖は母系社会を残し、若衆宿をもつ納西族でも有名である。

放牧地で男が塩をもって黄牛と犏牛を集めている。それを台湾や香港の観光客が喜んで見ている。男は玉竜山西斜面の大都郷甲子村の住人で、10数戸の牛を承包で放牧している。甲子村は彝族村だが、斜面に沿って高所に藏族、その下に彝族、苗族、山麓に納西族の村がある。藏族の言葉は判るが、苗、納西の言葉は判らないという。甲子村の彝族は各戸が黄牛7、8頭、馬2、3頭、羊20ないし30頭を飼う。藏族はもっぱらヤク牧畜で乳製品を作るが、彝、苗族は乳製品を作らない。

甲子村まで3kmの道をこの男について辿る（図14）。一番大きな犏牛も一緒だ。この大犏牛はこの男の所有で、得意なのだと言ふ。村への下り道は見晴らしの良い山道で、トウヒ、モミ、ツガ、雲南松が点在する他は *Viburnum*、メギ、それにシャクナゲがたくさんある灌木林だ。シャクナゲは葉裏が無毛で4月に白、赤、ピンクなどの花が咲くと言ふ。緩やかな斜面には校倉造りの家が点在し、その脇には必ず大きいハザ木が立っている。畑は今、ソバ、燕麦が実り、桃源郷の感がある。

この彝族の男性陳士仁の家で高度計は2,850mを指している。校倉造りの平戸間家が五棟、ゆったりと配置されている（図15）。一棟は夫婦の住む母屋、一棟はおじいさんと子供が住む。他は畜舎である。母屋のタタキに囲炉裏があり、おじいさんが水煙草を吸っている。水煙草は雲南の人々の一服用になくはないもので、町の人々も太い竹筒をもって歩く。八路軍でも雲南の兵隊は水煙草を手放さなかったのだと言ふ。いろいろで焼いたジャガイモを貰う。塩とコリアンダー（タイのパクチ）をまぶしてジャガイモを食いながら話を聞く。

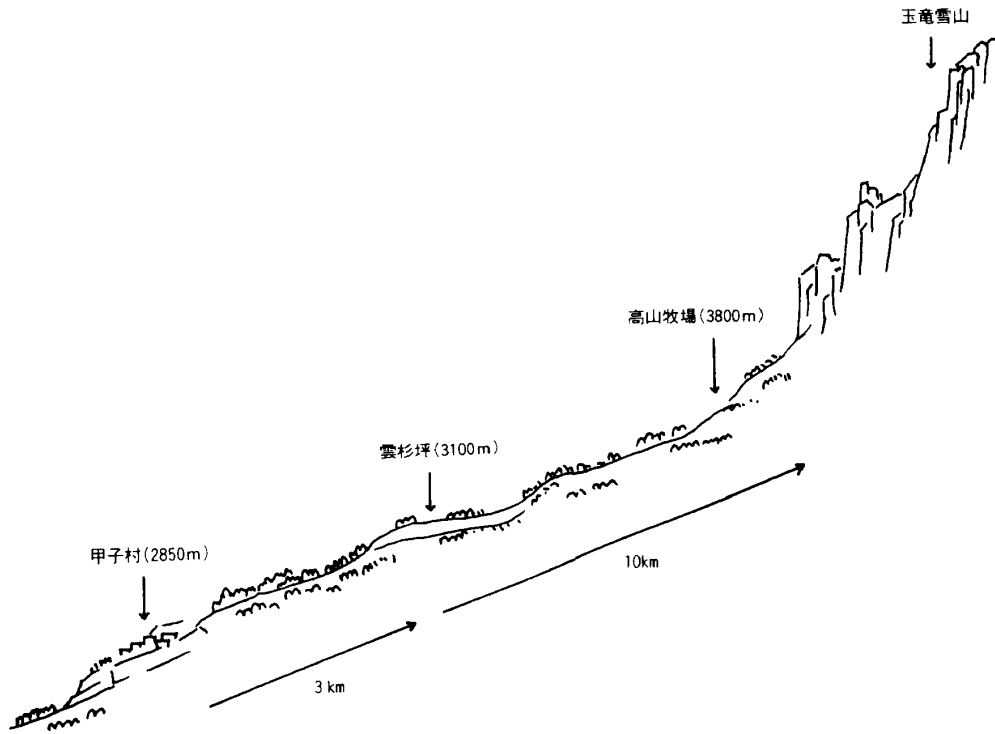


図 14 玉竜雪山西南斜面（羅二虎画）

甲子村は今正式には黒水村と名前が変わっている。陳さんの部落は黒水第二隊である。村人は四川の塩源から4、50年前に遷徙した人々で、おじいさん（カミさんの父）は塩源の生まれである。陳さんはカミさんの家に入っているわけである。塩源盆地はランドサット写真を見るとよく判るが、シンクホールで生じた盆地だと私は推定している。滇中から昭通地区にかけては中生代の三疊・ジュラ系の地質で、この地層は屢々岩塩層を挟む。大きな岩塩脈が溶失すると、上の岩盤が落ち込んでシンクホールが生ずる。塩源は縦横30km程のシンクホールである。白亜紀の地層にはもっと巨大なシンクホールが生じる。一番良い例は四川盆地で、長径450km程の楕円形盆地の成因はシンクホールであると私は推定している。もっと巨大なシンクホールがある。長径900kmのタリム盆地の成因も同じと私は推定している。こうしたシンクホールは地下深くにまだ岩塩層が残っていて、塩が出る。四川省の自貢に塩業博物館があり、そこで見ると、巨大な富世塩井は後漢代に既に深さ100mを越える。清代に入ると1,000mを越える塩井も出現した。塩業の歴史はどこまで遡るのか判らないが、都江塩を作った有名な李冰が紀元前三世紀に穿広都という塩井を開発している。秦漢時から各種の掘削ドリルを工夫発明しているのである。塩井からはまた天然ガスが豊富に噴出し、天然ガスは前漢時代から利用している。塩業博物館は実に面白い博物館で、ここを訪れると、中国の伝統工業技術のものすごさの一端に触れることができる。似たようなシンクホール地形は東北タイからラオスにいっぱいあり、そこも塩井があり、地表に塩が吹く。その塩井開発も四川省の塩業技術者が関

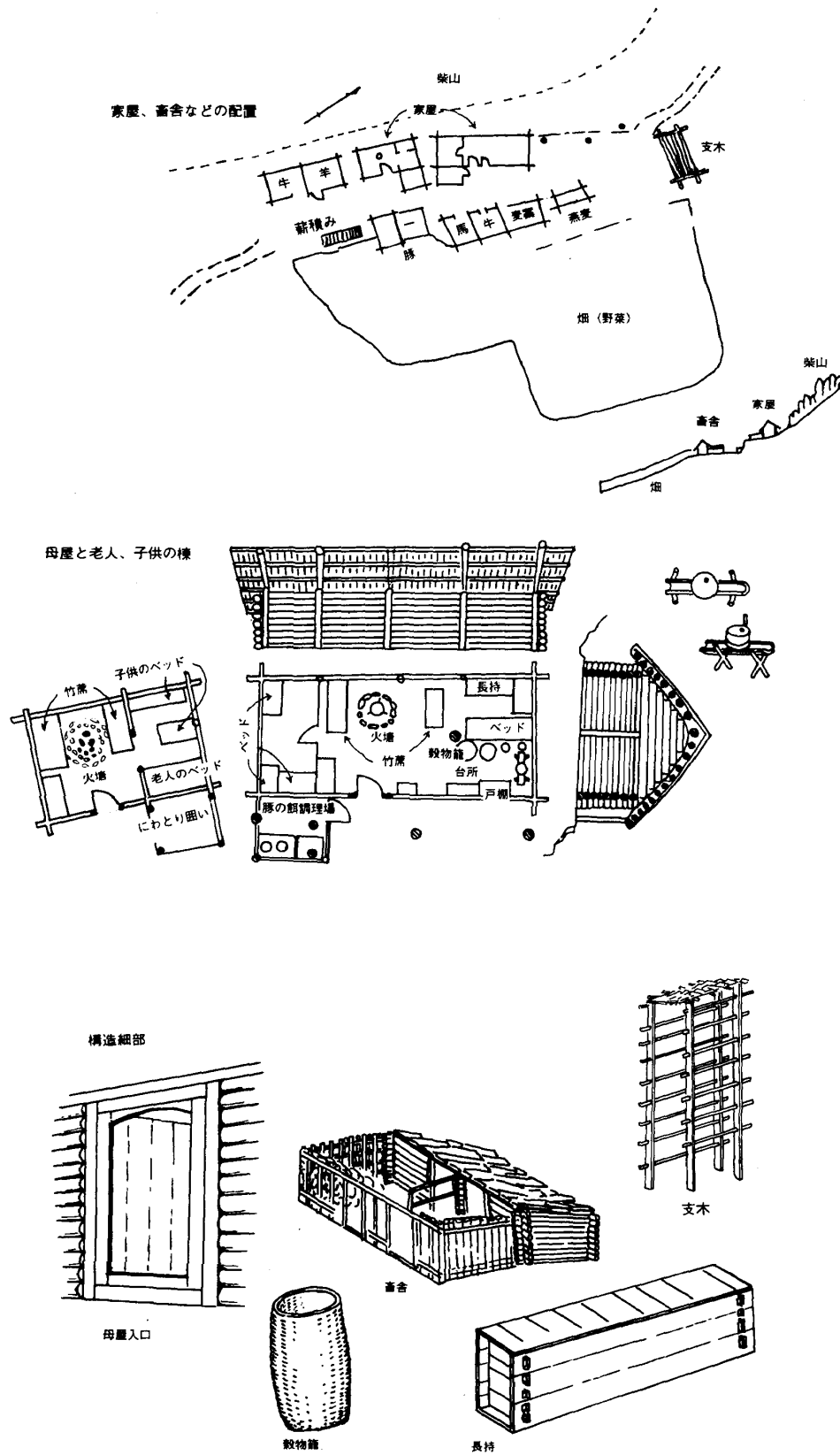


図 15 玉竜雪山の彝族の住居 (麗江県大都郷甲子村黒水第2隊) (羅二虎画)

係しているのではなからうか。彼らがバンチェン文化の担い手ではないかと私は想像している。

黒水村の話に戻る。ここの生活は半農半牧だ。主な農作物はジャガイモとソバで、ぐっと少なくなって燕麦、トウモロコシだ。しかし干魃と多雨害が著しく、10年の内5年は大減収で、牛と羊を売って食料を買う。山麓部の納西族は灌漑水路をもっている所以で干魃害は免れる。焼畑も10年前まで行って、作物は同じだが、2、3年植え付け後は放棄した。今は常畑のみで、畜舎の厩肥を肥料に使う。敷き藁は蔵族と同じく、カシの葉、松葉、ソバの藁などである。常畑は今年ジャガイモ、来年ソバ、明後年燕麦という輪作が普通である。

牧畜もかなり重要で、特に先述の大減収年には命の綱になる。羊毛は毛布作り、毛糸紡ぎに使い、毛糸でセーターを編んで売る。勿論牛も羊も肉用に売る。羊肉は少し自家消費にも使うが、牛肉はまず口にしない。乳製品はと聞くと、チーズやバターの作り方は知っているが、農作業で忙しいので搾乳やバター作りの暇がなくて、作らないという。

試みに生活暦を聞く。すべて旧暦である。春節には祖先を祀り、羊や鶏をつぶす。米の飯を食べ、酒も作る。春節が終わると、浅い雪を掘ってジャガイモを植える。2月、燕麦を散播し、犁で覆土、農業祭りを行い、腊肉、羊、鶏の肉を供え、老人が雨乞い儀礼を行う。3月、ソバを条播する。牛の出産が始まる。4月、ジャガイモ畑、ソバ畑の除草に追われる。牛の出産が続き、雨が始まる。5月、ジャガイモ畑で2回目の除草をする。暇ができるので、猪、岩羊、鹿、山鼠の猟に屢々出かける。熊も捕れるが、表向きは禁止されている。銃で狩りをするが、傈僳族は弩弓をもってやってくる。6月、松葉、櫟の葉を集めて畜舎に敷く。24日は火把節で、羊、鶏を供犠する。若者が火把をもって娘を捜しに歩き、カップルができると笛や二胡で賑やかに踊る。祖先を祀る儀式もある。7月、ソバ、燕麦を収穫し、牛小屋の上で干す。羊の出産が始まり、8月まで続く。8月、ジャガイモを収穫する。ソバ、燕麦を曲木で打って脱穀する。9月、雨が続く。10月、燕麦脱穀、薪とり、厩肥を集めて畑に運ぶ。雪が始まる。11月、農閑期に入り、薪集め、屋根修理を行う。屋根はコッパ葺きである。家畜は舎飼いに移す。12月、雪深く、60cmにもなる。

ソバは高度によって、栽培種が違ふ。2,000m以上は苦ソバのみ、下は甘ソバも栽培ができる。苦ソバの食いは色々ある。まず水碾で粉に挽く。①ソバガキ、②粍粍、つまり団子を炉の灰の中において焼く、③薄い粍粍を鍋壁に貼り付け、底に水を入れて蒸す。一種の水餃子。④湯で煮た粍粍、⑤粉に湯を加え、粒にして油で炒める。⑥臼で細かく搗いて涼粉を作り、鍋の熱水に少しずつ加えて攪きませ、ウイロウ状に固めて細かく切り、つゆをつけて食う。ソバの餌糸である。⑦ソバ糕、ソバ粉と発酵小麦粉と砂糖を加えて湯で練り、蒸す。蒸しパンである。⑧ソバ面条。つまり日本でいう蕎麦。相当なソバ食の伝統がある。

農具を見る。ここの犁は北部の彝族に特徴的な形である。三角枠型の短直轆犁だが、実質的

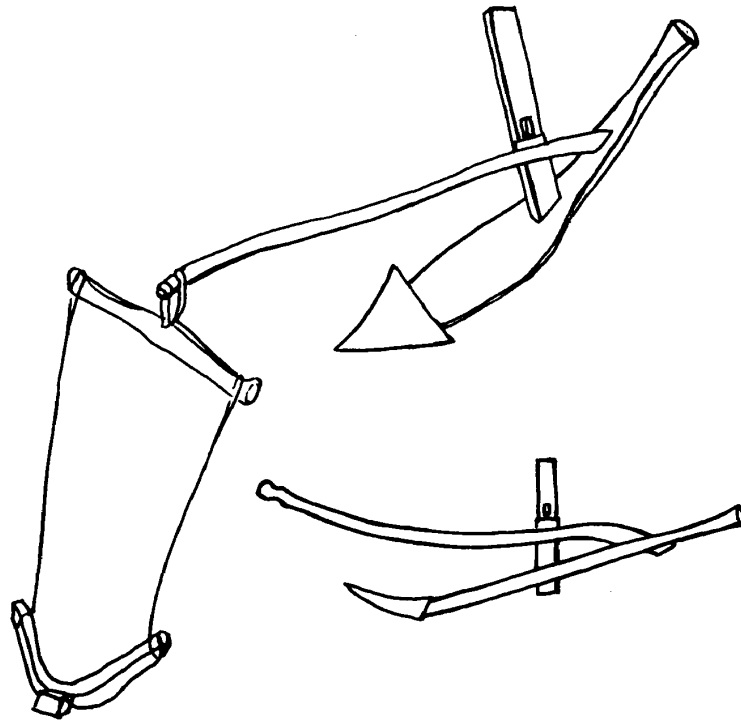


図16 彝族に特徴的な犁（麗江県大都郷甲子村黒水第2隊）（羅二虎画）

には弯轅犁だ。犁身下部が翼状に出っ張り、犁冠の役割をするが、犁先共にアードである。犁身上部につけた犁柱の頭と犁柄をもって、犁を左右に傾け、左右どちらにでも土を撥ねられる。斜面農業向きに適合した犁である。一頭牽きで、くびきとロープで連結する揺動犁である(図16)。

話が終わったところで、カミさんと娘に正装してもらって写真を撮る。カミさんは青い上衣に黒いチョッキを着る。チョッキは金モールで左右を合わせる。下は赤、緑、白に染めた長い襜スカートである。頭に四角い大きな帽子をかぶる。娘も同じ恰好だが、彩りが華やいでいる。

緩やかに傾斜した長い斜面を、蔵、彝、納西が棲みわけて暮らす。彝族の空間には苗も少し加わっているが、村は別々だ。高度に従って気候が違うから生活の糧も違う。それぞれに大きな中核地域があって、そこからそれぞれの生活空間を水平方向にのばすと、ひとつの斜面を棲みわけることになる。それぞれにニッチが自ずと決まっていて、他の層位の住人のことはよく知っているが、混じり合わない。彼らを分かっているのは一体何なのだろう。観天望気の方法が違うとしか考えつかない。

3. 中亜熱帯滇中高原区

昆明は1,900mの高原にあり、青銅器時代から文化が栄えた滇中の中心地だ。楚の莊躄が入

滇して王となった史記の記述は先に触れた。雲南は銅、錫などの鉱脈に恵まれ、漢書地理志益州郡の項にも記載が多い。小竹武夫の訳から少し拾ってみよう。滇池の西、連然に塩官がある。律高（馬竜の東、今の曲靖市）に錫。その東南の監町山に銀、鉛。賁古（建水東南、今の紅河州）に錫、銀、鉛。来唯（文山西、蒙自）に銅、等である [小竹訳 1997:410-411]。明代には、銀、銅の産出量は全中国一位となり、銀は浙江省など他の8省を合わせても雲南の半分に満たない [馬 1983:151]。全鉱産物の銀換算量は年150万両、清代の銅産量は年5千トンに達したとある [同上書:155]。滇中、永昌は精錬用の木材伐採の為に、東川がよく例に出されるが、禿げ山になったのだと言われる程である。従って、滇中は漢族が多い。水田も畑も漢族の精耕細作の風景である。しかし昆明の近くにも彝族や苗族がいる。そこを訪れる。

昆明の西入口から西北へ登る。坂道の入口には車家壁彝族村と書いたアーチが立っている。低い峠を越えて小盆地に入るとダム湖がある。暁明村という彝族の村が西岸にあり、谷底の棚田で生活している。この辺りには他に白、苗族もおり、苗族は高原上に、彝族が高原を開折する谷沿いに居ると、同行の民族学博物館の張学錡氏が言う。昆明周辺の高原は三疊紀・ジュラ紀の堆積層で、ところどころに石灰岩と塩が出る。高原頂部は平坦で、滇中高原の特長がよく出ている。30分ばかりで2,300mの高原面に出る。点々と苗族の小村があり、桃、団栗 (*Cyclobalanopsis* spp.), デイゴ, カンナ, 美人蕉などが庭にある。見晴らしの良い平坦な道にはウマノアシガタ, コメツツジ, 山茶, コデマリ, 茴香などが生えている。昆明は京都でよく見る植物が多いが、何となく奇妙だ。例えば、泰山木とアジサイが7月に同時に咲いているのはいいとしても、ブーゲンビリアやカボックと共存するとかである。亜熱帯の特徴と言うべきか。

張氏顔見知りの農民を五家包社村に訪ねる。苗族村で、藁葺き切妻家がパラパラと散在している。住居壁は土坯（版築で作った日干しレンガ）を積むが、豚小屋は校倉造りだ（図17）。韓庭仙という村人を訪れる。ここの苗の屋敷は塀は全くなく、コノテヒバの生垣越しに中が見えるので庭を覗き込むと、まことに人の良さそうな桃割れの娘が嬉しそうににっこり笑う。そしてすぐ庭の桃の木に登って桃の木を揺する。バラバラと桃の実が落ちる音で母屋の中から母親が現れ、桃の実を拾って我々に勧めてくれる。母子共にまことに人情が篤い。娘は牛を放牧に連れ出そうとしていたのだが、やめにして、小椅子を庭に並べ、我々が座ると、庭の端からハウズキを摘んで来て、これまた我々に勧める。このハウズキは甘いと言っている間に今度は自分の住む離れから、花山節の踊りに使う刺繍布や芦笙を持ち出して見せる。きれいだきれいだと皆で褒めると、花嫁衣裳のスカートや上着を着て現れる。決して誇示的ではなく、にじみ出るような人の善さがそうさせるのである。娘の写真を撮る。母屋で仕事をしている母親も顔を見せて嬉しそう顔をする。時に様子を見に出ては、仕事に戻る。

母親の仕事を見に母屋に入ると、薄暗いタタキのガラとした室内に、十文字の糸繰り器を

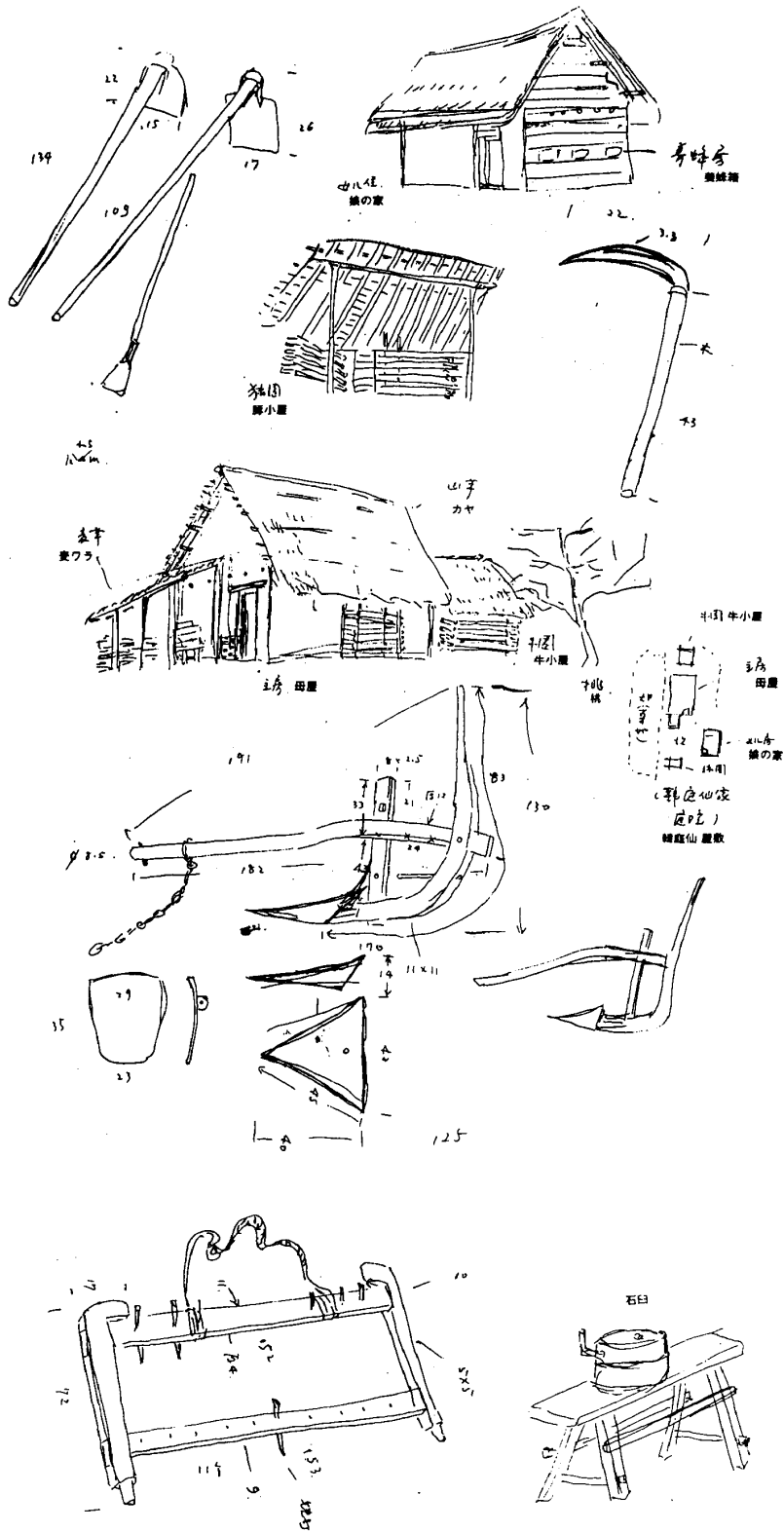


図17 昆明市付近の苗族の住居と農具
 (昆明市團結鄉五家包社村)
 (羅二虎のフィールドノート転載)

置き、麻糸を巻き取っているのだ。麻糸作りはまず、麻皮を剥いで干し、長さ2mの細いベルトを作る。これを細く裂いて、どんどんつないでいく。つないだ糸は足踏み紡糸器で紡ぎ、灰汁で煮る。洗って乾かしたものを十文字糸繰り器に架け、ほぐしながら、糸を取り出す。この糸を使って織機で麻布を織る。織機は右側の吊り紐を引っ張って梭を左右に飛ばす割合大型のものだ。娘の母親は熱心に糸繰りをし、隣家のカミさんは熱心に布を織っている。人が良くて働き者である。

あちこち覗き込み、女達の仕事ぶりを見ていると、韓さんが昼食の準備ができたと呼びに来る。タタキの上に石を丸く並べた炉がある台所棟へ行く。飯はトウモロコシを石臼で粗挽きして炊いたもので、モチ種が少し混ぜてあるがポロポロして、お世辞にも旨いとは言いかねる。米の飯もある。同じ鍋の中で左右に区切って炊いたものだ。他に茹でジャガイモのスライス、サヤインゲンの煮物、キノコ類の油炒め山盛りと、豚の脂肉スライスの煮物で、実にどれも旨い。戴きながら話を聞く。羅二虎は言葉が判らないので、張さんから二重通訳である。

ここの苗族は元々は貴州省の黒石土から清代末に移動した人々で赤苗だという。彝族の公主が楚雄の彝族に嫁入りした時、一緒に数万人の苗族が移動してきて、硯台山寨という村に入った。その後、解放前にそこの彝族と移入した苗族が共にここ西山区團結郷に移動した。苗族は高原面に居たのでここでも高原面に移入し、五家包社村を作った。彝族は今ダム湖のある谷筋に曉明村を作った。高原面は気温が低く、作物の稔りもよくないし、生活用水の便も悪く不便なので、合作社時代の1959年に一旦谷に降りた。曉明村よりも上流の章白村というやはり彝族の村に移った。しかし、土地所有権を得られず、摩擦が生じたので、相当数の苗族が再び高原面の五家包社へ戻った。韓さんは1979年に戻ったという。今、高原面に苗族集落が5個あり。500人が暮らす。五家包社では35人が暮らす。問題は土地争いで、五家包社の畑は54亩しかない。彝族はすべての土地の所有権を主張し、苗族が少し畑を拡げると文句を言う。荒山は広いのだが、それもすべて自分たちの薪炭林だと主張して、開畑を許さない。薪とりも苗族は遠くの山迄行かねばならない。要するに西山地区は伝統的に彝族の土地で、彼らは苗族が増え、土地所有権をとられることを恐れているので、何かと圧迫するのだという。桃源郷のように見えた高原にも生活をかけた摩擦があることを知る。彝族は豊かな家族が多く、トラクター所有者も多いが、苗族は貧しく、端境期の今（8月）が一番苦しい時期だという。

作物はトウモロコシ、ソバ、燕麦、ジャガイモ、ナタ豆、大豆が夏作で、外に桃、アンズ、リンゴを少し植えている。カンナ、美人蕉の芯もアク抜きをして食うという。秋に小麦、大麦を蒔く。オカボは試みたことがあるが、不作なので今はやめたそうだ。肥料は牛、豚の厩肥と化成肥料を混ぜて使う。収穫後の畑を10月に犁耕し、3月に施肥して再び犁耕後、トウモロコシは点播し、復路の反転土で覆土する。トウモロコシ列の間に大豆を混作する。4～5月に鋤で2回除草し、2回目は中耕培土も兼ねる。9、10月に収穫し、厩肥を施して11月に犁耕、小

麦、大麦を散播して鋤で大きい土くれを打ち、耙をかける。その後は放置して、春に収穫。トウモロコシの茎の上部は牛の飼料にし、下部は畜舎に敷き、厩肥に使う。麦藁は堆肥と屋根葺き用に使う。ソバは3月に播種する。種子とヤギの糞、肥料を混ぜて撒く。覆土はトウモロコシと同じ方法である。ソバの蒔きつけは5月まで可能で、収穫は8～11月に行う。

犁耕は黄牛2頭牽きで行う。犁は三角枠型弯轆犁だが、犁身がほぼ直角に曲がって四角枠の有床犁に近い形をしている。耙はソリ型で、二枚の板に鋭い鉄の刃が10本と11本取り付けられている。鉄歯は後ろに緩く湾曲している。家畜は黄牛とヤギが各戸5頭ずつ程度だ。荒山の植林が進められて、放牧地が減っていて、牧畜は低調になってきたという。

木綿の機織りを写真に撮って辞する時、韓さんの姿が見えない。奥さんと娘に丁重にお礼を述べてぶらぶらと帰りかけ、村の入口の供犠石（砂岩の自然石）を見ていると、横の畑から韓さんがジャガイモを20kg袋に入れて現れ、土産に持って行けとくれる。張さんは20kgのジャガイモを担いで、車まで2kmほどの苦行を強いられることになったが、こちらは苗族の人の善さを再度確認する機会であった。

帰途、谷筋の暁明村に立ち寄った。小振りだが四合院形式の二階建て家屋が密集している。苗族の開放的な散村形式と全く感じが違う。人々も玉竜雪山西斜面の彝族とも違う堅い姿勢が目立ち、話を聞こうとしても適当にあしらわれる感じである。逃げ遅れた感の爺さんをつかまえて少し聞いた話は次のようなことだった。苗族は昔から高原に居て、焼畑を行っていた。しかし土地は我々の土地で、苗族と賃貸関係があった。だから解放前の苗族は収穫物の一部を地主に貢納していた。解放後は、苗にも土地が割り当てられ貢納しなくなった。彝族の者は文句を言っている。

五家包社の苗族と暁明村の彝族の関係について、私は二通りの解釈をした。一つは清朝の役人による分割統治の影響を引きずっていると見ることだ。役人は、必ずしも恭順的でない彝族が公主の嫁入りを機に貴州から昆明のすぐ傍に多数流入することに不安を感じて、おとなしい苗族に移民を命じ、彝族地域に楔を打ち込もうとした。苗族の付随的移動に役人のお目付役的においを嗅ぎ取った彝族は反感を元々抱いている。もう一つは、苗集団自体が領域拡大をねらう独自の戦略をもっているという見方である。彝族公主の嫁入りと移民で生ずるであろう地元官庁との摩擦を見込んで、あわよくば官庁から漁夫の利をかすめ取ろうとしたことになる。

大きな歴史を見ると、彝族は南詔、大理と続く600年間、雲南の優越民族だった。だから、よそから入り込んでくる漢族や苗族に反感を持っていると考えてもそれほど見当外れではないだろう。また苗族は中華権力に強制された形を取りながら、戦略的にその力を利用して各地に領域を拡大してきた。だから結局、民族の葛藤と切磋琢磨を利用して大一統を保とうとした中華権力から見ると、二つの見方は一つの現象をそれぞれの民族の立場に分解したことに過ぎないとも言える。多分そういうことだろう。中華権力にとって、多民族の葛藤は大いに結構なこ

となのである。しかし、それらの民族が中華の手綱を離れて圏外へ出てしまう事態は避けねばならない。そこに羈縻政策の意味がある。

こう考えると、それぞれの民族が多様なニッチを棲みわけのあり方は中華権力が創り出した結果であるのかもしれない。しかし、その状態は人為的に作り出せるものではない。各民族がニッチ適応に見せる創造力があって初めて成立しうる。その創造力は何に由来するかというと、環境を主体化する生命力にある。空間があればそこを埋め、環境に迫られて自分の変革を辞さない生命体の意志にある。これは私の言葉では生態論理である。生態論理に則って増殖し、増殖するために自らを変革し、変革し切れない所に他の民族を発見することによって、人為を越えた創造力の意志を発見する。その発見が民族の棲みわけを安定化させている。彼と我は違う。これは多の発見である。しかし、彼は我によって規制されているし、我は彼によって規制されている。そこに彼と我を統合する創造者の意志がある。これは一の発見である。一即多、多即一、この認識が多民族の棲みわけを主体化している。この構造が羈縻政策、大一統という文明論理を生む母体である。棲みわけという生態論理はだから文明論理の母体を生き、生かしている状態なのだ。

4. 南亞熱帯滇西南高原区

(1) 元江

昆明から南西へ、西双版納州の景洪へ行く道は雲南省きっての幹線道路である。漢代は化外の地哀牢へ至る道である。化外の地は金齒銀齒をはめ、手足に入れ墨をした綉脚や首狩りを行う褐色の肌の朴人や望蛮が樓居している瘴癘の地、これが史書に現れる漢人の見方であった。しかし、そこはまた、茶やレイシ、象牙、玉といった貴重な物産を出す恵みの地でもある。茶は絹、青白磁と並んで世界が垂涎する中国の代表的物産である。茶の木は雲南西南部からビルマ、アッサムの亜熱帯地方に原産し、西双版納には茶樹王と言われる大木がある。今知られている例は3カ所ある。私自身が見た例は勐海・景洪間の哈尼族地域にある南糯山のものである。これは詳しい測定によると樹高9.8m、基部の直径1.58mで、樹齢800年と推定される栽培型の茶樹だ。他の2カ所は、巴達大黒山の野生茶樹といわれるもので、標高14m、直径1.12m、樹齢1700年とされるもの、もう一つが瀾滄県の邦崴大茶樹で、樹高11.8m、叢のサイズが8.2×9m、野生型から栽培型への過渡的な茶樹である [邵・沈 1993]。明代史書に基諾山は「毎年入山作茶者数十万人」と記される程の大産業となった。こういう爆発的ブームを呼ぶ物産が秘められている地域でもある。熱病が怖いけれども夢幻的な魅力も秘めた熱帯への通路、それが昆明—景洪道路である。

玉溪、化念までは昆明の漢族や漢化の進んだ彝族の土地利用景観だが、化念を過ぎ、楊武に

入ると、元江の支流が中生代の赤い堆積岩を深く切り込み、景観は断然熱帯的になる。その例は九江県青竜にある雲南最大のマンゴ園である。これは帰国華僑が1960年代に開設したマンゴ園で、5月には全国からマンゴ買い付けに人が集まる。街路樹はユーカリからクミリ（油桐）やグラベイラに変わる。海拔高度は800mである。この近くには彝族もいるが、その主作物はサトウキビとなる。村を囲む垣はサイザルの植え込みであり、屋敷地にはイピルイピル（銀ネム）、パパヤ、タマリンドが植えられている。やがて、前方に元江の河谷低地が開け、河岸段丘に下ると高度計が500mを指す。元江はまっすぐ東南へ流れてベトナムへ入ると紅河となる。元江河谷は暑い。熱帯である。

元江河谷では傣族（水傣）と哈尼族の棲みわけをのべておこう。元江招待所は池に岩を置き、橋、東屋など六朝風にしつらえた庭がある。招待所を出ると隣にクマの檻がある。月の輪熊である。ビルマとの国境地帯で捕獲した熊を元江で一年間肥育して、ベトナム国境近くの屏辺にある製薬所へ熊胆作りに売るのである。熱帯気候だと熊も早く肥育するのか、それともベトナムの熊胆需要が大きいのか。

花腰傣の梅元中氏に案内されて、元江右岸を東へ行く。河岸段丘には勿論水田も広がるが、バナナ園とサトウキビ園が広い。1982年、元江にサトウキビ工場が建設されて、サトウキビ栽培が爆発的に伸びたという。山麓にはインドネシア帰国華僑のマンゴ園が広大である。谷を挟んだ両側の斜面は見事に草ばかりの荒山である。元江河谷は乾燥熱風の通路になっている。10kmばかりで者嘎という村があり、その手前で南へ支谷を登る。者嘎は海拔500mにある水傣の村、山頂は1,800m前後の平坦面に哈尼族や彝族の村がある。哈尼族の村、坝木へ向う（図18参照）。

(i) 坝木

河谷沿いの斜面は相当高所まで赤土がむき出しである。支谷はしかしむき出しの赤土斜面はなく、藪が茂っている。そこは以前焼畑地だったが、元江に砂糖工場が建設されてからは、サトウキビ畑になった。斜面に狭い段を切り、20m毎に土止めの藪を残す形になった。ところどころ、バナナ畑もある。サトウキビは穂を1月から3月に植え、12月から3月まで収穫が続く。その後3年間はラトゥーンつまり萌芽栽培を続ける。伝統品種は赤黒い茎のものだったが、改良品種が1950年代に入り、今はどこの畑も置き換わっている。狭い谷底には河岸段丘から谷地田が這い上がる。高度800mで梅さんが言う。ここが水傣と哈尼・彝境界ですと。

1,400mで山頂平坦面にさしかかり、400～500mの小起伏山地になる。1,600mで展望が広がり、見渡す限り棚田地帯である。その中に密集集落がたくさん点在する。哈尼族の棚田は有名で、最古の記録は唐代の蛮書に現れ、「蛮治山田、殊為精好」とあると尹紹亭が言う。この記録の著者は今のベトナムから大理まで旅行した人で、哈尼族の棚田地域を実見していると考えてよいそうである。他の地域では晋代の『華陽国史』に四川各地の山田、用水路の記述があ

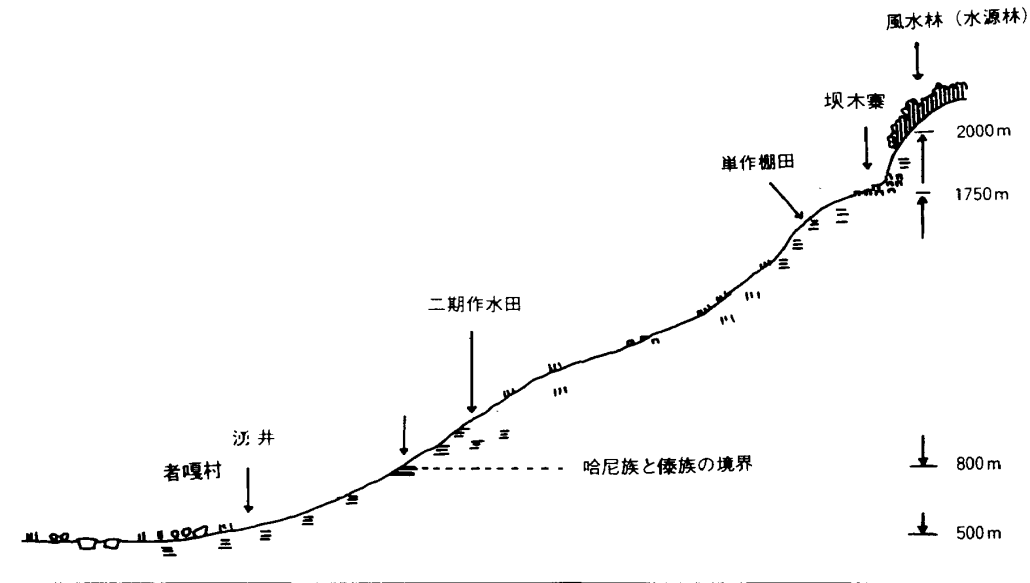


図 18 元江県の哈尼族・傣族すみ分け（羅二虎画）

り、これも棚田である。明代の文献にも哀牢山の棚田記載があり、「通以勾略，数里不絶」，つまり水樋が何 km も続いていると。さらに，新石器時代に迄遡る可能性が考古発掘で現れた。大理の蒼山山麓に棚田と陂（溜池）跡，陂を作る木材が発見され，呉金鼎という学者が「蒼洱考古調査発掘調査報告」で新石器時代の棚田を示唆しているという。どれもまだ原文にあたっていないが，尹紹亭や羅二虎といった中国の優れた学者との旅行は生き字引と歩いているようなものだ。

坝木村は羊街郷坝木寨といい，11社（部落）ある。その長老の李立黒さんと元村長の竜沙坡さんの二人が水煙草を吸いながら，こちらの質問に答えてくれる。まず子供の頃はどんな景色でしたかということから話を始める。その答をまとめると，約60年前にも村はたくさんあった。しかし，もっと小さく，この坝木も70戸くらいで，棚田は100亩くらいにすぎなかった。今は戸数203戸，棚田は200垧に増えている。増えた分は村も棚田も斜面を上に登っている。棚田の米以外に重要な作物は何だったか聞くと，文句なしに阿片である。雲のかかる高地にケシ畑を開いた。阿片は洋烟といい，1両=80gを単位に売買し，80gの阿片で200老斤の粳が買えた。これは160kgに相当する。つまり重量で比較すると2,000倍の価値があったことになる。しかし阿片は解放後なくなってしまった。別の商品は茶で，これは昔からあり，今も傾斜段畑に相当広い。茶摘みを3月から7月まで4，5回行い，摘んだ葉はすぐ鍋で炒り，揉んで干す。阿片も茶も元江から商人が買いに来た。

棚田の作り方を聞く。二人の老人はいかにも馬鹿なことを聞くという表情になるが，仕方がない。斜面を削って土を下へ落とし，そこは地山に土を盛って段を作る。その下はまた斜面を

削って土を下へ落として段を盛る。その繰り返しだよと言う。水はどうするのですかと食い下がると、棚田の上の斜面に小さい溝を斜め上に掘っておけば水が集まってきて棚田に水が入って来るといふ。谷川から水を引くものだという固定観念を私はもっていたので、斜面の溝は谷川につながっているのかしつこく聞くが、どうもそうではない。元村長が、そういえば長い水路もある、老林の谷川から坝木を通して7kmの水路が牛街まで続いているという。しかしそれは解放以後に作られた新しい水路である。遠方から水を運んで来る古い水路はないのかと、重ねて聞くと、梅さんがどう通訳したのか判らないが、竹樋や木樋は今も使っている、それは当たり前だという口調である。長い竹樋や木樋、数kmも続くような樋はないのかと尋ねるとそんなものは必要がない。こちらも諦めて、棚田を増やす時はどうするのかと質問を変える。上の斜面を削って棚田を作るとの答えである。そこでまた水はどうすると同じ質問に戻る。水利権とか、谷川からの分水だとか、唐代からの古い棚田という尹紹亭の事前レクチャが利きすぎて、精妙な水路網が斜面に張り巡らされているに違いないという固定観念がこちらにある。尹さんが見かねて割って入り、「山有多高，水有多長」と私のノートに書き付けてくれた。高い山がたくさんあると、水はいくらでも斜面を流れて集まってきますね、これは日本語である。これは実際そうなのである。ずっと以前イフガオの棚田に登ったり下りたりした時に気がついた事だが、一番上の棚田は林との間に浅い溝があり、その溝を辿っていくと決して谷川などに行くのではなく、林の斜面へ緩く登って行くことがよくある。この小溝は斜面を流れ下る流去水をキャッチして棚田へ導く役目を果たしているのである。そのことを思い出して苦笑した。山まで歩いてから質問をするべきなのである。横着をしてカンニングをするとこういうことになる。

外に出て、棚田を歩いてみた。ここの棚田は垂直の土壁で石垣壁はない。岩は片麻岩系で風化殻が厚く、雨水が深く沁みこむので、地滑りが抑えられるようである。地滑り抑えの努力もしている。それは稲収穫後に畦塗りをし、犁耕をして水もちをよくし、土を乾かさないようにすることである。これはイフガオの棚田も同じで、土が乾くと亀裂が発生し、そこに水が入ると地滑りが発生し易くなる。ついでに聞いてみた。流水客土による棚田造成はあるかと。イフガオのバナウェ地区のゴハンで棚田の造成の水力工法を見たことがある。水田に溜めた大量の水で土や石を100m、200m離れた棚田へ勢いよく送泥して棚田を作る方法だ。ここにはないという返事だったが、うまく質問が通じたかどうか。こういう質問は尋ねる方と答える方が共通の問題意識を持たないと通じにくい。答える方は何か大がかりなことという予断をもってしまい、普段当たり前に行っていることを切り捨ててしまうからである。哈尼の棚田に水力工法なしとは結論付けしないがよいだろう。棚田の中にとろどろ丸い魚池がある。田植え前に鰻の稚魚を入れる。水田湛水が深くなると、魚は田の中で餌をとって、成長する。稲収穫時に池に集まった成魚を捕る。

村の裏山に竜樹があるというので見に行った。村の家は日干しレンガ壁と丸太の柱、梁の上に切妻屋根を載せた二階建てで、家の周りは石畳を敷き、やはり石畳敷きの狭い道を挟んで家々が密集している（図19）。竜樹というので鬱蒼たる森林を想像したのだが、その予想も見込み外れで、シイ、サカキ、クロガネモチ、アラカシの類の照葉樹種が10本ばかり立っているだけであった。農曆12月に祭竜という儀礼を長老がここで執り行う。子豚を供犠し、豊作と村の安寧祈願を行うのである。シイの枝に豚の歯骨が数個かけてある。竜樹の手前には立石が並べてある。もう一カ所あるというので、今度は村の東の棚田の中にコブ状に残った風化殻の高みへ行く。そこも板栗が30本ほど立つだけで、水源林ではない。私の予期していた林はここから西の方に見える比高500m程の山々にむしろ見いだした。照葉樹の暗緑色の林をもつ大きな山を指すと、風水林だという。あの林を切ると下の棚田に水がなくなるので、切っては行けないと全員で決めている。雨が降る時はあの峰にまず雲がかかり、そして次第にこちらに雨域が広がって来るのだという。多分、この説明は哀牢山南東斜面での雨の降り方をきわめて簡単明瞭に、的確に言い当てているのだろう。

農耕法は大変オーソドックスなもので、水苗代、大苗移植、鎌刈、田舟（打谷船という）での叩きつけ脱穀、脚碓（唐臼）精米ということになる。ひとつ面白いと思ったのは稲収穫時に行う叫谷魂という儀礼である。よく稔った2、3本の稲を根から抜き取り、村の倉に置く。水田で脱穀した粃を倉へ運ぶ時、帰る、帰るとか、帰ろう、帰ろうという。この誦文は米の精霊に向かって言われるのである。この儀礼は稲魂が機嫌良く、また倉までの道を迷わないように無事帰ることを祈念して行うのが他の地域では共通で、道々に目印を置いたり、帰ってきた稲魂が逃げないように倉に入れた粃や稲穂の上に重石を置いたり、また聖米籠なども使われるのだが、ここの哈尼村では目印も魔除けも聖米籠も姿を消してしまったのか、随分簡単な形であ

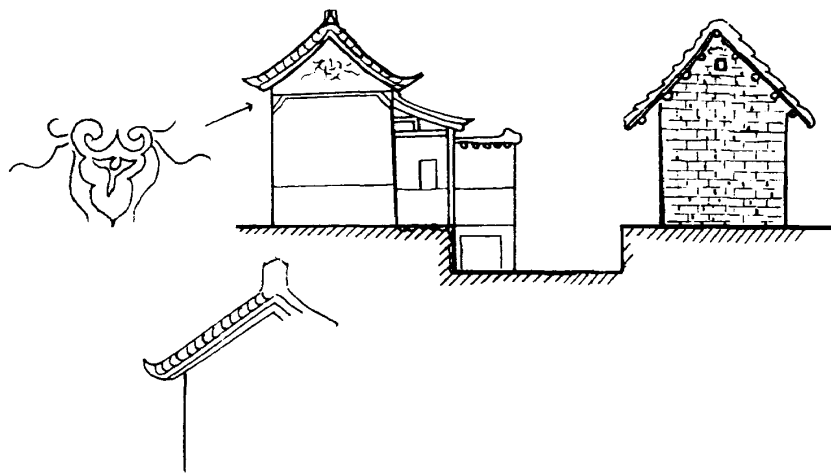


図19 元江県坝木寨哈尼族の日干しレンガ積み住居（羅二虎画）

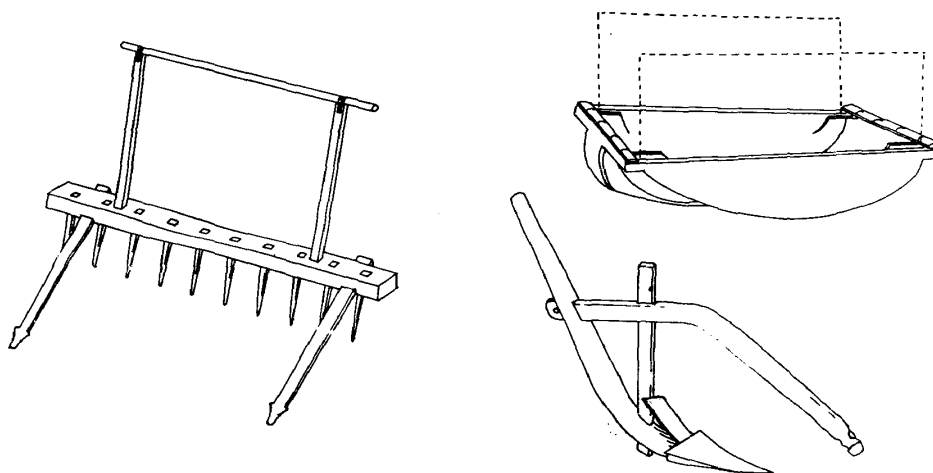


図20 坝木寨哈尼族の犁，耙，脱穀槽（羅二虎画）

る。しかしともかく叫谷魂という儀礼がある。ついでに農具に触れると、犁は典型的松葉型である（図20）。全体に小振りなのは棚田で使いやすくなるためだ。耙は長脚型である。この組み合わせは、雲南西南部の哈尼、傣、拉祜、布朗、佤族の基本型であり、松葉型犁はタイ、ビルマ、ベトナムにも分布が広がっている [応地 1995]。

元江河谷へ下る途中、何台も粃を積んだトラックに会った。元江河谷南側の斜面に開かれた棚田の収穫物を山頂部の村へ運ぶのだ。今はトラックだが、数年前までは女性が40kg程の粃を担いで登ったと梅さんが言う。薪を背負って登る女性達もたくさん行き会う。哈尼の女性達は働き者だ。

哈尼族の文献初出は唐書に窩泥、倭泥とあると尹紹亭が言う。梅さんが付け加える。父子連盟で彝族の系統に属し、その遷徙史は二説ある。金沙江から哀牢山へ来た、もう一つは大理周辺の拠点から南へ展開したという説だと。

(ii) 者嘎

坝木から支谷を河岸段丘へ下った所に大水平郷者嘎村がある。これは水傣の村である。傣族も分布や生活様式から多くのグループに分けられる。水傣は傣沼の俗称で、普通は見事な重層入母屋の高床家屋に住むが、者嘎の水傣は彝族に多い平頂平土間家屋である。元江周辺には他に花腰傣（傣雅の俗称）が居り、彼らは自らを騎馬民族の系統と考えて、他の傣族グループより優越意識を持っている。元江では花腰傣も平頂平土間家屋に住んでいる。

支谷の谷地田が河岸段丘の坝田（平坦地の水田）に移行した地点から200mの距離に湧水があり、清冽な水を湛えた井戸がある。3m四方の磚積み上屋で囲い、飲料水に使う。ひっきりなしに村人が天秤棒に水桶を吊して水汲みに来る。角井壁面上部に切ったノッチから水は流れ出て、その水路は水田や家屋脇を走り、灌漑と洗濯用水を供給する。井戸脇にはニレとアコウ

の老木があり、青天商大・乾隆31年と刻まれた石碑が立てられている。井戸地区全体は50m長の壁で三方が囲まれ、家畜を入れない。区画内は村人共有のタマリンド園である。井戸近くの水田は苗代田が集中し、丁度雨季作の苗とりで村人が右往左往だ。水傣の農民は青い作業着だが、中に色シャツとズボンの若い女性達がたくさん苗運びと田植えに働いている。尋ねると、哈尼の娘達で、出稼ぎに来ている。山頂部の哈尼の棚田は年一作で今農閑期なのである。代掻き中の水田もある。ソリ型の耙に人が立ち、水牛2頭に牽かせている。泥の上をスーッと人が滑っていく。苗代田には水イモがたくさん生えている。自生のもはエグくて食えない。豚の餌にする。食用に植えた水イモもある。村の方へ歩くと畑にピンロウ樹がたくさんある。他にマンゴ、ジャックフルーツ、バナナ、畑のタロイモなどが、植えられている。

平頂平土間家屋の密集した村に入る（図21）。平土間といっても傾斜地に立っていて、違い棚のような形で3階建てになっている（図22）。梅さんの顔見知りの元村長さん白玉書さんに会う。庭にはタマリンドとニワウルシの古木が立ち、タマリンドは酸っぱいスープに使う。50年前の人口は360人、今は131戸600人強で、増加分は内部人口の増加による。全員水傣である。生業は水田とサトウキビ、タマリンド、マンゴ、池の養殖魚、斜面での牧畜が昔から今まで変わらない。しかし、サトウキビは1985年に国営精糖工場が建設され、さらに華僑経営の工場も作られて、面積が随分増えた。焼畑少々と放牧地に使っていた斜面をサトウキビ畑に転換したのである。従って牧畜は今は大変低調である。水田は白さんが子供の頃から二期作水田である。天水田は全くなく、すべて水路灌漑か溜池、先程の井戸水で灌漑する。水路灌漑は支谷の谷水を3km上で分水し、斜面を斜めに横切って導水する。その分水堰と水路も昔からある。溜池は元江の水を引き入れるもので、元はもっと小さいものだったが、1958年に労改農場が作られた時に労改人を使って大きな溜池に増拡された。今はアフリカ鰻（ティラピア）を養殖する。元江の水も谷水も変動が大きい。特に元江の水は3、4月に涸れるので、井戸水灌漑が最も頼りになる。それは年中豊富にある。



図 21 元江県者嘎村。背景は坝木寨の山地

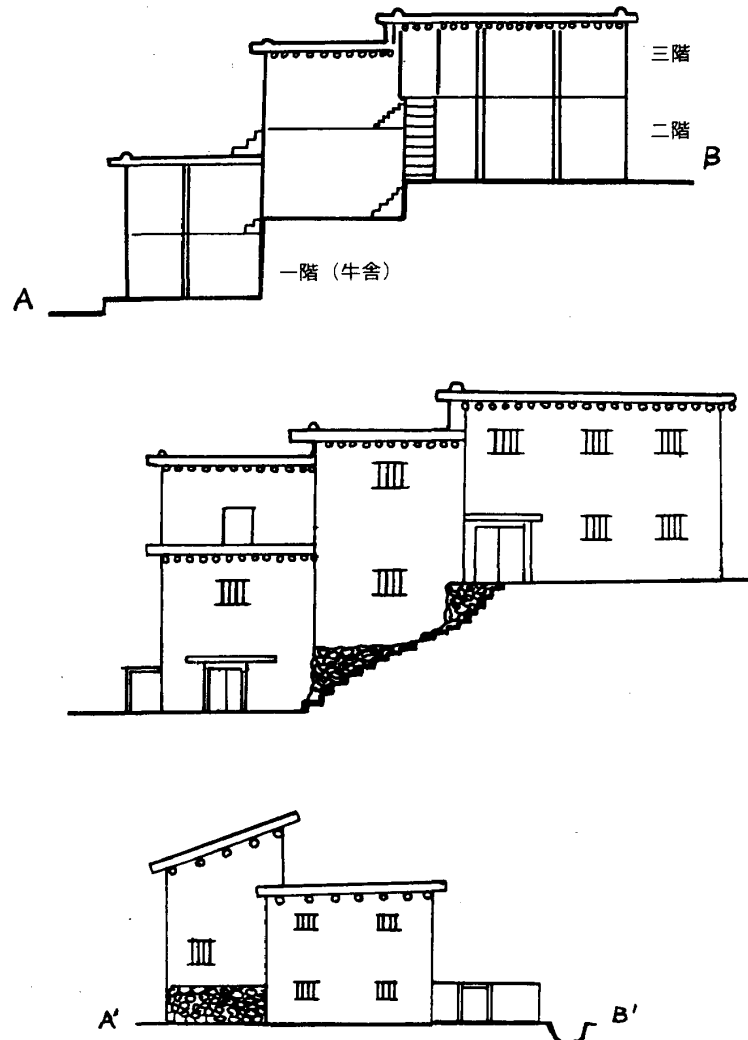


図22 元江県者嘎村水倭族の日干しレンガ積み平頂家屋
(羅二虎画)

井戸水はナム・ボーという。これはタイ語と同じである。祭竜儀礼も行う。竜樹が村の内外数カ所にあった。それは風水林、水源涵養林でもあった。そこで豚を供犠して豊作予祝儀礼を行った。竜樹や井戸にはピーが居る。これもタイ語と同じだ。井戸のピーはジンとも言う。鶏のようなトサカがあると信じられている。竜樹は労改人達が畑を開く時に切ってしまっ、今はなくなったが、井戸の水は出る。山頂部哈尼村の風水林がある限り大丈夫だろうと、あなた任せである。

水田は二期作で陽暦2月に一作目の田植えを行う。地拵えは犁耕2回、耙がけ2回である。7月に鎌刈りで収穫する。一作目は旱魃害があり、植え付け面積が少ない。すぐ犁耕1回、耙がけ3回を行って二作目の田植えを行う。第二作目が主モンスーン作で重要である。第一作は雑交稲を植えるので、収量は高い。亩当たり粃で1,000kgは取れる。第二作は伝統種で収量は



図 23 水傣族の耙がけ風景（元江県者嘎村）

その半分である。雑交稲収量はヘクタール当たりで換算すると粳で15トン、精米で9トン強くらいになる計算だから、大変な高収である。第二作は11月に収穫をする。犁は松葉型であるが、耙はソリ型である（図23参照）。

主食は勿論米であるが、モチ米飯はない。モチ米は春節や端午節、火把節等の祭に蒸して唐臼で搗き、粿粿（餅）を作るだけだ。火把節を行うのは彝族の影響であるが、青年が娘を探す為ではなくて、家や水田から鬼を追い払う観念に変わっている。

平頂家屋は彝族の影響かどうかははっきりしないが、目的は明瞭である。元江河谷は11月から3月まで寒風が猛烈に強い。人も飛ぶ程である。この強い寒風には入母屋型の家は弱い。寒風が入らず、強い平頂家屋を造る為である。そのかわり、夏は暑い。屢々屋上で寝るといふ。

元江河谷の河岸段丘には、他に花腰傣、彝族の村がたくさんあるが、平頂家屋、谷口湧水依存の灌漑水田、二期作、サトウキビ栽培の盛行など、よく似た状況である。冬の寒風、夏にトンキン湾から吹き込むモンスーン、山頂部の多雨、河谷の乾燥という生態環境条件が強くて、様々な民族の生活様式を均斉化している。しかし、それにも拘わらず、それぞれの民族集団への帰属意識は強いものがある。

翌日、元江老街を見る。招待所のすぐ東側に続く狭い通りがそれである。北側に昔の河港があるので、細い露地を折れて港へ緩く下る道に行く。狭い通りは大理石を敷いた石畳道で、両側にかつての商人の家が並ぶ。一軒の家に入ってみる。元は立派だったろうと思われる家で、石段を上がると彫刻を施した門がある。大理石を敷いた中庭を囲んで3房1庭式の構え、コの字に並んだ棟は低い磚積み壁の上に透かし彫りの欄間が乗り、入口の木柱の礎石も凝った形だ。木造壁はすべて透かし彫りで、手の込んだ造りである。梅さんが言う。この家は李和才という富裕な馬帮の家だと。李は馬500頭をもち、昆明と思茅、石屏の間で運送交易業を営んでいた。隊商防衛の為に保鏢を250人雇い、軽機銃を装備させていた。李の出身は元江南西の咪哩で、哈尼族だと。今は李の姪が住んでいる。河港へ出る。川の崖は護岸コンクリートで固め

られ、階段があって水面まで下れる。対岸まで150mの川面には全く舟の姿を見ず、往日の賑わいはない。

(2) 景洪—勐混

メコン川の南岸に景洪の町がある。西双版纳州の都、明代の車里国の都である。高度は540m、昆明、大理に比べると1,500m低く、景観はすっかり熱帯圏である。傣族の娘達が腰高の長い鮮やかなサロンを翻し、日傘をさして歩く。傣族は白族と共に都市住みの民族である。タイやビルマ側から見る研究者はタイ族を自営小農民と見る視点に凝り固まっているが、雲南側から見ると、その見方はどこか偏狭さがあり、根本的に間違っていると思える。

考えてみると、その見方はバンコックという町を出発点にしている。町を一步出ると広大なデルタで、そこは今は農業空間になっている。さらに内陸へ入ると、乾燥モンスーンの乾いた景観の中にタークやウッタラディットの畑地帯があり、さらにランパンやチェンマイの盆地に水田が広がっている。チェンマイはタイ文化の最も純粋な形を保持しているのですとタイの友人達も言う。どういうイメージができあがるかというと、バンコックという沿岸の都市、デルタの大規模水田地帯、中部の畑作地帯、北の果の盆地に保存された小農文化、こういうことになる。「港の町」対「内陸の村」、**「資本と情報の集積」**対**「自営小農民の後背地」**、「先進」対「後進」、「大フロー」対「小ストック」などとなる。

かつて東南アジア研究センターで出版された『タイ国——ひとつの稲作社会』という本がある。今、その本をパラパラと見ると、勿論大変真摯な学問的総合を目指す著者達のまじめさは充分伝わるのだが、どことなく愛情に似たおかしみも感ずる。脇目もふらず、突っ走る馬車馬への賞賛、流れ落ちる汗で目が見えず、打つ畝を一筋間違えてしまった農夫に感ずる尊敬とおかしみの混じった気持、そうした感じを抑えきれないのである。この見方では例えばチェンマイという町と無数の交易拠点を結ぶネットワークが抜け落ちてしまう。アユタヤという町の出現やバンコックという都市の出現、その性格を全く見誤ることになる。稲作農民社会ではアユタヤもバンコックも出現しないだろうし、その見方ではタイを含むもう少し大きな地域の存在が浮かんでこない。チェンマイ、スコタイ、アユタヤ、バンコックという部分を生み出す総合体の存在が見落とされてしまう。この気持は私自身にも向けられているのだが、地域研究は全体と部分を見る必要がある。全体と部分を二つの別ものとみるのではなく、部分は即全体、全体は即部分ということだろう。『タイ国——ひとつの稲作社会』は部分と全体の相即性を打ちちらかして、部分を全体として見ている。そこに愛着に似たおかしみを感じるのである。

それでも『タイ国』には馬車馬のダイナミックな迫力がある。未開展の種子の無限の可能性に似た迫力がある。イモの蔓が伸びているならどこまでも芋蔓を掘り起こそうという清々しさがある。その点で今の我々は遅れをとっているかもしれない。恐縮だが文化人類学的発想に

なっているのではなかろうか。ある地域を所与のものとして、それを静的に描写すればいいという感じである。博物館に展示した標本，例えば青磁の茶碗を詳細に説明すればそれでよいということになっていないだろうか。茶碗の命はしかし説明で生まれるのではない。陶工の創造力が命を吹き込むのである。更にそれを使う人が適切な場，適切な方法で使う時に，吹き込まれた命が展開するのだ。作る，使う，ふたつの行為が合致して，茶碗の新たな意匠が展開し，茶碗の命が光るのだろう。

景洪の話に戻る。農貿市場を見に行くと，様々な野菜や食品が並んでいる。中国風のものやタイ風のものも混在している。タイ風のもは例えば，パクチ，ドクダミの根，ソムオー（ザボン），ナレズシ，センミー，センヤイ，モチ米を蒸したコワ飯，それも白，赤，ウコン染めなど色々ある。吸いコップ治療もある。しかし，たくさんの食品が渾然一体と並んでいるのを見ると，中国風，タイ風とスッパリ切ることは間違っているとも思う。もっと巨大な食文化の流れがあって，それはインドや西アジア，モンゴルや韓国，日本，マレー諸島，そうした生態系の様々な産物が混交し合った世界であり，ひとつの地域はその中から適当に素材と利用法を選択している。それを我々が勝手に中国風，タイ風と自分の経験でくくっているだけであると思える。

景洪盆地で今生じている大きな景観変化はゴム園の拡大である。図24に盆地周辺の土地利用断面図を示した。1,000mまでの低い丘陵部は茶園が姿を消して，今はゴム園である。ゴム園は1950年代からメコン沿いの丘陵に広がり始めた。そこは川霧でとりわけ高温多湿気候だからである。その時は四川・湖南省の住民が労働者として入った。その動きは更に北へ伸びて，普文，大渡崗に国営ゴム農園が作られた。ゴムの下に茶を栽植する立体的栽植形式もある。'80

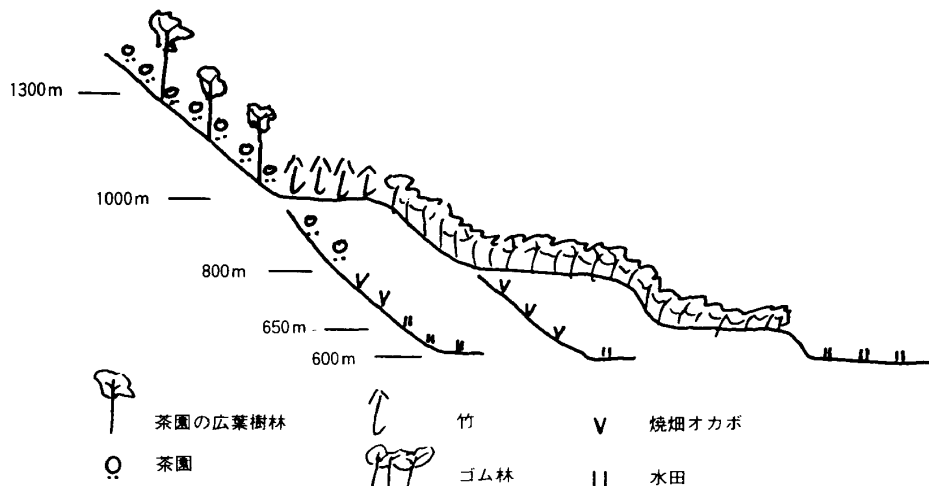


図 24 景洪盆地の地形断面・土地利用模式図

年代にこの動きは農民達にも広がって景洪盆地はゴム園の丘陵で囲まれてしまった。勐混、勐遮など他の盆地では、ゴムの代わりにサトウキビが席卷している。茶は勐海盆地の丘陵部に残るが、全体に1,000m以上の高地で開拓が進んでいる。茶園の景観は産茶林というべきものだ。木は *Cyclobalanopsis* や *Castanopsis*, 樟など、常緑照葉樹が多いが、紅毛樹は落葉樹的である。東北タイで林の下に稲が立っている景観を産米林と呼んだのは高谷・友杉だが、この林木畑の伝統は雲南にも広い。産茶林がそのひとつで、他にラックをとる林にトウモロコシを植えた産ラック畑もある。こうした伝統をふまえて、景洪東の勐崙鎮葫芦島にある西双版纳熱帯植物園は立体的空間利用の見本園を作っている。雲南ニクズク（香樟）の下に砂仁（カルダモン）とか、茶、ゴムの下にカルダモン、鉄刀木の下に茶といった二階建て栽培、それに、鉄刀木—ミカン—砂仁、あるいはゴム—ランブータン—*Cyrtosperma*, といった三階建て栽培もある。鉄刀木は *Cassia siamea* というマメ科の木で傣族独特の薪炭材をとる木である。成長が速く、苗を植えると多数の枝が5-6mに伸びる。それを2mくらいの長さで切ると脇から萌芽がいっぱい成長し、毎年切って萌芽更新を計ると薪炭材に事欠かない。20本程植えると一軒の用に足りるという便利な木である。傣族は鉄刀木のお陰で山林の保全ができると多くの傣族から聞かされた。

(i) 曼邁寨

景洪から流沙川沿いに数km西へ行って南へ折れ、川を越えて1km程で東側の丘陵に村が点々とある。瓦葺きの重層入母屋造りの立派な高床住居である。その一つ景洪県嘎棟郷曼邁寨を訪ねる。ここも水傣である。ベタツとした低い台地性丘陵の端っこに家が南北に並ぶ。レンガ塀の内側に広々と敷地をとり、マンゴ、タマリンド、バンレイシ（タイのノイナ—）、ザボンなどが植えられている。傣族の中には家が完全に竹製の場合があり、村全体が竹に囲まれていることも多いが、この村は木造家屋になっていて、竹は疎らだ。

西端に寺があり、まず寺を見る。小坊主が44人いるそうだが、この時は10人ばかりがバイクにタイ字のお経を書いて勉強中であった。寺は傣族が傣文化を習う学校でもある。小坊主は12歳から20歳までの少年、青年達で、最低1年間は勉強する。しかし、中国で生活する限りは漢語統一試験に合格しないとちゃんとした就職の機会に恵まれない。寺でタイ語やタイ文化の勉強をしても精がないということで、もう一つ元気がない。寺の内庭には *Corypha* ヤシとソテツの大木が植わっている。*Corypha* ヤシは葉を経書に使うので、タイ寺院には付きものである。しかし景洪の元の召片領などはコウゾで作った経紙を使い、経紙を専門に作る村が勐混に今もある。昔は召片領に納めていた紙作りが、今の小さな地場産業のもとになっている。この紙作りはコウゾを布朗族が採集して売りに来るというように、少数民族の現金収入にもなる。

寺の北側、丘陵の5m程の斜面は神林で、その中のアコウの大木の下に祈祷のお供えが残っ

ている。竹の編席にバナナの葉を敷き、モチ米のオコワ、粳、布片が置かれ、近くには生きた鶏がつながれている。タイの神林と全く同じ情景だ。傣族の村は神林が多い。元江の水傣のように労改農場開設で切られてしまった例もあるが、普通は割合広い神林がある。景洪や傣混盆地で傣族の村の立地を見て、他の少数民族の村と比較して、その理由が判った。傣族の村は台地の端や、支谷の出口の土石流地形、崩積地にある。そうすると谷川の水で湧水が豊富であるし、谷水が流れていていつもきれいな生活用水が得られる。そして水田を下の低地に作る。谷斜面の木を切って裸にすると、土石流が活性化し、家屋や水田に被害が出る。だから、神林は村背後の支谷斜面と谷頭辺りに設定され、その木は切ってはいけないのである。勐混の郷党委員会副書記の玉扁章さんという40代の女性がこう言った。傣族の三大財源は、水稻、サトウキビ、茶である。茶畑は紅毛樹、香樟、青崗櫟などを残し、材利用と茶葉生産二重の働きを行う。鉄刀木を家近くに植えて薪炭材を確保する。神林を保全して水田を守り、灌漑水がいつも確保できるようにする。土地利用を科学的に考えるのである。他方、山棲みの布朗族などは科学的に考えず、退嬰的である。こう言って威張る。彼女の誇りは誇りとして結構だが、盆地棲みをはじめて盆地水田依存が強まった為に、斜面の植生被覆と出水の関係に敏感になったということで、偶然の産物といえなくもない。布朗や佤族は山棲みで、谷の出水をおそれる必要がなかったから、林の伐採をさして気にせず、神林などない場合が多い。竜樹なども先に哈尼村で見たようにシャーマンの祀り用に数本あれば足りる。生態的にはそれで構わないのである。偶然の違いに由来しているのだから傣族とって威張ることはない。尤も科学といっても大体こうした偶然の結果が創造力を刺激して進むのだから、科学者も威張ることはないのである。

寺から北を見ると、支谷から扇状地性の水田が伸びて、水路も走っている。その向こうの丘はマンゴとライチ園で、谷にはビンロウヤシが一杯立っている。

家の中へ入る。高床下は昔は家畜を飼っていたが、今はトラクターが置いてある。家は太い木柱を南北9本、東西6本、台所用に1本、計7本の角材を使っている。西側の林から切り出した紅毛樹だが、今は全部ゴム園にしてしまっていて、新築はこれから大変だという。ゴム林は83年に植え、90年にタッピングを始めた。林全体でゴム林4,000亩だけで、残りは国営農場の所有であり、国営農場と土地問題がいろいろあったようだが、尹紹亭はそんなことに興味がないらしく、翻訳せずすっ飛ばす。国営農場のゴム林は四川、湖南省から移民の漢族が働いている。汁液は4月から10月に産出が多い。

村の人口は解放時100戸程度、今200戸で980人いる。村の水田は2,000亩というから、1戸平均10亩（6反）強で、これは中国の水準では大農である。灌漑水は以前は谷川の出水で充分だったのだが、1958年に流沙河に分水堰が建設され、水路で分水を導く。後で見ると、この分水堰には召片領の頃からの量水官が使った量水計と同じものを設置している。エジプトのアスワンにある古王国の量水計と同じく、段々が刻まれている。ビックリである。その水路が北側の

水田の中を東へ走る。水路の管理は2 km 分がこの村の責任で、毎年二回水路の掃除をする。稲は二期作で、一期作は5月に雑交稲の苗代を作り、6月に田植えする。その時、例の神林に酒、米を供え、鶏を供犠して、祭壇のまわりにその血を撒く。11月に収穫し、12月に耕起し、1月に二作目の田植えをする。これも雑交稲である。4、5月に収穫である。収穫は精米でヘクター当たり4.5から5トンである。雑交稲では少ない方である。モチ米はと聞くと、雑交稲にはモチ米はないので今はウルチ米が主食だが、今でも一日に一回はモチオコワを食べるそうである。

犁は今は使わなくなった。トラクターである。形を聞くと、松葉型、耙は長脚型である。正条植えの植え条を一遍に12本引く道具がある。15cm 間隔で2列を配し、横の2列とは20cmの間隔がある。それでも相当な密植である。脱穀用の叩きつけ段はタイで見ると同じである。

水田におりると、支谷の湧水の湧く井戸が2本あり、水桶を担いで水汲みの人が来る。しかし、今は谷水をパイプで引いており、その井戸を使う人は少なくなったという。上屋で覆っていたそうだが、今は姿がない。

(ii) 勳混一打洛

勳混盆地は景洪から勳海盆地を過ぎて左へ折れ、ビルマ国境の打洛へ向かう道筋にある広い盆地だ。海拔高度1,150m である。勳混も車里国時代のムアンのひとつで、ビルマルートの関門だろう。郷党委員会副書記の玉さんによると、盆地周囲の山地斜面や山麓に愛尼（哈尼の分支）、拉枯、布朗族などもある。これらの少数民族は1950年までは山頂部に居を構え、下りてこなかった。その理由は、何より低地の瘴気が怖いからである。山には広い林地があり、狩猟のできる荒山もある、それに低地は傣族が占拠していて、商売に馴れない山地民には住み難い世界である。先に述べたが、「山高、皇帝遠」と言った哈尼族の男とは盆地東側の老寨で会った。老寨に住む山地民の気持ちをうまく言い当てていると思う。しかし、また多くの山地民が谷地田の続きに山麓の水田をもち、出作りには来ていたようである。今はこうした山地民が山麓部に村を作り、居を移しつつある。老寨から新寨への移動の原因は、1950年代に政府が山地民に下山を呼びかけたことである。そのため傣族に土地分譲を呼びかけ、盆地に水田用地を準備した経過があったようである。そしてやや強引に合作社作りを進めた。山地民に聞くと老寨を火事で失ったからという返事も多い。また低地に水田出作りに来ていたので、というものも移動の原因としてよく聞く。ダム作りで谷地田がつぶれ、住宅と傣族の水田を補償でもらったという例もあった。ともかく、段々と低地の水田に依存する山地民が増えてきた。といってもまだ山上老寨と山麓新寨に半々くらいのものである。そして今生じてきた問題は、低地水田をめぐる土地争いが傣族、漢族と山地民の間で生じている。

勳混の町の少し南の東西断面を図25に示した。比高200mの低山に布朗族の老寨があり、濃

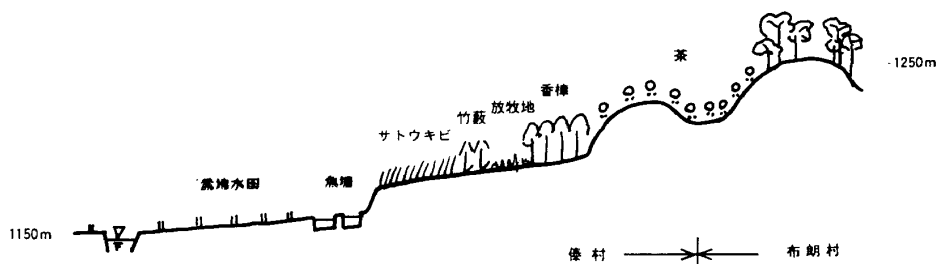


図 25 勐混盆地西縁の地形断面・土地利用模式図

い照葉樹がこんもりと茂っている。その下の茶畑は布朗族の茶畑である。その下は傣族の茶畑となり、低い台地に香樟がパラパラ立つ放牧地がある。崩積地は竹藪にして地滑りを防ぐ。台地の端はサトウキビが増えている。台地の裾には湧水が多く、傣族はそこに養殖池をたくさん作る。カンクンを植えている所も相当ある。タイでよく見る伏せ籠の魚捕りもやっている。平坦な盆地底は水田になり、雑交稲や改良種の稲がピンと立っている。しかし、傣族の水田はすぐ判別ができる。畦の交点などにターレオがたくさん立っているのだ。打僚と書く。タイやラオスで見るターレオと同じく、割竹板を八角に編んだ形が多いが、人形を作って高い竹竿の上に置いたものもある。水路沿いに水牛が繋牧されている。稲の刈り取りが終わると稲株水田に移される。タイでも30年程前はよく見かけたが、今はなくなっている光景だ。

盆地水田を東へ突っ切ると、山麓に哈尼や拉祜の新寨がある。1970年頃に移動したのだが、半分以上老寨に残っている。盆地東端の斜面は図26に断面図を示した。上部は哈尼族の領域で、老寨がある。短期休閒の常畑的焼畑にオカボとサトウキビが広い(図27)。その下の広葉灌木林は元々哈尼族、傣の緩衝地域で、薪材とりと狩猟場を兼ね、今も両者共利用している。山麓は今哈尼族の新寨とそのサトウキビ畑がある。拉祜族も似たような状況である。

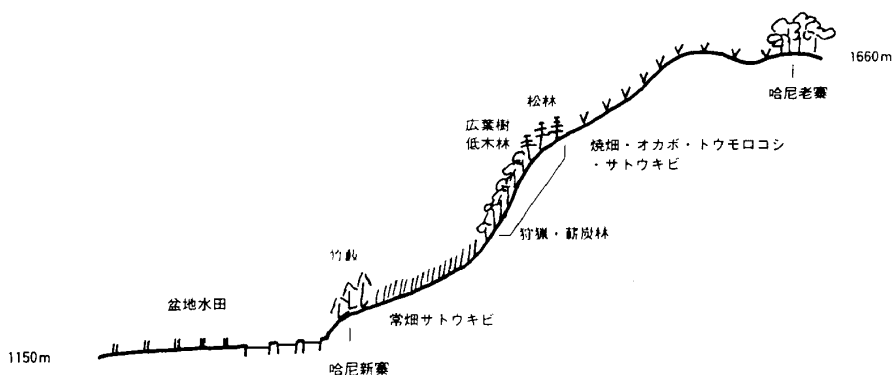


図 26 勐混盆地東縁の地形断面・土地利用模式図



図 27 哈尼族のオカボ焼畑
(勐混盆地東縁山地)

雲南の焼畑はブッシュファローで、作付期間が長い上に鋤耕起する。図26の少し北にある曼邁の拉祜族の例を述べておこう。休閑期間は長くて7～8年である。家族数を勘案してその藪を各戸に割り振る。7、8月に藪を各戸伐採し、10月から12月に火入れ、1月に鋤で土を耕す。小さな木の根は掘りあげる。2月に鋤で碎土をし、木の根などを集めてもう一度焼く。3月には地拵えを終え、4月に手鋤で穴を掘りながら点播をする。5月に除草を始め、6、7月と都合3回行う。9月下旬に鎌で収穫をする。稲束は1mばかり積み上げ、クリケットクラブのような打谷棒で打って脱穀をする。籠にいれて落とす傍から大団扇で扇いで風選する。

オカボは3年植え付け、その後トウモロコシを3～5年作付ける。谷部分だと計10年も連作する。長期作付短期休閑で、しかも鋤耕する焼畑は、マレー世界には見ないが、北タイの山地民アカヤラフも竹藪休閑の焼畑を鋤耕する。北タイの鋤耕は塩基性岩の赤土なので、耐侵食性が強く、鋤耕しても大丈夫だからと思っていたが、雲南の伝統を引きずっていると考えた方がよさそうである。しかし、それではなぜ雲南で焼畑を鋤耕するのかという疑問が浮かぶ。これは二つの原因が重なっているだろう。第一、彼らは常畑農耕民なのだ。犁耕を行う所すらある。第二、草の生長量が熱帯雨林より少ないのである。ということは林の成長も遅い。だからマレー圏のように1年で草が茫々と茂ることもない代わりに、林が育っても草を抑える効果がマレー圏程劇的でない。結果として長期作付短期休閑ということになっている。尹紹亭はこの意見に反対するかもしれない。人口圧で休閑期間は短くなっているのだと。彼の本を見ると最も長い休閑期間は10～20年あり、作付期間が3～5年である [尹 1993:33]。上記拉祜では7～8年休閑、6～8年作付であるから、作付期間は長く、休閑期間は短くなっている。しかし、やはり雲南の焼畑の生態型があって当然で、それはマレー圏のものと違うのも当然と思う。ともかく、休閑地の多くは草藪、大きくても10mくらいの灌木林である。マレー圏と比べると常畑的に見えるのも無理はない。

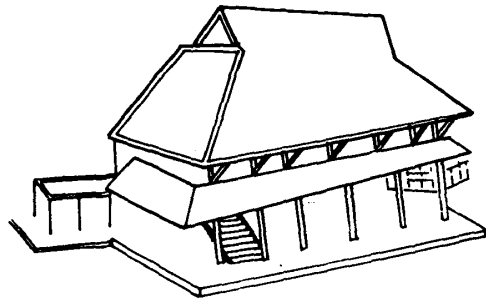
勐混から打洛へ向う。途中、谷底低地が広がる邦洛に黎明農場がある。周りとは異質な労働者住宅、病院や学校のビルが並ぶ。丘はゴム園を開いた農場である。打洛は海拔600m、ビルマ国境の村である。尤も、中緬国境を越える民間交易の隆盛で、ホテルが何軒もあり、商店が

建ち始めているので、数年の内に大きな町になるだろう。商店は1995年時点では露店や露店に毛の生えた程度のものであった。雑貨や食品屋台もあるが、主要な品物は玉、宝石で、緬甸華人玉器利行といった看板が掛かっている。ほかにはビルマからの密輸煙草である。別の中緬交易町瑞麗は先行していて、1990年に訪れた時、既に相当の町になっていた。瑞麗には中国人、ビルマ人だけでなく、パキスタンの出稼ぎ人がランゲーンから汽車でラシオへ、更にバスで瑞麗へたくさん来ていた。外国煙草、ビルマのシュルート、電気製品、Bataのサンダル、それに多分阿片も扱っている。1、2年ラシオ―瑞麗交易で稼ぐとパキスタンの妻子の許へ帰る。これを繰り返すと言っていた。

打洛とビルマ側の町曼井柏の間に国境の検問所があるが、観光バスや商用車がひっきりなしに往来している。ほとんどフリーパスである。水田を国境がまたいでいるので農民は国境を自由往来である。1990年には瑞麗の弄島で国境を見た。イラワジ河の支流が国境だが、川を越えて電線が走っている。渡し舟でひっきりなしに人々が往来し、水牛を引いて中国側の水田耕作に来る人も、その逆もいる。日本人には国境は厳しい遮断線だというイメージが強いが、大陸では全く状況が違う。

打洛の町を囲むなだらかな山には布朗族が居り、彼らは山伝いに国境と関係なく動く。山から山裾の崩積低地へ下りて新寨を作っている布朗族の村へ行く。打洛のすぐ北側である。崩積地を貫流する小川沿いに入母屋造りの立派な木造家屋が並ぶ（図28）。村外れには校倉造りの倉が点々とあり、ゆるい斜面に水田が広がっている。村の書記の岩三瓢氏に会って話を聞いた。老寨は数km上の山頂にある。1958年から個々に新寨へ下ってきて今100戸になったが、老寨にまだ48戸残っている。老寨は焼畑が主で、土地は充分あり、低地へ下りるとビジネスにどうしても巻き込まれるので、低地へ下ることに熱意はなかったが、政府が水田用地を準備して移動農家に分配するので、それにつられて下ってきた形だという。

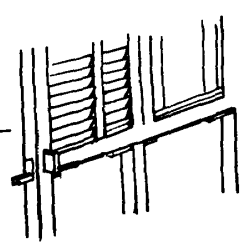
老寨の焼畑農業は92年までは土地共有で、作業も共同だったが、92年に各戸に分配してしまった。焼畑準備は先述の曼邁拉枯族と同様だが、播種方法が違う。竹の長い播種棒を使う（図29）。4mばかりの竹竿の先に小さい鉄ヘラが付き竿を斜めに構えて飛ぶように歩きながらパッパッと土を跳ね飛ばすようにして穴をあける。そこへ女がポッポッと糞を投げ入れる。跳ね飛ばした土で下段列の播き穴を覆土する。この点播方法はマレー圏でよく見る短い掘り棒を使い、ストーンと穴をあける方法と随分違う。実は私はこれと全く同じ方法を北タイのケーノイで赤ラフが行うのを見たことがある。また高谷好一はロンボックのササック族の村で見たという。今回の調査で、雲南の佤族、基諾族、哈尼族にもあることが判った。長い竹竿の端に鈴をつけている場合もある。鈴つきの長い点播棒を使う場面を想像するのは楽しい。眺望の好い山地のあちこちでリンリンと鈴音を響かせて、互いにその音を聞きながら一体感を強め合う、そういう効果があるだろう。どこまでも続く山並みに住む山地民はこういう方法で自然に



母屋



穀倉



水牛小屋
床上に餌を貯蔵

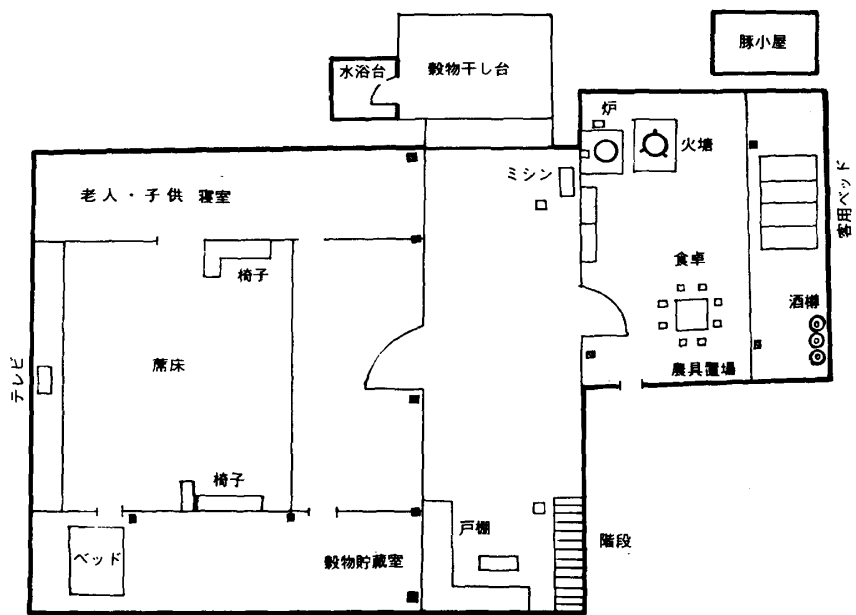


図 28 布朗族の住居（勐海県打洛鎮曼夕新寨）（羅二虎画）

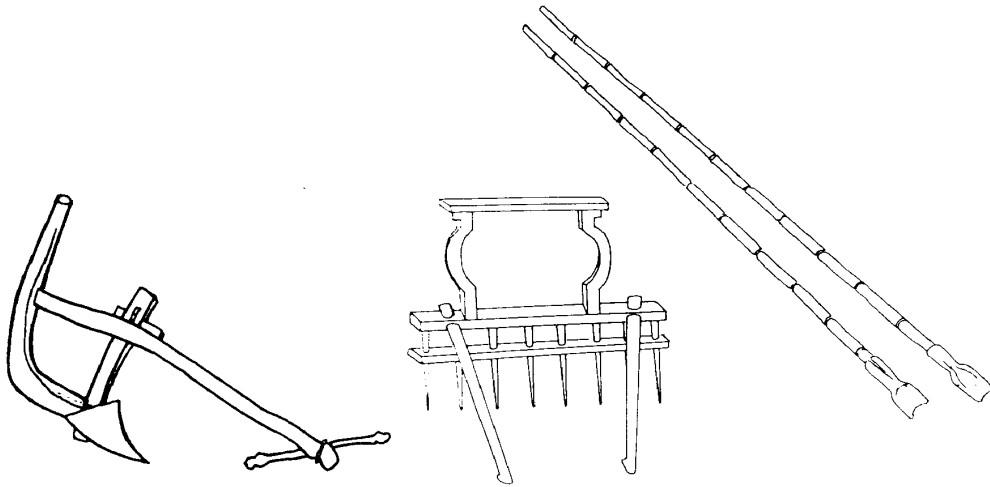


図 29 布朗族の農具。長い点播棒が特徴的。
(勐海県打洛鎮曼夕新寨) (羅二虎画)

とけ込んで、しかし人間の存在を確認している。インドネシアの山地民が高い梢につける大きな風車も似た意味があるだろう。勢いよくまわる風車はビューン、ビューンと大きな音を発し、見えないけど人が居ますとサインを出している。ともかく、短い掘り棒と長い点播棒は民族の系譜の違いと関係しているだろう。

話を戻す。オカボの間にハトムギを播く。ここでは間作だがよく見るのはオカボの周りを取り巻くハトムギである。ハトムギはオカユにすると旨い。ビルマの人間も買いに来るのだという。外にマンゴ、ザボン、ミカンの木、タロ、ワタなどを植える。トウモロコシは相当広い。

農耕儀礼では播種時、焼畑中心の土盛りに簡単な祭壇を置き、鶏を供犠し、無事の生育を土の神に祈るとするのが面白い。土地の神、精霊、先祖、それらの力を土の神と表現している。勐混盆地の哈尼族も予祝儀礼で、自分の畑の土を山神樹の下に持ち寄り、農作と無病息災を祈るといふことで、山地民には土が特別な意味を持っている。これは生態的に考えると、畑作における土の重要性を反映しているということだ。水田では土は極端に言うとは何でもよく、水が重要である。だから祭竜とか風水林といった考えでは水が祈念の対象である。さて、収穫前にやはりその土盛りに植えた稲をまず刈り、その後、畑全体の稲を刈る。そこは一種の斉圃だろう。斉圃の稲はそのまま祭壇に置き、全体の収穫・脱穀が終わると粃と一緒に村へ持ち帰り、粃を納めた倉にかける。この時も鶏を供犠する。バリではこの稲を人形に造り、稲魂デヴィスリと呼ぶが、この布朗族の書記は稲魂は知らない、という。叫谷魂もしないというが、稲作儀礼そのものは稲魂を想定した形だ。迷信打破運動を政府が屢々展開しているので、素直に言うのを懸念しているかもしれない。それに仏教の影響もあるかもしれない。この布朗村は傣族同様カオパンサー（入安居）、オーパンサー（出安居）が重要な祭りになっていて、老寨のお寺

に傣溜の坊さんがいる。坊さんにもよるが、在地の信仰を否定的に考える人も相当多い。

焼畑は1年、長くて3年で放棄する。4年目には虫や病気が増える。休閑は8年だという。休閑地は直径30cm位の林になるそうだ。勐混の焼畑が1,400m位の高地で、常畑的な感じだったのとまた植生環境が違うようだ。

水田や粒酒、烤酒の話聞き、犁を見て、辞す。水田の犁は3角枠型だが余程4角枠型に近く、ながえも直轆犁に近い。耙は長脚型である(図29)。

勐混へ帰る途中、黎明農場の手前の細い谷底低地で、水田脇の水路を挟んで10人ばかりが竹を並べている。見ると傣族の男達がファーイを作っているのである(図30)。山麓の曼納罕村の男達が谷水を流す幅5~6mの細い川に竹組みを据え、鉄刀木の枝を置いて土、砂利を盛った堰だ。川底の高さは水田とほとんど変わらないし、水量も少ないから、堰は見る見る出来上り、堰脇の分水路に水が入っていく。こんな堰でも60亩程の灌漑は可能である。この村にこの種の堰が63個あるそうで、最小の堰は2、3亩の水がかりである。大きな出水があると一発で堰は壊れるが、しかし作り直しも簡単である。山は比高が200m程、降水は多数の谷に適当に分散され、谷底の水田も狭いから、少人数でも灌漑施設が作れる。

そんな小さな環境に旨くとりつくと、労働生産性の高い農業が可能である。この条件が少数民族の分散状況を可能にしている。これに比べると、大きなダムを造り、長大な水路造りに金をかけ、トラクターで耕作する大規模農業は、一見能率が良さそうだが、エネルギー効率で比較すると、実に莫大な無駄の体系だ。資源とエネルギーを大量に使う大工場というのは、もっと壮大な無駄の集密回路だ。無駄は0となって飛散せず、炭酸ガスや亜酸化窒素となって大気汚染を引き起こす。人間中心に世界は展開させようと思っていたら、自然の反撃を受けることになってきた。自然の反撃だけではない。エネルギーと富を一手に集めた勢力が国家だ、戦争だと他者を縛り、縛っている間にこんがらがって自分をも縛っている。社会組織が自縄自縛に陥っている。少数民族はそこを見抜いているのだろうか。小さい社会で動き、小さい畑や水田



図30 傣族の小井堰作り(勐海県曼納罕村)

に依存し、最小の権力で平和に生きている。貧しげに見えるが、私有物量で計るからそう見えるだけで、大きな空、きれいな空気、旨い水、木や作物との濃密な接触、こうした共有生態環境の質と量で計ると、われわれより遥かに圧倒的に、豊かだろう。人間が生き延びるつもりなら、近代社会は少数民族社会の共存、自然との共存のやり方を見習った方がいい。社会は小さく小さく、田畑も小さく小さく、公共投資も少なく少なく。スモールイズビューティフルと誰かが言っていた。先進国の人間は言うだけで駄目である。雲南の少数民族は実践している。

(3) 西盟

(i) 瀾滄—西盟道

瀾滄から双江への道は盆地が少なく、山国である。高い尾根面は2,000m位であるが、開析が進んで平坦高原面は狭く、長大な斜面が広い。その尾根をビルマとの国境が走る。斜面は国境を跨いで動く哈尼、拉祜、佧など山地民の世界である。ビルマの人も中国側に焼畑の手伝いに来ている。盆地水田が少ないので、元の焼畑斜面は今、棚田造成ブームである。斜面下部を切り盛りして、4、5段の棚田を作り、一番上の棚田に水溝で水をもってきて、あとは段々と掛け流しである。更に棚田を拡張する時は第一群の上にまた4、5段の棚田を作り、水をもってくる。元江の坝木村で聞いた通りの方法である。もっとすごい水田造りもある。湾田というのだが、谷底にある既存の谷地田や棚田の崖下に細い谷川がある。その谷川に水田を作るのである。屈曲部は砂利や泥が沈積し易い。そこに先にみたファーイと同じ竹柵を張り出して、沈積作用を促進する。潰れるとまた竹柵を補強する忍耐強い努力を1年間行くと翌年には屈曲部に相当土砂が沈積して水面より少し高い洲が生じる。その洲の端に石を並べると水田区画は出来上がる。川傍だから水をとるのは簡単である。屈曲部の少し上流から崖下に水路を通せばいい。流路を狭められた谷川は流速が速くなり、湾田に毎年土砂を堆積する。湾田は少しずつ高くなり、他方、谷川は川床をどんどん削る。数年経つと湾田は水面から1m程高くなる。驚いたことに、今の川面より3m程上にある谷底水田はほとんど湾田から出発したものだ、作業の哈尼族の男の言である。立派なものだ。

棚田の上の焼畑斜面は見事な草地荒山である^{*}。図31の写真で上に見えるオカボ畑の下の区画はユーパトリウムやノボタンの草地だが、そこは3年植え付け後、8、9年の休閑地である。その更に下に見える少し草の低い区画は2年休閑区である。耕作法を聞くと草山になるのも無理はない。犁をかけ、さらに起こされた根を鋤で打って抜根する。急斜面は鋤耕だけだがやはり根を掘り上げる。木の根など残らないから、休閑しても林など再生しないわけだ。

瀾滄から南岭峠へかかる途中のオカボ畑を見ていると株が筋状に並んでいる。草とりの男に聞こうとすると、男の持っている鮮やかな彩りの小鞆を見て、老緬だと羅鈺氏（雲南民族博物館の尹氏の同僚）が言う。ビルマ側の佧族である。愛尼族の田植えを手伝いに来ていて、焼畑

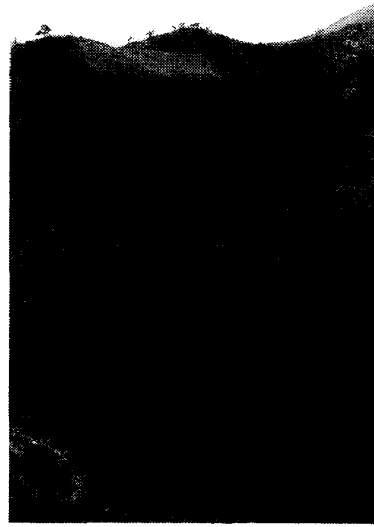


図 31 抜根し、耕起をする焼畑地は休閑後も草地のままである（瀾滄県酒井付近）。

でオカボを栽培しているのである。水牛一頭牽きで犁をかけ、粃をばら播いてもう一度犁をかける。それで株が条播風に立つのである。老緬はオカボ畑に簡単な祭壇を作っている。竹筒の中に線香を入れ、外にも線香、木株を立てかけている。デーヤというオカボの神さんに祈るのだという。

募乃で西へ折れると石灰岩地に草原が広がる。1,400mの谷底から2,200mの高原迄急な上りである。このあたりは拉祜族の領域で、ポツポツと行き交う人々はいかにも精悍そうな面構えである。女性の中には栗毛で、アーリア系の容貌が目立つ。拉祜はアーリアンかと思うほどの顔もある。突兀たる石灰岩峰に囲まれたシンクホールがいっぱいある。緩いシンクホールの斜面は黒土で、良い畑土だ。犁耕中の畑も多い。しかし7月末に耕してどうする気だろう。ほとんどは拉祜族であると羅鉦は言う。牛は黒いゼブ牛だ。高度1,900mで止まって聞いてみた。実に意外なことに、これは休閑耕なのである。昨年オカボを植えた畑を今犁耕して休閑し、来年またオカボを植える。今年休閑耕をしておかないと来年は収穫がないのだという。休閑耕は西アジアの乾燥地帯の特長だ。地表のクラストを破って僅かな降雨を土中に蓄える為のものだ。カルストの草原ではあるけれども、本当にそんなに乾燥するのか。男は、冬の乾燥が厳しく日照も長いという。しかし、しっかりと納得はいかない。これは気にかかり西盟からの戻りに、募乃の谷でも犁耕中の男がいたので聞いてみた。強い亜麻色の髪をした若者だ。やはり石灰岩の丘だが、高度は1,500mと低い。昨年（1994年）の夏作はトウモロコシ、秋冬作は小麦、今年休閑して七月末に休閑耕中である。来年は夏作にオカボ、収穫後放置して、再来年の夏再び休閑耕を行うということであった。

石灰岩由来のグルムゾルという土が相当広く、乾燥はある程度強いかもしれない。しかし、谷底の多湿条件でも休閑耕を行うという慣行は、生態環境と整合性がない。むしろ考えやすい

のは文化伝播である。畑は休閒耕を行うものだというどこか外の世界の慣行が入ってきてそのまま残っている可能性の方が高い。これは私の勘だが、慕乃周辺の拉祜族はイラン系の、休閒耕を行う民族が間違いなく入っている。つまり、行き交う顔を見てアーリアン系が多いなど漠然と持っていた印象が、休閒耕という特殊な耕法の出現で、俄然現実味を帯び始めたということだ。セブ牛が多いのも気になる。どの経路で来たのかは全く判らないが、時期は相当最近の事だろうと、これも直感的にだが、確信できる。しかし、こうなると、雲南の少数民族の系譜は相当多彩であることを覚悟せねばならない。

同様の気懸かりは勐墨人にも感じている。勐墨人というのは怒江沿いの急峻な山岳地帯に僂僂族や怒族と共に居る民族なのだが、まずルームという民族名称だ。他の民族名称と違って、勐墨という字はいかにも音に漢字を当てたという感じが強い。話を早くすると、勐墨はルームつまりペルシャ、トルコでビザンチン帝国を指す言葉だろう。ルームと呼ばれる地域はユーゴスラヴィア周辺のトラキア、マケドニア地域を指す言葉としては古くからある。古代ギリシャ、ヘラス全体を指す言葉としても使われる。それだけなら全く関係ない地域を音の類似性だけで結びつけていると非難されても仕方がないが、別の根拠がある。それは犁である。白族、納西族、蔵族地区と並んで、この勐墨人地区は直轄犁で二牛抬扞の伝統が随分強い地域である。それも、手綱とる人、柄を持つ人に加えて、一人はくびきの上に後ろを向いて座り、ながえを脚で押さえるという形で二牛三人耕を行うのである。蔵や白族のように平地ならばまだしも、怒江沿岸の、人も転げ落ちそうな急斜面でこれなのである。そしてそこでも随分垂麻色の髪の毛が目立つのである。勐墨はビザンチンのトルコかギリシャ人と直接結びつく名称だと、私は確信している。そういえば、元軍がビルマを攻めた時の軍隊は回教徒のトルコ兵が主力だった。しかし残念ながら元史にはトルコ兵を勐墨と書いていない。勐墨人について調べたいが、簡単に判りそうな資料が手元にない。教えてほしいものだ。

話を戻す。2,200mの高原面に来ると岩峰の谷に濃く霧が垂れ込め、ハンノキの幹にコケが厚く付着している。700m登ると相当温度が下がる。この辺りが拉祜と佧族の境界だと羅錕が言う。佧族は首狩りで有名で拉祜族との摩擦が耐えなかったのである。石灰岩山地の擁壁内に佧族を閉じこめた恰好だ。平坦高原が再び開析地形になって長大な斜面で行う山地農業地帯になる。相当多湿な景観でもある。休閒地が相当密な林になる。図32はその景観の例である。水平に走る一線は道で、その下に棚田が、上に焼畑のオカボ植え付け地と荒草から灌木まで二次植生の幅がある。

寂しい山道にたばこ屋が一軒ある。大理の弥渡の男で出稼ぎに来ている。西盟へ来て既に9年になる。何で稼ぐのかと聞くと、小屋の脇の砂利を指す。試みにひとかけら拾うと随分重い、表面がピンクの透明な結晶が見える。鉛と銀の鉱石で、佧族などが付近の山から掘り出して売りに来る。鉱石商売をしながら、焼畑のトウモロコシ栽培を山地民に請け負わせている。



図 32 焼畑の棚田化が進む佤族の山地農業地帯
(西盟県佤山県城東)

50亩ばかりの土地があるという。何やら明代の塩商の屯田の伝統につながっている。

この長い斜面を一旦谷底まで下る。海拔750mまで下った。途中、焼畑にシコクビエが株立ちしている。竜牙稗あるいは小紅米と羅鈺が書く。酒造りに使うのだそうだ。林は高木はないが、密な二次林が増える。ここから再び長大な斜面を登って1,950m尾根に西盟佤山県城の町がある。

佤山で県の文化局のアイピン（岩品）氏に会う。これは佤名で、漢名は馮金光というそうだ。西盟県の人口は8万人、内72%が佤族、拉祜が25%である。佤山県城は1955年に林を切り開いて建造が始められた新しい町である。高原の町は涼しく、ほとんど漢人であるという。町のすぐ下に続く棚田は漢人が作ったもので、佤族はもう少し下に住んでいるという。話を聞きながら通りを見ているとロバの馬帮が7、8人登ってくる。馮さんはビルマの佤族であるという。ビルマ側のアイチェン（岩城）という町から国境の町を越える馬帮ルートを来る。人民元を持ってきて、中国語も判るのだそうだ。解放前、瀾滄から漢族の馬帮がこの地域へ塩や綿布をもって阿片と交換しに来た。

拉祜との関係を聞く。清代、瀾滄にいた土司は拉祜族の統括者で、その地位を三仏祖と呼んだ。三仏祖は土司として佤族をも支配した。拉祜には小乗仏教が入っていて、仏教とアニミズムをうまく調和させた説を唱え、それで以て佤族の心をうまくつかむことに成功し、佤族の頭人達は三仏祖の支配を受け入れたばかりでなく、毎年、米と金を貢納することになった。第三代目の三仏祖はまだ存命で、省の人民代表会議の副主任だという。

馮さんの案内で昨日来た道を1,100mまで下り、西盟県倮倮郷王雅村を訪れた。佤族は少し色黒で、顔立ちもインドネシア人に似ている。雲南の少数民族の中で最もマレー的雰囲気強いグループだ。水牛供犠や、その頭骨を納屋の壁や家の屋根に飾る、稲魂信仰や叫谷魂儀礼が根強いことなど、インドネシアの山地民と強い類似性を見せている。文献によると、アッサムのナガなどとも随分近い関係にあるようだ。ところが言語系統はインドネシアと違い、モンク

メール語系つまりオーストロアジアンだと言われる。私にはオーストロネシアン、オーストロアジアンという呼び名の言語が一体どれくらい違っているのか全く判らないが、インドネシアの山地民と似ている人々がオーストロアジアンに分類されてしまうのはどうにも合点が行かない所だ。

さて、郷の名前は僂僂郷だが、佧，拉祜も混在し、この村170戸814人はすべて佧族であると、村書記のチャンチェンパラ（張岩巴拉）氏の説明である。村は民族毎に分かれ、言葉も別々だが、相手の言葉はそれぞれ判るし、仕事も同じだという。多言語世界のような。尤もどの程度の違いなのかそれが判らない。元々同根の言語から今分化発展しつつあるのか、全く違う系統のものなのか。

昨日登ってきた山地を見はるかす所に書記の家がある。郷委員会の殺風景な事務所での話は書記も気が進まなかったのだろう。自分の家へ案内してくれたのだ。こちらが尋ねる前に村の統計数字をよどみなく教えてくれる。水田7,623畝、畑2,600畝、荒山400畝、休閑地1,400畝、茶畑の登録面積504畝、実面積1,500畝、水牛218頭、黄牛360頭、時々部下の上げた帳面に目をやりながらすらすらと暗誦できる。茶は1990年に植えた。サトウキビは今年（1995年）に入り始めた。ゴムはまだ入っていないという。プランテーション農業にまだあまり巻き込まれていない。水田は棚田で、これも1973～78年の農業は大寨に学べ運動の時に開田したものだ。開田ブームは一段落したが、現在も徐々に増加している。水田技術は水田を開く前から知っていた。傣，哈尼，拉祜等の開田や耕作手伝いの賃仕事をしていたからだ。

統計表の畑が焼畑とすると、休閑地と合わせて4,000畝で一人当たり5畝である。尹紹亭の『雲南刀耕火種志』を見ると、1950年代は30畝とか10畝といった値が普通で、それに比べると、大幅に減っているが、水田やサトウキビ園に転換されているわけだ。同書から焼畑の必要面積の部分を抜いてみると次のようになる。「一人当たり一年間の食料生産には通常3畝の土地が要る。13年を一周期とする輪作を行うとする（1年作付12年休閑ということ）と、一人当たり39畝の土地が要る。3年作付，15年一周期の輪作を行う場合は、一人当たり15畝の土地が要る。5年作付，15年一周期の輪作を行う場合は一人当たり9畝の土地が要る」[尹 1993：33]。書記の話によると、この村の場合、3年作付，3ないし5年休閑である。表現をそろえたと3年作付，6年ないし8年周期の輪作を行うということになり、一人当たり3畝×2ないし3，つまり6から9畝の土地が要ることになる。ここの値は一人当たり5畝で、少しばかり必要面積を下回るが、水田が一人当たり0.8畝あり、必要食料はまかなえるのだろう。ただし、焼畑そのものの休閑期間は相当短縮している。

焼畑の話聞く。伐開は陽暦9月から12月に行く。今は自分の畑をそれぞれに伐開するケースが多い。木は直径10ないし20cmの灌木である。10日から20日後に斜面の上から火入れをする。幅3mくらいの防火帯を作っておく。2，3日後に水牛で犁耕する。急斜面は鋤で耕やす。草

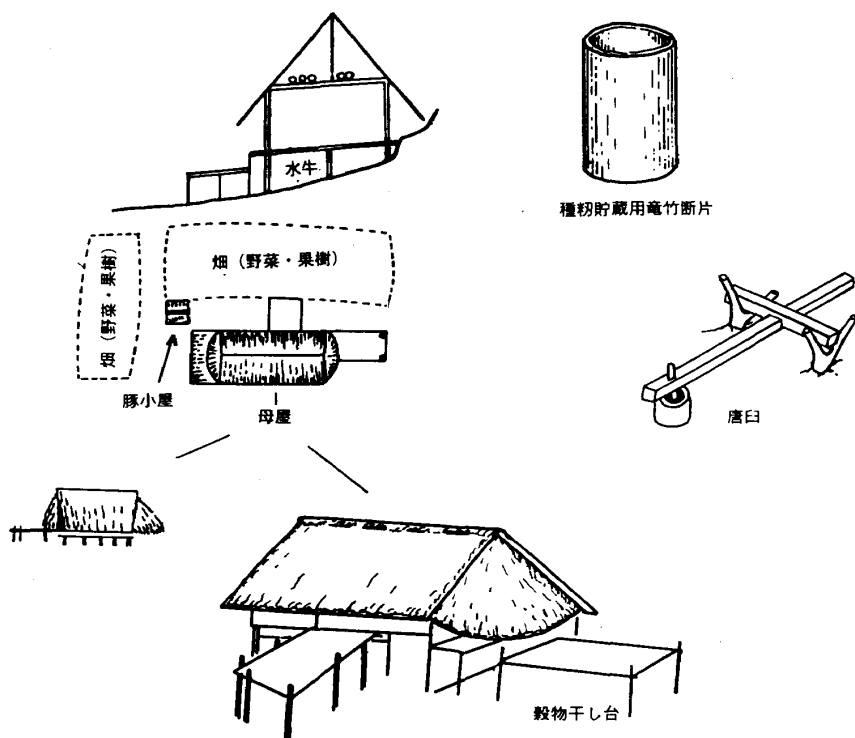


図33 佉族の家屋（西盟県倮倮郷王雅村）

や木の根を打ち、集めてもう一度焼く。斜面上部は2月から3月に、下部は5月に籾をバラ撒き、もう一度犁耕か鋤耕で覆土する。播種時、畑に小さな祭壇を作り供物を供える。供物は木の葉に米、飯、鶏の羽根、血、骨、内臓、肉を盛ったものだ。播種後、何回か除草をするが、雨の状況によって草の伸び方が違い、多い年は3回、少ない年は1回です。収穫は9月末から10月に鎌刈りで行う。畑に竹の筵をあげ、稲を置いて打谷棒カウで打つ（これは例のクリケットクラブに似た曲木）。古くは石に叩きつけた。脱穀が終わると、鶏を籠に入れて畑へもっていき、鶏を供犠し、小さな籠に取り分けた籾に血をかける。籾は籠で家へ運ぶ。その時、*puj'aa, yantenyā, yantenyā* と誦文を言う。*puj'aa* は稲の神であり、*yantenyā* は帰ろうの意である。米倉（米籠が増えている）に籾を納め、1カ月間、倉は開かない。開く時には鶏を供犠する。

米以外にも焼畑に様々な作物を植える。シコクビエ、アワ、トウモロコシ、高粱、ハトムギ（これはオカボを取り囲むように播く）、サトウキビ、バナナ、カンナ、様々なマメなどである。

一段落したところで書記の家や農具を見せてもらう。家は佉族特有の方形隅丸型平間家屋である（図33）。藁屋根の下の長押に、太い竜竹が4本置いてある。何か尋ねると種籾貯蔵用の竹筒である。直径30cm、長さ5mはある。家の裏に精米用の唐臼が設けてある。犁は松葉型

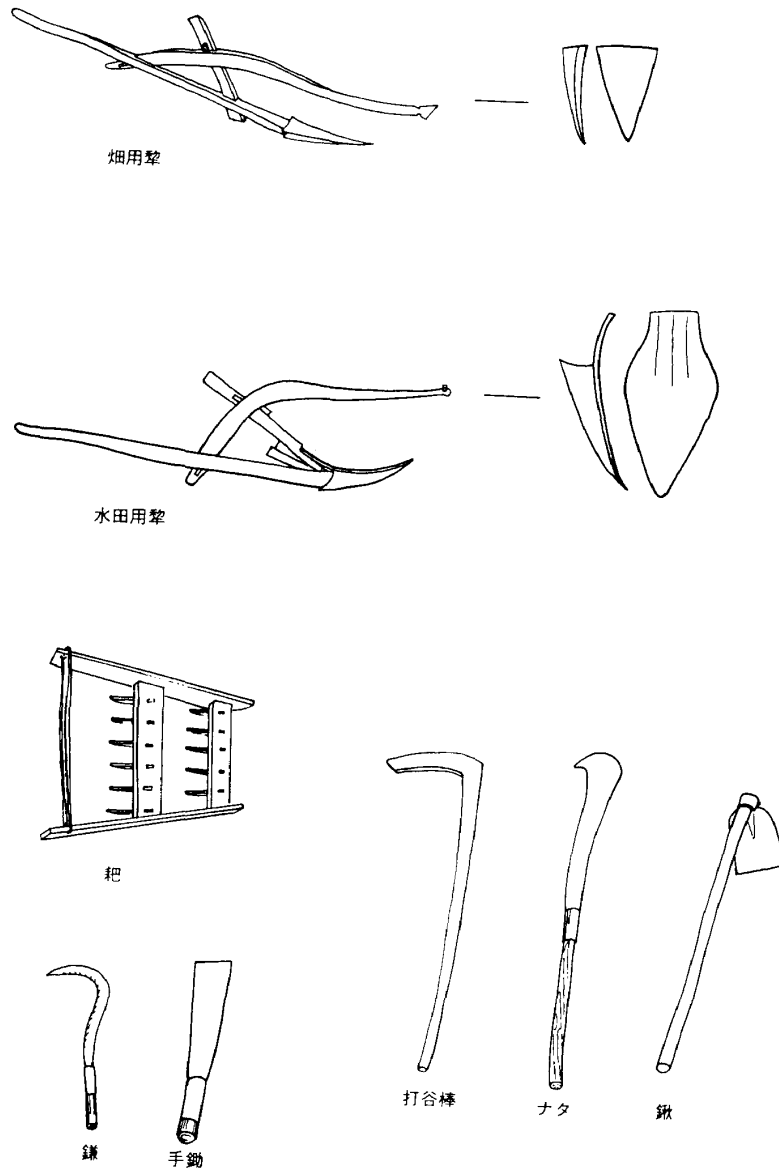


図34 佤族の農具（西盟県傑傑郷王雅村）

で、犁先は長いアードである。畑用は軽く、水田用は少し重い。耙はソリ型である（図34）。

村の入口まで書記と助手が見送ってくれる。村の広場と入口にアコウの大木が何本もの幹を立てている。2本のアコウの距離は100mばかりあるが、そこには人頭柱が10本立っていたそうである。籠に頭を入れ、柱の上に置いたのだという。羅銜が説明してくれる。佤族の首狩りは豊作祈願の行為で、1958、59年まで行っていた。銅鼓祭りを最後までやっていたのも佤族である。その豊作儀礼の様子を見て来たかのように言う。司祭が水牛のまわりを回り、まず尾を切る。集まっている100人ばかりの青年達が蛮刀で肉を削り、骨だけにしてしまう。もし祭りの頃に見知らぬ男が付近に入り込むとその男も犠牲にされ、首を切られる。近隣の村へ首狩りに行き、首をもって帰ることも屢々で、それらの首を人頭柱においた。娘達が人頭柱の首に卵

を投げつけてこう言う。気の毒な旅人、気の毒な犠牲、豊作のためなのよ。尹紹亭の前掲書によると、1950年代の佤族の村は防衛的施設が顕著だったようだ。村の周りに濠をめぐらし、濠沿いには障害物を置く。村入口は尖った木で門を組み、門に入る道は20～30mの間が深さ2mの濠で、それを挟むようにイバラを差し込んだ木柵を設置したとある [同上書：76]。

西盟の町中に私設の佤族展示館がある。それは西盟佤族自治州政治協議員の貝隋嘎さんの所有で、本人は北京出張中の為会えなかったが、奥さんに会った。貝さんは西盟佤族の40代にわたる遷移史を誦することができる司祭である。滄源にある岩画や諸葛孔明の話も登場するのだと奥さんの話である。遷移の過程ではタイのチェンマイや、ビルマに居住した頃の話もあり、そこで仏教にも巡りあったのだという。滄源の岩画は私も見たが、広西明江の花山崖壁画、タイのウボン近く、パテームにあるメコン河岩壁壁画などとよく似たモチーフを赤い顔料で描いたものである。尤もこれらの岩画は相互に関係がありそうでも、他の傍証がなく、漠然とした印象にとどまっている。岩画だけなら寧夏にも賀蘭山岩刻画があり、内蒙古にはそれこそユーラシアに跨る規模で分布する角羊の岩刻画がある。

ユーラシアに跨るといえば、例の叫谷魂を、貝さんの奥さんが実演してくれた。王雅村の書記は pug'aa yantnya yantnya と何の抑揚もなしに言っただけだが、貝婦人は、掌を上にして前へ出し、おいでおいでのジェスチャーをしながら、yan (中音), pug'aa (低音), oo (高音), yan pug'aa oo と歌うように、実にメランコリックな調子であった。pug'aa は稲魂、yan は帰っておいでである。この調子は例えばスラウェシのトバダ族の女司祭が稲刈りの喜びを死者から隠し、死者を装い、生気を殺して悲しみの演出で初穂刈りをするを思い起こさせる。フレイザーの「金枝篇」につながる話だが、これは以前に書いたことがあり、ここでは深追いはやめる [古川 1991]。

謝 辞

本報告は文部省の科学研究費補助金（国際学術研究）を受けて行った2回の調査に基づくものである。1回目は1990年～91年度の「中国における農業生態空間の展開と人の移動に関する歴史的研究」（代表古川久雄）、2回目は1995年度の「森林の大陸間比較」（代表山田勇）である。記して関係各位に御礼申し上げたい。

2回の調査に御協力頂いた中国の方々に深い感謝の念を申し述べたい。特に共同研究者として多大の御教示を頂いた尹紹亭氏（雲南民族博物館）、羅二虎氏（四川大学）、調査に御協力頂いた羅鈺氏（雲南民族博物館）と同僚の方々、我々の共同研究に深い御理解と多大の御支援をくださった雲南民族博物館館長高宗裕先生に篤く感謝の念を申し述べます。

参 考 文 献

- 愛宕末男（訳）. 1970. 『マルコポーロ東方見聞録』 1（東洋文庫158）. 平凡社.
 方国瑜. 1987. 『中国南西歴史地理考釈』 上巻. 中華書局.
 費孝通；宋恩常；大林大良. 1990. 『雲南の少数民族』 日本放送出版協会・雲南人民出版社.
 古川久雄. 1991. 「マライシアの農耕系譜」『東南アジア研究』 29(3)：235-305.

古川：雲南民族生態誌

- 甘肅省文物隊他. 1985. 『嘉峪関壁画墓発掘報告』 文物出版社.
- ハーヴィ, G. E. 1943. 『ビルマ史』 五十嵐智昭 (訳). 北海出版社.
- 何光岳. 1990. 『楚滅国考』 上海人民出版社.
- 江玉祥. 1993. 「広漢三星堆遺跡出土的象牙」 『三星堆与巴蜀文化』 李紹明; 林向; 趙殿增 (編), 198-204 ページ所収. 巴蜀書社.
- 金観涛; 劉青峰. 1987. 『中国社会の超安定システム——大一統のメカニズム』 若林正丈; 村田雄二郎 (訳). 研文出版.
- 加藤久美子. 1997. 「シップソーンパンナーにおける『中央』と『地方』——ムアンチェンフンと周辺勢力との関係をめぐって」 『東南アジア史の中の「中央」と「地方」』 吉川利治 (編). 西日本地区東南アジア史研究会.
- 小竹武夫 (訳). 1977. 『漢書』 上卷 (地理志第八上). 筑摩書房.
- 京大東洋史事典編纂会. 1980. 『東洋史事典』 東京創元社.
- 麗江納西族自治州志編纂委員会. 1991. 『乾隆八年纂修麗江府志略』.
- 竜中. 1985. 『中国西南民族史』 雲南人民出版社.
- 馬曜 (編). 1983. 『雲南簡史』 雲南人民出版社.
- 蒙默; 劉琳; 唐光沛; 胡昭曦; 柯建中. 1988. 『四川古代史稿』 四川人民出版社.
- 明宋濂等撰. 『元史』 卷210列伝97外夷3編. 中華書局.
- 野口定男 (訳). 1972. 『司馬遷著史記』 下卷 (中国の古典シリーズ1), 西南夷列伝, 司馬相如列伝, 大宛列伝. 平凡社.
- 応地利明. 1995. 「犁・インド化・インド国民軍——東南アジアでの観察から」 1995年11月9日京大東南アジア研究センター研究討論での口頭発表.
- 仁美鏑 (編). 1986. 『中国の自然地理』 阿部治平; 駒井正一 (訳). 東京大学出版会.
- 邵宛好; 沈柏華. 1993. 「雲南普洱茶發展簡史及其特性」 『農業考古』 1993年第4期: 50-54.
- 渡部 武. 1991. 『画像が語る中国の古代』 平凡社.
- 呉征鎰; 金振洲. 1980. 「雲南植被的植物区系組成」 『雲南植被』 第2章 (雲南植被図編写協学会議). 科学出版.
- 尹紹亭. 1989. 「試論雲南民族地理」 『地理研究』 8(1): 40-48.
- . 1993. 『雲南刀耕火種志』 雲南人民出版社.
- 雲南省博物館 (編). 1959. 『雲南晋寧石寨山古墓群発掘報告』 文物出版社.